
【原作】石ノ森章太郎　永井豪　【著】早川正
サイボーグ009 VS デビルマン
トゥレチェリイズ～裏切り者たち～
角川文庫

サイボーグ009VSデビルマン

トゥレチェリイズ～裏切り者たち～

原作　石ノ森章太郎　永井 豪

著　早川 正

角川e文庫

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

存在は定義によって変容する。
その力を得て、人を超える存在となれば、
人は、神々や悪魔になれるのか？
そのとき、天使は何を思う――？
彼らは人でなくなり、
〝裏切り者〟《トゥレチェリイズ》と
呼ばれるだろう。
だが、そなたらは背徳者なのか――？

選ぶがいい——。
なりたいものに、なれるのだから。
N・ウッドストーン

目次

プロローグ

雪に埋もれた森林――。
遠い異国の極寒の大地の何処かに、その施設はあった。
静寂が聴こえる程の夜。
外には、ゆきうさぎの気配すらなかった。
精密機器の工場のように見える近代的な施設は、降りしきる雪に覆われていた。
その片隅の、小さな灯りが燈る狭い部屋の中に、幼い姉弟がいた。
〝お姉ちゃん、家族って、何――?〟

〝ごめん……。私にも、わからない――〟
二人は言葉にせず、〝心〟で話していた。
〝どうしてボクたちには、お父さんやお母さんがいないの――?〟
〝ごめん……。お姉ちゃんにも、わからない……〟
姉も弟も、双子の姉弟ということを覚えているだけで、二人とも、ここに居る理由すら知らなかった。
幾つかの理由が抜けていた。
それはこの二人だけでなく、別の窓の中に居る子供たちも同じだった。
〝どうして? ねえ、どうして……。どうしてなの……?〟

疑問を反復する〝声〟が、いつも聴こえていた。

テレパシー《精神感応》は、直接、脳に届き、二人は〝心〟を共有しているのと同じだった。姉には弟の〝声〟が聴こえているのが当たり前の日常だった。

お蔭（かげ）で寂しくはなかった。でも——姉も答えを知らない。

子供たちは、比べるべき、外の世界も知らなかった。

〝何故だろう……？　お姉ちゃん——？〟

〝わからない——〟

結局はその繰り返しだった。

外の世界も知らず、その能力が特別のものであることも認

識せず、ここに居る理由すら知らない――。

白衣を着た大人たちに言われるがままに生き、その場所に集められた子供たちは成長した。

インテンショナル・ミュータント《意図的突然変異体》。

大人たちは施設に集められた子供たちのことをそう呼んだ。

昼下がりの都会の空は鉛色だった。

幹線道路を行く大型トラックの騒音が雲の天井に反響し、重く湿り気のある籠(こも)った空気を圧(お)しつけた。

街路樹の銀杏（いちょう）は黄葉を始めている。例年に比べれば冷夏といわれていたが、それでも都市部特有のアスファルト反射のせいで残暑はそれなりにキツく、往き交う人は皆、額に薄ら（うっすら）と汗を浮かべていた。

駅前広場から続く遊歩道の人ごみを涼しげな表情をした青年が歩いていた。薄いグレーのアロハに伸縮性のある水色のデニムを穿（は）いていた。

ボリュームのある栗色がかった金髪はうなじから後ろへと自然に流れ、歩く度に僅（わず）かに揺れた。彫りのある顔立ちだが日本人の特徴もあり、均整のとれたプロポーションはメンズ

ファッション誌のハーフモデルのようだった。

　赤信号に止められた青年はスクランブル交差点の前で立ち止まり、空を見上げた。人と車の喧騒（けんそう）。ビルの隙間から辛うじて鉛色の空が見えた。不意に強いビル風が吹き荒（すさ）んだ。汚れた街が煤（すす）を払うかのように呼吸しているようだった。

　もし、衛星からここを見下ろせば、都会のビル群は繁殖した菌類のように広がっているに違いない。自然の大地をすっぽりと覆って成長し、呼吸する人工物の塊——。

　見方によれば、まるで、街そのものも巨大な機械生命体だった。

——僕も、似たようなものかもな……。

それは虚無の境地の呟きだったのかも知れない。仲間と共に一先ず日本に落ち着き、自分の置かれた状況を把握するにつれ、青年は戸惑いと覚悟を繰り返していた。

人類は文明の発達を誇らしげに謳歌している。だが、進歩と繁栄を手にしているように見えても、その闇について意識する者は少ない。歪な科学の享受は、同時に世界を蝕んでもいた。調和は人の立つ視点からだけでは判断できない。

信号機が歩行者の色に変わり、瞬く間にスクランブル交差点が人で埋まった。

〝ジョー、聴こえる——？〟

〝ああ、フランソワーズ——〟

島村(しまむら)ジョー《009(ゼロゼロナイン)》は脳波通信で応(こた)えた。表情も変えず、交差点に溢(あふ)れる人々には悟られない交信だった。

〝そろそろ目的地よ——〟

フランソワーズ・アルヌール《003(ゼロゼロスリー)》は海原を見下ろす〝断崖(だんがい)の屋敷〟から交信していた。

ジョー《009》の居場所はＧＰＳ《衛星利用測位システム》の座標とジャックした街の監視カメラで追尾していた。

昨日、屋敷に設置してある全方位レーダーが不思議な反応

をキャッチした。微（かす）かな重力異常だった。それは天候の変化によっても起こる誤差の範囲だったが意図的に起きたとすれば、それだけの特殊な設備を有するものの仕業になる。もしそうなら、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）に関係するカムフラージュ施設の可能性もあった。

その可能性は極めて低いものだったが可能性がある限り放っても置けず、ジョー《009》は一人で確かめに来たのだ。

〝着いたよ、フランソワーズ――〟

〝ええ、間違いないわ。反応のあった場所よ――〟

繁華街の裏通りにある古ぼけた病院だった。

入院施設もあり、鉄筋三階建ての建物は古いながらもそれなりに目立っていた。一見すると都心に多い狭小の小学校のようにも見えた。

表から覗(のぞ)くと内側のロビーで人影の動く気配がした。看護師か何かのようだった。

〝調べてみるよ。何か解かったら連絡する――〟

ジョー《009》は脳波通信を終えると、古い鉄柵(てっさく)の塀越しに病院の周りを歩き、先ずは周囲を確かめた。

裏通りでもそれなりに人の往来はあった。

一角の裏は都会の繁華街で、ほとんど同じ高さの雑居ビル

に囲まれており、丁度そのエリアの中心が、ビルとビルの狭間(はざま)を抜けた隠れた空き地になっていた。
裏側の空き地から病院を見上げると、三階まで並んだ裏窓は全て閉まっていた。窓下に外付けされた古いエアコンの室外機が壊れかけた音をたてている。
窓の内側も大半は白いカーテンで塞(ふさ)がれていた。廃業している訳でもなさそうだが、外来患者を積極的に受け入れているという雰囲気でもなかった。
突然——その何処かの病室から硝子(ガラス)が砕け、何かが激しく倒れる音がした。

「んッ――?!」

フランソワーズ《003》ほどのサーチ能力は無いが、プロトナンバー・サイボーグの総合的な試作運用体であるジョー《009》は加速装置の超高速に順応する聴覚の強化・調整もなされている。

瞬時にその異常を察知し、裏の空き地から雑居ビルの屋上に跳躍した。

ほんの一瞬だった。もし、ジョー《009》を見ていた者が居たとしても、その動きを捕捉(ほそく)できる者はない。

それでも最小の加速装置による蹴(け)り出しと人工筋肉の跳躍

力しか使わなかった。ジョー《009》がその特殊能力である加速装置をフルに使えば、音速の三倍までなら安定した加速が得られた。

だが、それをまともに発揮すれば肉体の摩擦とソニックブームにより通常の衣服は瞬時に燃え尽き、ジェット戦闘機並みの衝撃波が轟音（ごうおん）となって炸裂（さくれつ）した。ジョー《009》たち改造人間（サイボーグ）にとっては能力をセーブするのも不可欠な心掛けだった。

三階の病室の窓硝子が、白いカーテンを引き千切りながら内側から砕け散った。

何者かが——中で闘いを始めた！

ジョー《009》は雑居ビルの屋上から病院を眺めた。
激しい闘いが始まっている。病室の内部で衝撃と破壊の連鎖が始まった。
複数の者たちが弾（はじ）き合うように闘う気配だ。
音の主たちは見えない。音は三階の病室を駆け抜け、廊下を移動し、中の階段を昇り、上へと向かって来た。
透視能力を持つフランソワーズ《003》なら見えていただろうに……と、ジョー《009》は思った。
——何が起きてるんだ……?!
病院の屋上に出る扉が吹っ飛んだように蹴り開けられ、

ショートヘアーの女子高生をおぶった青年と、もう一人、薄い金髪の青年が飛び出して来た。背中の女性は気絶していた。

　薄い金髪の青年は少し大人びて見えたが、三人とも高校生のようだった。続いて、常軌を逸し、本能を剝き出しにしたような者たちが十数名、手に手に刃物や武器になりそうな物を持って屋上に現れた。

　驚くべきことに、それはこの病院の医師や看護師、外来患者に入院患者と思われる人々だった。

　先に飛び出して来た三人は屋上の中央に囲まれるようにして追い詰められた。

気絶した女子高生をおぶっているのに、その青年は落ち着いていた。

薄い金髪の青年も闘いに慣れているようだった。普通の人間が所持する必要も無い特殊警棒を握り、余裕を浮かべた笑みで構えている。

狂気の集団は一斉に襲い掛かった。

二人の青年は凶刃を躱(かわ)しながら反撃に出た。

女子高生をおぶっている青年の動きは野生の獣そのもので、鋭く、しなやかで、人一人を背負っていることさえ感じさせない動きだった。

高校生の喧嘩のレベルでは無かった。爛々と目を輝かせ、手加減など無く、急所を渾身の一撃で狙っている。薄い金髪の青年も容赦なかった。相手の顔面に特殊警棒を振り下ろし、襲って来た医師や患者たちは次々と血飛沫を飛ばして倒れた。

どちらがより危険な狂気なのか、ジョー《009》は、目の前で起きている状況を測りかねていた。

正しく、白昼の悪夢だった。

今、屋上で繰り広げられている闘いは、人の闘いと呼ぶには余りにも野性的であり、粗暴で暴力的で本能的だった。何

かが違っている――。

武器を手に青年たちを追い詰める狂気の集団も説明が付かないが、応戦する青年たちも只者(ただもの)ではなかった。

寧(むし)ろ、こと、闘い方にかけては青年たちの方が突き抜けて残虐にも映った。彼らが気絶した女子高生を守っていなければ、ジョー《009》は間違いなく敵として認識していたに違いない。

助けるべきか迷っていると青年たちが手加減なく闘っている理由の一端が見えた。

血塗(ちまみ)れになって倒れたはずの医師たちが、さながらゾンビ

映画の如く、むくむくと立ち上がり、潰れた顔もお構いなしに再び襲い掛かり始めた。

——何だッ……?! どうなってるんだ……!

何らかの薬物によるバーサーカー状態なのかも知れないと考えた。

——加速装置ッ！

衝撃波を起こさない、ぎりぎりの加速空間を維持した。それでも通常の人間にジョー《009》を目視で確認するのは不可能だった。

物理的な風圧がメリメリと空気塊を裂く音をたてるが、そ

の音に反応できる反射神経は常人にはない。
だが――女子高生をおぶった青年の眼だけは、ジョー《009》が高速移動で生み出したその音を追っていた。
――まさかッ……?!　僕の動きを、気配で感じているのか……！
ジョー《009》の感覚では相対速度で停止しているように見える青年は、目の前に迫り来る狂気の集団に集中している――にもかかわらず、遅れてはいるものの、視線だけは確実にジョー《009》の動きを追尾していた。
――彼は一体ッ……？　何者なんだ……！　んッ……?!
ゾンビの如き医師たちの首の後ろに、その骨髄を突き刺す

ようにして尻(しり)針を埋めた小さな蜘蛛(くも)のような生き物が止まっていた。
他も確かめると、狂気の集団のすべての者たちの首にそれは寄生していた。
——これが原因かッ……！
ジョー《009》は加速空間の中でスーパーガンを取り出し、すべての蜘蛛を焼き払った。
その途端、狂気の集団たちは糸を切られたマリオネットのように崩れ、一斉に倒れて動かなくなった。

女子高生をおぶった青年は気付いていた。

もう危険がないと判断すると傍らに居る薄い金髪の青年と目を合わせてから、隣接する雑居ビルの屋上を顎（あご）で示した。

「ん――？」

薄い金髪の青年もジョー《009》と同じくハーフのようだった。どこか冷たい感じのする飛鳥了（あすかりょう）は促された方向を見た。

不動明（ふどうあきら）は補足した。

「今、俺たちの横を、とんでもなく速く、通り過ぎた――あそこに居る」

目を凝らして見ると、隣接する雑居ビルの屋上に人影が見えた。
そこには、加速を解いた島村ジョー《009》が静かに立って居た。
ビル裏の空き地を挟み、両者の間には五十メートル程の距離があった。
「ヤツか――」
「あいつがラズバの子蜘蛛どもを倒したんだ。一瞬でなッ――」
「一瞬で――。どうする――?」

不動明は背中で気絶している牧村美樹(まきむらみき)を見た。気を失ってはいるが、安心して身を委(ゆだ)ねている表情をしていた。
「こんな美樹が一緒だからな。深追いはしたくない――」
「そうだな。それに警察が来る前に、ここから離れた方が良さそうだ。デーモンが奴らの都合でこの騒ぎの痕跡(こんせき)も消してくれたとしても、今、俺たちが警察に見付かれば、間違いなく現行犯だ――」
「違いねえ――」
不動明はあどけない少年のように笑んだ。
病院の屋上にはラズバの子蜘蛛に憑依(ひょうい)された人々が血塗れ

で倒れていた。病院の中も似たようなものだ。幸い、飛び入りとして闘いに加わったジョー《009》のお蔭で憑依された人々の命までは奪わずに済んだが、ここまで彼らをボコボコにしたのはこの二人に違いなかった。

ジョー《009》はフランソワーズ《003》と脳波通信で話していた。

〝何があったの――?〟

〝妙な事件に出くわしてしまった感じだよ。後で報告するけど、ブラック・ゴーストとは違うみたいだ。もっと生物的な何かだ。確認は必要だけど、出直した方が良さそうだ――〟

ジョー《009》はあの青年の醸し出す言い知れない暴力的な

気配から、今、無理に距離を詰めるのは危険だと感じていた。

闘うことに不安はないが、あの青年の脳汁《エンドルフィン》に支配され、本能で闘うような戦闘は、一度火が点けば止められそうもなかった。そうなれば互いを知りたくとも話し合いどころではなくなり、闘うしかない。ジョー《009》自身、感情に左右される部分もあり、そのことを本能的に気付いていた。

両者はまだ、互いの存在を知らなかった。

改造人間（サイボーグ）、島村ジョー。悪魔人間（デビルマン）、不動明。

交わるはずの無かった両者の道が、今、少しずつ、交わろうとしていた。
互いに背を向けた両者は、背にそれぞれの気配を感じながらその場を離れた。
出会うのが運命なら、そのときは遠からずやって来る――。島村ジョー《009》も不動明《デビルマン》も同じことを考えていた。

ウクライナ・三年前――。
首都キエフの独立広場では大統領の退陣を要求する抗議デ

モが日に日に人数を増し、二十万人に届こうとしていた。広場や大通りを埋め尽くす集会は昼夜を問わず続いたが、集まった人々は決して暴徒ではなかった。

無論、反政権派デモ隊の市民と治安部隊との衝突は危惧されていたものの、武器を持たない市民たちはプラカードや横断幕や旗を持って〝意思〟を伝えるだけで、過激な行動に出て武装衝突を招くまでには至らないだろうと思われていた。

それでも親米派の西側と親露派の東側が睨み合い、ウクライナは東ヨーロッパとロシアの狭間にあり、財務危機、選挙問題、それに合わせ欧州連合《ＥＵ》の存在やエネルギー問

題、さらには過去から蓄積する歴史的な思想・主義などが絡み合い、混乱の最中にあることは事実だった。

キエフ・ジュリャーヌィ国際空港に到着したウィリアム・ドルフィン教授とその妻のクレメンスと娘のシンシアは、空港前の車寄せから迎えの車に乗り、市街地の外れにあるホテルへと向かっていた。

学会から市街地の三ツ星ホテルに宿を用意するとの話もあったが、ウィリアムは国の情勢も気になり、自分で予約すると、やんわり理由をつけて断っていた。

空港の敷地から出て都心部に近付くにつれ、キエフの独立広場から広がった集会やデモ行進の影響で大渋滞に巻き込ま

れた。

「この頃は、いつもこんな具合ですよ」

学会が気を利かせて付けてくれた運転手が眉間に皺を寄せて言った。車もこの辺りにしては立派なものを用意してくれていた。黒塗りのリムジンとはいかないが、日本製の大型ボックスカーでＶＩＰ用に強化された防弾車のようだった。

「政府と市民との衝突は、避けられそうにもないのかな――？」

ウィリアムは渋滞とは似つかわしくない美しい石造りの街並みを見ながら尋ねた。

「今のところ、広場では演説とコンサートをやってるくらいですがね。どーも最近、煽(あお)り立てて楽しんでいるような輩(やから)も混じって来ましてね。奴らに乗せられたら、どうなるかわかりません」

それを聞いたクレメンスは同情と不安の表情を浮かべた。

娘のシンシアは街並みを見て、渋滞の中でも異国の風景を楽しもうとしていた。ときおり見える石畳の小路は、まるで映画の一場面のように美しかった。

車は渋滞で停められながら、また進み、また渋滞に停められるのを繰り返した。

中心市街地を避け、ボヤルカ地区に抜ける十字路を右折し

ようとしたとき、シュリシュリと空気を擦（こす）る音が上方から聴こえた。

「なんだ……？」

その音と共に、それは細長い煙を残しながら十字路の真ん中に落ちて来て——突然、爆発した。

ドゴガッ、ボゴワーン！！！

土砂が巻き上がり、一瞬で視界が加速回転し、脳が遠心力で激しく振り回された。

意識が飛んだ。

——死んだのか……？

状況も把握出来ないまま、ピィイイイイン――！　と、強烈な耳鳴りだけが支配した。
何が起きたのか分からなかった。
直撃ではなかったが、その瞬間の爆風で日本製の大型ボックスカーはひしゃげながら空中を数回転し、路面に何度もバウンドして、屋根を下にして滑り、漸（ようや）く止まった。
十字路を通過しようとしていたすべての車が爆発ポイントを中心に一瞬にして円状に転がった。動くものはなかった。鳴りっぱなしのクラクションと高級車の警報音だけが騒がしく鳴り続けていた。
爆炎と白と灰色の煙が立ち上り、道路沿いの建物は、その

揺らぎ越しにしか見えなくなった。

七十五ヤード（凡(およ)そ六十八メートル）程離れたビルの屋上から発射された89㎜ロケットランチャーだった。

　その屋上から被害状況を確認している黒いコンバットスーツに身を包んだ一個小隊が居た。知っている者なら、それが第二世代の《サイボーグマン》たちと、それを指揮する黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)の隊長だと分かっただろうが、彼らがそこに居ることを知る者も、黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)の存在を知る者も、そこには居なかった。

　部隊は目と口を隠す戦闘用多目的ゴーグルを着用していた

が、隊長と思しき男だけは頭をすっぽりと鉄仮面で覆っていた。鋭い目と、意志の強そうな口元しか露出していなかった。

「ターゲットへの攻撃を完了――。回収部隊は速やかに目標の移送を開始しろ――」

鉄仮面の男が独り言のように低い声でそう言うと、仮面に反響して漏れた相手の通信音声が、僅かに〝了解――〟と聴こえた。

眼下を見下ろすと、緊急サイレンを鳴らしながら救急車に偽装した回収部隊がイノシシのように猛進して行くのが見え

た。

悪魔人間（デビルマン）

人間はときおり、人間とも思えない凄惨(せいさん)な行動を取ることがある。
果たして、それは本当に人間の仕業なのだろうか――？
〝魔〟が差した程度のことなら、その人間の落ち度として詰(なじ)ることも出来るが、それが、〝人ならざる者〟が介入した仕業となれば、最早(もはや)、言葉にすることも憚(はばか)られる、語ることの出来ない事件だった。
そしてその多くは、事件の存在すら認知されず、ただ、人だけが消えている。

日本だけを例に取っても、一年間で殺人による死亡者の数は凡そ千人。
何らかの犯罪絡みと認知されている失踪者は凡そ一万五千件。行方不明だけならば、年間、十万人に届く人々が何処へとなく消えている。
それがどれ程の規模なのかは、人気アーティストのコンサートを思い浮かべれば分かり易い。
ドームやアリーナの規模では到底足りない。普段はアスリートたちが駆け廻るトラックまで、ぎっしり観客席を敷き詰めて国内最大のキャパになる国立競技場。

それが満員になった人数とほぼ同じ数の人間が一年で消えていることになる。

大通りから一本入った静かな住宅地に飛鳥了が最近購入したデザイナーズマンションがあった。父と暮らした洋館は父と共に燃え、その代わりに確保した住処だった。

了はソファに踏ん反り返っている不動明に無表情で語った。

「いくら、一億三千万人近くの人口があるとしても、死亡も確認出来ず、たった一年で十万人が失踪しているのが、俺た

ちの居る、この世界だ――」
「十万人か――。そこまでとは――思わなかったがな――」
　不動明は感覚と現実の差を感じた。
「俺たちは、麻痺（まひ）させられているんだ。奴らは巧妙だ。人間の世界に介入しても、その行動を悟られないように注意している」
「そういや、美樹はデーモンに襲われたことを、覚えてねえみたいだしな――」
　明が厄介になっている牧村家がデーモンの襲撃を受けたのは、つい、この前のことだった。

「それだけじゃない――。記憶どころか、どういう手を使ったかは知らんが、戦いで物理的に破壊された物まで元通りにして痕跡を消している――！」

「まあな――。あれだけ暴れて、いくら何でも警察が動かないのは、妙だとは思っていたが……」

事の始まりは一月程前。

大人しく、気が優しくて虫も殺せない高校生だった不動明は、突然、旧友である了の訪問を受け、火事で燃えた飛鳥家の屋敷址を訪ねた。

異常な出来事は、そこに向かう途中から既に起きていたが、屋敷址で了が仕掛けた恐ろしい罠は不動明の人生を一変

させた。

太古に存在したデーモン――。

彼らは個体ごとに全く違う能力を持ち、合体することで進化する生命体だった。

その闘争本能と生存能力は余りにも強力で、世界のバランスを崩し兼ねない脅威となり、〝ヒト〟が誕生する以前の地球に於(お)いて、霊長類として君臨した。

だが、何者かの意思により、彼らは物質体を失い、一度は世界から淘汰(とうた)された。

しかし、躰(からだ)を失い、眠れる精神体になってもデーモンはま

だ生きていた。
眠っていても奴らは人間の〝心〟に侵入し、〝悪魔〟として、人々の記憶に度々現れた。
悠久の時を経て、今、再び目覚め始めたデーモンは、この世界を人間から取り戻すために暗躍を始めていた。
目覚めた精神体のデーモンは物質体を持つ存在と合体することで、再び肉体を得ることが出来る。そしてその際、〝欲望〟を有する者同士であれば、より強い存在が残り、他者は能力を吸収されて消えていく。それがデーモンの進化だった。
この事態に真っ先に気付いたのは、飛鳥了の父であり、神

学にも通じていた考古学者の飛鳥巌（あすかいわお）だった。

彼は研究の過程で自らもデーモンに変容しながらも、沸き上がる狂気に抗（あらが）いながら、知り得た全ての知識を了に伝えたのち、覚悟の焼身自殺を遂げて、自身の中のデーモンを葬り去った。

それは正しく、了にとっては〝恐怖の遺産〟以外の何ものでもなかった。

飛鳥了は父から得た情報を手掛かりに、人類がデーモンに対抗し得る手段を模索した。

そして、その唯一の答えが——悪魔人間（デビルマン）だった。

——デーモンの能力を有し、人間の〝心〟を保ち続けられる存在ならばデーモンとも闘える……！

だが、そのためには、二つの条件を満たさなければならなかった。

弱いデーモンと合体しても意味がない。

勝ち続け、生き残るためには、考え得る限りの最強のデーモンと合体しなければならなかった。

そのデーモンとは、最強の戦士として悪魔伝承として伝わる勇者アモンであるとの確信を得ていた。

そしてもう一つ、アモンと合体しても、人間の〝心〟を絶対に失わない人間を選ぶこと——！　それが何よりも重要

だった。
了が白羽の矢を立てたのは、旧友の不動明だった。
明は三ヵ月程前に事故で両親を亡くし、一人になっていた。
明の両親を襲った事故については幾つかの疑問も残ったが、了にとって、今は重要なことではなかった。
一人になった明は、以前から家族ぐるみで親しかった牧村家の恩顧を受け、そこに居候をしていた。
不動明は、元々、大人しく穏やかな性格だったが、突然、訪れた不慮の境遇に、一頃は以前にも増して口数が少なくなっていた。

かと言って、暗く沈み、ただただ落ち込んでいる訳でなく、居候先の牧村家にいらぬ心配をかけまいと、同い年の美樹やその弟の太朗と穏やかに暮らしていた。

普通の者なら、突然置かれた状況に馴染（なじ）むため、自身の情緒を保つためのささやかな適応と思うかも知れない。

だが、飛鳥了はそうは思わなかった。

不動明のロジックの中心にあるのは、自身のための思惑や帳尻（ちょうじり）合（あ）わせではなく、他者への絶対的な優しさだった。

ずっと以前から不動明を見て来た了には理屈を超えて解かっていた。

明の性格は熟知している。
――お前はどこまでも優しい……。どこまでも優しいお前なら、〝悪魔〟の誘惑に打ち勝ち、人間の〝心〟という枷（かせ）を守り抜けるはずだ……‼
明以外、思い付かなかった。
了は屋敷址の地下室で計画を断行した。
その行為が〝是か非か――〟など、今は関係ない――。
迷えば人類がデーモンに滅ぼされるだけのことだと了は理解していた。
そして、了の睨（にら）んだ通り、不動明はアモンとの合体に見事

成功し、悪魔人間（デビルマン）となって〝悪魔〟の力を手に入れた。

明の性格は凶暴な野獣の如きものに変わったが〝心〟は人間のままだった。平常は人の姿も維持でき、日常の生活に支障を来すこともなく、明は何とか新しい躰と折り合いをつけていた。

暫（しばら）くすると、アモンの力を奪った悪魔人間（デビルマン）《不動明》にデーモンが攻勢をかけ始めた。

ゲルマー、アグウェル、それに、シレーヌにカイム。デーモンたちは目の上のたんこぶとして不動明を狙った。

誇り高きデーモンにとって、勇者アモンが人間如きに乗っ

取られたことは、これ以上ない屈辱だった。

〝裏切り者〟という意味合いとは少し違うが、彼らから見れば、味方の急先鋒（せんぽう）だったアモンの能力を逆に奪い、悪魔人間（デビルマン）となった不動明は、その能力についてはアモンが裏切ったのと同じか、それにも勝る脅威だった。

不動明はアモンの力でそんな敵たちを悉（ことごと）く返り討ちにした。

「シレーヌとカイムはデーモンの中でもかなりの強者だった。それを破ったんだ。流石に、奴らも動揺しているはずだ」

「まあなッ」

明は粗暴に答えたが、シレーヌとカイムの最期を想い、武勇の誉れを讃えていた。

それは明の中に〝闘い〟を好むデーモンの嗜好が広がっている証でもあった。

戦いの最中、カイムは自らの命を捨てることでシレーヌと合体し、その一部となり最後の力をシレーヌに捧げた。明《デビルマン》も限界だった。倒れ、動けず、止めを刺されるのを待っていたようなものだった。

――あと一撃があれば、俺は確実に敗けていた……。

だが、シレーヌは襲っては来なかった。

カイムと合体して僅かに存えたものの、シレーヌもまた限界を迎えていた。

気が付くと朝焼けの草原に、カイムと合体したシレーヌが骸となり、彫像のように立っていた。

シレーヌは四足の鎧竜にも似た逞しいカイムに跨ったかのように、すっくと背筋を伸ばしていた。

朝日が照らしていた。

頭から生えた翼の片翼は千切れ、片腕も失っていた。血塗れの顔はカッと目を見開いたままだったが、その姿は醜く恐

ろしいはずなのに、デビルマンとなった不動明には、何故か限りなく、美しく感じられた。
「で、お次はどうすんだ——了？」
「先手を打つ——。敵の足並みが揃う前に、隠れている奴らをこちらから狩りたてる——。俺たちが、悪魔狩人(デーモンハンター)になるんだ——！」
そう言うと、飛鳥了は口元だけで微(かす)かに笑んだ。
「いいねえ——、暴れられるんなら、何でもいいぜッ——」
爛々(らんらん)と瞳(ひとみ)を輝かせる明の表情こそ、了には、本物の悪魔の微笑みに思えた。

改造人間（サイボーグ）

試作改造人間（プロトサイボーグ）。開発実験体〝ゼロゼロナンバー〟。

彼ら九人は、生まれた国も与えられた能力も異なっていたが、同じ悲しみを背負っていた。国際社会の〝闇〟で暗躍する〝死の商人〟、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）により拉致（らち）され、サイボーグ手術を受けて再び目覚めた時には、もう、生身の〝人間〟としては括（くく）れない特別な身体に変えられていた。

００１（ゼロゼロワン）。ロシア出身。イワン・ウイスキー。

サイボーグ能力：強化頭脳、ＥＳＰ能力。実の父親による脳改造手術を受けてＥＳＰ能力に目覚める。

００２（ゼロゼロツー）。アメリカ出身。ジェット・リンク。
サイボーグ能力：飛行能力、及び加速装置。脚部の飛行ユニットにより、空中を自在に滑空できる。

００３（ゼロゼロスリー）。フランス出身。フランソワーズ・アルヌール。
サイボーグ能力：超聴覚・超視覚。情報収集と解析に特化したサイボーグ。

００４（ゼロゼロフォー）。ドイツ出身。アルベルト・ハインリヒ。
サイボーグ能力：全身武器（マシンガン、電磁ナイフ、マイクロミサイル等）。武器内蔵型の戦闘用サイボーグ。

００５（ゼロゼロファイブ）。アメリカ出身。ジェロニモ・ジュニア。

サイボーグ能力：強化皮膚・怪力。物理的防御力とパワーを強化させたサイボーグ。
００６（ゼロゼロシックス）。中国出身。張々湖（ちゃんちゃんこ）。
サイボーグ能力：火炎及び熱線放射能力。口から吐く熱線により地中に潜り込むことができる。
００７（ゼロゼロセブン）。イギリス出身。グレート・ブリテン。
サイボーグ能力：変身能力。細胞を変化させることで有機物にも無機物にも変身することが可能。
００８（ゼロゼロエイト）。ケニア出身。ピュンマ。
サイボーグ能力：水中活動能力。人工肺を備えており、水

深一万メートル以上の深海でも活動できる。

００９(ゼロゼロナイン)。日本出身。島村ジョー。

サイボーグ能力：加速装置。ゼロゼロナンバーサイボーグの開発で培われた技術を集約させた、万能型サイボーグ。

九人の身体は〝戦争〟ための〝兵器〟であり、黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)がビジネスのために開発した〝商品見本〟だった。

だが九人は黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)の研究員の一人だったアイザック・ギルモア博士の協力を得て、彼らが開発された孤島の研究施設から脱出し、ギルモア博士の古くからの友人であるコズミ博士の居る日本へと身を寄せた。

日本に来て三ヵ月――。
これからの暮らしを考え、身の振り方を考える余裕もなかった。
黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）は組織の全勢力を挙げて執拗（しつよう）に追手を差し向けた。
００９よりスペックの高い加速装置と電撃を操る００10（ゼロゼロテン）の兄弟サイボーグ。多脚式大型機動兵器のボディを持つ００11（ゼロゼロイレブン）。
攻撃型セキュリティシステムの権化とも言えるマーダーハウス・サイボーグ００12（ゼロゼロトウエルブ）。

黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)は九人を直接狙うばかりではなく、協力者であるコズミ博士にまで魔手を伸ばした。

遠くには高層ビル群も視界に入っていたが、段々畑もあり、鄙(ひな)びた海岸線に漁師の家が点在するような町だった。古い町工場の煙突も並んでいた。少し先には、湾に面して工業地帯が見え、20号埋立地に延びるダンプ道が続いていた。

黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)に連れ去られたコズミ博士の手掛かりを追い、島村ジョーは漸(ようや)くここに辿(たど)り着いた。

ジョーの運転する赤いコルベット・スティングレーは静かに路肩の空き地に停車した。
ジョーの国籍は日本だがアメリカ人の父と日本人の母との混血だった。顔立ちは日本的な面影も残した透明感のある優しげなハーフで、髪は父譲りの栗色がかった金髪だった。

　といっても、ジョー自身は父親の顔も名前も知らなかった。そればかりか、本当のところ母の顔も正確には憶（おぼ）えていないし、名前も知らなかった。物心がついたときには養護施設で暮らしていた。

　畑仕事に行く途中の老婆が通り掛かり、車に乗っているジョーの金髪をちらりと見た。

今の時代、金髪が珍しいこともなかったが、都会から離れた場所の高齢者には、ときどき睨（にら）まれることがある。相手に悪気はなくても小さなトラウマは何処かに残っていた。ジョーはそれを一瞬飲み込んで、優しい笑顔で老婆に会釈した。

モデルのように整った顔立ちで、ハイネックの上にハーフトレンチを着たジョーが微笑むと、老婆は「おやっ……」となり、金髪でも、傾（かぶ）いただけの不良少年ではなさそうだと思ったのか、笑顔を返して、ゆっくりと歩いて行った。

子供の頃、似たような境遇同士なのに、そんな中でもギスギスした出来事はときおり起こった。

――よく、髪の色をからかわれたな……。なんで、こんなことを思い出したんだろう……？

周りを見ると、この町が幼い頃に暮らしていた、あの施設のあった町に似ているような気がした。

海を見下ろす山の上には、町の鎮守らしい神社があった。

不思議な郷愁に引き込まれそうになった時、

〝ジョー、その辺りよ――〟

と、脳波通信でフランソワーズ《003》が話し掛けて来た。

「ああ、静かな町だよ」

口で話す必要はなかったが、ジョーは言葉にして応(こた)えた。

〝コズミ博士が連れて行かれたときにキャッチしたキャラクター・フリークエンシー《固有周波》を微かだけど感じるの。近くに居るはずよ――〟
「わかった。捜してみるよ」
〝あたしたちも向かってるから――〟
「ああ」
脳波通信を終えたジョーはコルベットから降り、静かに扉を閉めた。
穏やかな風が栗色がかった黄金色の髪を優しく揺らした。
「ほげぇ」

言葉とも感嘆ともつかない、ほんわかするような声がした。

その方向を見ると、無垢（むく）な表情をした青年がジョーに向けて微笑んでいた。

年齢はジョーと同じくらいにも見えるし、少し若いようにも見える。

見るからに優しげで、どう間違えても人に危害を加えそうもない風貌（ふうぼう）だった。

青年は弛（ゆる）めのソフトデニムを穿（は）き、お腹に太目のストライプの入ったぶかぶかのハイネックセーターを着ていた。それ

なりに背丈もあったので小太りともいえないが、少しゆったりした体形をしていた。
手に持ったコンビニの袋には、ぱんぱんに膨れ上がるほどの沢山の菓子パンが詰まっていた。
青年は笑顔でジョーの前に立った。
「ははは」
「僕に、何か――？」
ジョーが尋ねると、青年はコンビニの袋を手首に引(ひ)っ掛(か)けたまま、両手を使って身振りで応えた。
その姿は懸命さで一杯だった。

――言葉が不自由なのか……？　でも、僕に、一所懸命、何かを伝えようとしている……。

右手の動きが乗り物を表しているようだった。

「飛行機？　車かな？」

車と言った時、「うんうん」と頷いた。

続いて両腕を挙げると、勇ましそうに、「ほげぇー！」と唸った。

――動物園のゴリラかな……？　いや、ゴリラの物真似なら、もっと似せられるか――。ハッ、もしかすると、ロボット……?!

「ロボット――？」
青年は「うんうん」と頷いた。
そのとき、空き地の叢（くさむら）の前にバイクを停めていた若者たちが割り込んで来た。人数は五人。暴走族というより、地元の不良少年のようだった。
「おせーぞ、パン買って来たんなら、早く持って来いッ！」
青年はビクッとして一瞬動きを止めた。
何だか気の毒になり、ジョーは青年がゼスチャーを再開しようとするのを一度遮り、バイクの少年たちの方に歩いた。
「君たち、彼の友達なのかい？」

ジョーが尋ねると、少年の一人がつまらなそうに答えた。

「ダチじゃねえよ。さっき会ったばかりだ。冗談でパン買って来いって言ったら、喜んで行ったんで、待ってただけさ——」

「ひどいじゃないか」

「あんたには関係ねえだろ——」

少年たちに罪の意識は無かったのかも知れない。でも、ゼスチャーの青年から見れば、小さな出会いだが、虚しい一期一会でしかない。

ジョーの脳波通信に、突然、悲しさを纏った声が広がっ

た。
〝トモダチじゃ……ない……〟
脳波通信は単なるシステムだ。調整されたゼロゼロナンバー同士なら肉声と同じように遣り取りも出来るが、偶然に拾った雑周波を〝言葉〟に変換することは無いし、まして、それが〝感情〟を表すことなどあるはずもなかった。
でもジョーは、そのとき確かに、悲しい声を聴いた気がした。
——まさか……？
振り向くと、あの青年は居なかった。

歩道の鉄柵（てっさく）に、パンを詰め込んだコンビニの袋だけが引っ掛けてあった。

悪魔狩人（デーモンハンター）

1

街の灯(あか)りの一つ一つに幸福な暮らしがあると信じられる者こそ〝幸福〟だった。

他の動物と同様に、太古、人の祖先たちは闇に包まれた夜には行動しなかった。

朝を待ち、じっと息を潜めていた。

闇の中から、危険な何者かが狙っていることを本能で知っていたからだ。

戻るべき場所のある者に、一日の終わりがやって来る。

副都心・新宿――。

大都会の〝灯り〟から、ささやかな塒(ねぐら)の〝灯り〟を求めて人は移動する。

中央線の高尾(たかお)行列車はいつものように満員の人々を乗せて出発した。

同じ満員でも日中と違うのは、人々の醸し出す倦怠(けんたい)感だった。

心地よく酔っている者も居るが、多くは疲れ、何もしゃべ

らず、無事に家の〝灯り〟まで辿り着けるのか、半分は祈る気持ちで乗っていた。この時間に乗り合わせた理由は様々でも、思っていることに大差なかった。

淡い〝灯り〟を放つ背を伸ばした橙色の蛇は、都心から離れる度に人を吐き出し、国分寺を越えた辺りで、漸くその時刻に相応しい静けさを得た。

八王子を過ぎると人も疎らになり、レールの継ぎ目と列車の接続部の出す音が、まるで一生続きそうな子守唄になった。

酔い潰れ、すっかり寝てしまっている中年の会社員。一人

離れたシルバーシートに座り、俯（うつむ）いたまま動かない女。自分の降りるべき駅を乗り過ごさないようにか、必死で瞼（まぶた）を開けている大学生らしき若者。

終着駅間近のいつもの風景だった。

闇に塗り込まれた車窓の外はすっかり都市部から離れ、月明かりに山々のシルエットと影を落とした広大な森が広がっていた。

白石美彩（しらいしみさ）はシルバーシートの隅に寄り掛かるようにして俯いていた。ベージュカラーに染めたセミロングの髪は前に垂れ、顔を隠していた。趣味の良いコンサバ系のワンピースを

身に着けていたが、膝丈が微妙に高く、僅かに水商売の気配がした。

目を閉じているが眠っている訳でなく、彼女は日課となった〝自問自答〟を心の中で繰り返していた。

今年、二十七歳だった。美しくスタイルも良く、勝ち組として学生時代を過ごしたが、気が付いたら今の生活から抜け出せなくなっていた。

初めは美しさを持て囃され、自分だから出来る仕事だと思い、スカウトされたキャバクラでキャストを引き受けた。それなりに遣り甲斐はあったし、若い頃はゲーム感覚で仕事に

没頭し、そんな自分を誇らしいと感じることも出来た。嫌なことや、少々違うと思うことがあっても、自分を取り巻く環境の中での〝正解〟を見付ければ良かった。

でも、経験を積むに従い、何かが違う——と思うようになった。

——私の人生は、こんなはずじゃない……！

店ではそれなりの立場も得た。でも、それは古参のキャストとしての特別感と貫禄（かんろく）だけで、悪く言えば賞味期限の早い業界で、この若さにして年寄り扱いされているのと同じだった。

店長やスタッフにも都合のいい女として扱われ、若手の陰

口も聴こえて来た。

自分が属す夜の世界の〝大人〟を演じ、極めれば極める程に、言い知れない孤独感が彼女に押し寄せた。

――許せない……。

自分がこんなに苦しんでいるのに、誰も答えをくれず、皆、自分を騙（だま）している。孤独感はいつしか苛立（いらだ）ちに変わり、向ける場所のない、濁った怒りになった。

美彩の頬に、一筋の涙がつたった。

グリーフ・トランス《嘆きの変性意識》での反復は、デーモンが最も好む人間の生体周波だった。

闇に包まれた美彩の背後の窓に、美しくも悍(おぞ)ましい貌(かお)が浮かんでいた。
〝その嘆き、存分に放つがいい――〟
悪魔の囁(ささや)きは、意識の隙間から侵入した。
精神体のデーモン・ラミアは、闇の中から窓ガラスを抜け、美彩の躰(からだ)に入り込んだ。

2

両の眼を見開き、白石美彩はゆっくりと顔を上げた。

午前九時半――。

規制線が張られ、狭い路地の端に何台ものパトカーがひしめくように停車していた。

夜より日中の方が野次馬が少ない。この辺り特有の〝あるある〟だった。

厳(いか)つい顔をした刑事たちが次々とそのビルの中に入って行った。

新宿歌舞伎町(かぶきちょう)。花園(はなぞの)神社に近い雑居ビルの中に『キャバクラ・ホワイトラブ』はあった。

通報したのは、毎日、水割り用の氷を納めている業者の配

達員だった。このビルは五階建てで、通りに面したエントランスから外階段が二階のテラスに伸びており、二階から上にバーやスナック、キャバクラなどの飲食テナントが入っていた。

その中でも高級な部類に入る『キャバクラ・ホワイトラブ』は、四階と五階の内部をぶち抜（ぬ）いたメゾネットタイプの構造だった。

午前九時、いつものようにアイスボックスを抱えた配達員が四階の店の入口に来ると、閉まっている扉の下の隙間から、粘り気のある赤い液体が溢（あふ）れ出ていた。

配達員は、一瞬、ペンキかと思ったが、鼻に突き刺さるよ

うな鉄の臭いがした。

——血だッ……?!

配達員はすぐさま警察に通報し、東淀橋署の刑事たちが臨場した。

「ひでぇな、こりゃ……」

班長を務める神宮寺道雄は眉間に皺を寄せた。

警察官になって二十年。酷い現場も随分見て来たが、これ程のものはそうなかった。

扉を開けると床一面の血溜まりだった。

「一体、何人分の血だ……!」

入口付近には被害者の姿は見えなかった。

血溜まりを踏むことになるが仕方ない。被疑者がまだ奥に居る可能性もある。後で調べ廻(まわ)る鑑識の仕事を気遣い、注意深く、気を付けながら奥に進んだ。一刻も早く全体を把握する必要があった。

高級そうな調度品は壊れ、飛び散り、まるで、何頭もの猛獣が暴れた後のようだった。

神宮寺警部補と捜査員たちは店内階段を上り、上階もくまなく確認した。

五階も血の海だった。

客にキャストにスタッフ。総勢三十七名の遺体が発見され

た。
　恐らく、昨夜、店に居た全員だった。
　どの遺体にも、深く鋭利な爪痕のような傷が体の何処かに刻まれていた。
「店の連中はこれで全員か――？　昨日、休みだった奴、出て居たはずなのに、ここに居ない奴を調べろ――」
「すぐに当たります」
「それにしても、何の傷だ……？　まるで熊か何かに襲われたような死に様だ――。この店は〝筋者〟との関わりはなかったはずだよな？」

「ええ。指定暴力団のフロントじゃありません。客層にも問題はないみたいですね」
店の〝あがり〟に手を付けられた形跡も無く、現場の状況から、強盗でも暴力団の抗争でも無い印象を受けた。
犯人に目的があったとすれば、〝惨殺〟そのものとしか思えなかった。
「班長、見て下さい」
鑑識が、点々と続く、判で押したような赤い三角と小さな点の下足痕（げそくこん）を指差した。
「……こりゃー、ハイヒールか——？」
「ええ、恐らく」

その足跡は血溜まりの上を歩き、バックヤードを抜けて裏の非常階段に続いていた。
歩幅は一定で慌てた様子もない。
〝惨殺〟を目の当たりにしても、少しも動揺せず、平然と非常階段から出て行ったことになる。
「従業員リストの照合だ――」
店の関係者で、ここで死んでいない女が最重要被疑者だと神宮寺は直感した。

3

新宿の雑居ビルで起きた事件は、その日の夕方には首都圏ローカルのＴＶニュースで流された。
「うわ、ひどい……。やっぱり、東京って怖いよね。こんな事件が起こるなんて。こっちに住んでて良かったァ」
「都心じゃないけど、ここだって東京だよ」
弟の太朗は即座にそうツッコミ、その年頃ならではの自慢げな表情を姉に向けた。
高校生の牧村美樹から見れば、小学五年の太朗は、まだまだ愛すべき子供だった。
社会との距離や、生きる上で必要な〝本質の選択〟もまだ知らない。

多くの人が死亡した報道を観ても、姉の揚げ足を取った途端、何だか嬉しくなり、ニュースの内容など何処かに飛んでしまっていた。

「タロちゃん、晩飯まだか見て来てくれよ」

「なんだよ、明兄ちゃん。そんなに腹減ってんのかよ」

「ああ、今日はいつにも増して腹が減ってる。そろそろエネルギー切れだ」

「しょーがねえなァもぅ」

太朗がキッチンを覗きにリビングを出て行くと、美樹が明に言った。

「明くんと太朗って、もう、ホントの兄弟みたいだよね」
「へっ、そうかな」
悪い気はしなかった。
「明くんが来てから、母さん、毎日、お料理張り切ってるし、お父さんだって、家のご飯がおいしくなったって喜んでるもの」
「美樹、準備できたわよ。運ぶの手伝いなさーい——」
キッチンから母の亜希子(あきこ)の声がした。
「はーい!」と、美樹が元気よく答え、はや足でキッチンに向かって行った。

明はこの家の人たち、牧村家の家族が好きだった。

自分が悪魔人間(デビルマン)になろうが、デーモンとの戦いを定められようが、帰るべき〝場所〟と〝人々〟が居て、安らぎがそこにあることは何ものにも代え難い幸福だった。

この先、デーモンとの闘いの末、どんな世界が訪れようとも、せめて、ここだけは守りたい……。明はアモンと合体し、すっかり野獣の如き性格になった今の自分の中にも、人間としてのささやかな幸福を願う気持ちが残っていることを気付かされた。

飛鳥了もイブニングニュースで新宿の雑居ビルで起こった『キャバクラ・ホワイトラブ』での事件を知った。
——謎の大量殺人事件だと……。違うな、これは、奴らの仕業だ……！
飛鳥了は自分が綿密に準備し、あの屋敷の地下で不動明に行った合体の儀式を思い出していた。
サバト《悪魔崇拝の儀式》と同じ環境を作り、酩酊(めいてい)した若者たちを集め、父の残した秘儀でデーモンを誘(おび)き出し、アモンと明の合体を促した。
——それと同じことを、奴ら自身が、堂々と始めた訳

か……！

先手を取ると決めた途端、相手の動きも活発になった。

うかうかしてはいられない――。

飛鳥了はパソコンに向かうと警察のデータに侵入し、複数のビッグデータと照合することで、あっさりと一人の人物を特定した。

――白石美彩。店の関係者で、現在、警察が連絡を付けられていない、唯一の失踪（しっそう）者か……。運のいい生き残りか、それとも……？

その女の現住所を見ると、自分の住むこの場所からそれ程遠くない所だった。

――東京都八王子市高尾町(たかおまち)か……。

警察も捜しているはずだ。だが、了の想像が当たっていれば、警察が手におえる相手ではない。それに、早く手を打たなければ、デーモンは痕跡(こんせき)を消しにかかる。

キャバクラで大量死があっても、その生き残りの女が一人消えようとも、いつの間にか誰も関心を示さないデータの中の死亡者と失踪者の〝数字〟に変えられてしまうことは目に見えていた。

「彼女が、今回の儀式のプランナーか――」

了は脳裏に過(よぎ)った可能性を口にした。

4

午前十時――。飛鳥了の運転する年代物の白いロードスター《シボレー・ベルエア》は不動明を乗せて白石美彩の現住所に向かっていた。

山の斜面を削った細い崖路が続いた。ときどき斜面からはみ出た緑の蔓がフロントガラスにバウンドして顔にぶつかった。この辺りの間道は東京といっても、まるで里山の原風景だった。

「また、美樹に叱られる……」
ベンチシートに繋がった助手席で黒いTシャツに学生ズボン姿の明がふんぞり返って言った。本当なら、高校に登校して授業を受けている時間だった。
「どうせ学校に行っても、屋上で昼寝でもしているだけだろ――」
白いハイネックの了が運転をしながら表情も変えずにそう言った。
「お前は気楽でいいよ――」
了も都心の高校に通っていたが、〝森の屋敷〟が焼け落ち

たときに正式に退学したらしく、今はすっかり自由人だった。だが、明は同居人の牧村美樹が同じ高校の同じクラスに通っていることもあり、常にお目付け役に見張られているのと同じ状態だった。

デーモンの脅威を知って悪魔人間（デビルマン）になった今、もう、それ以前には戻れないことを知っているのに、美樹のことを思うと、細やかな日常の機微を第一に考えてしまう。

美樹の笑顔が、美樹の怒る顔が、美樹の悲しむ顔が真っ先に思い浮かんだ。今ではそのことが、不動明の心が辛うじて人間であることに踏み止まっている何よりの証（あかし）になってい

た。
「その女の自宅だって、警察がもう調べてるはずだろ?」
「ああ——。だが警察はデーモンが犯人だとは想定していない。常識の範囲で答えを得ようとしても、異常者による猟奇的犯罪という結論に至るだけだ——。闇のベールをもう一枚剥がして、その奥に居る真の敵を狩りたてることは出来ない——」
「に、してもよ、新宿の病院で遣り合ったラズバとの決着もまだついてねえのに、また別のデーモンか。奴らも派手に動き出したもんだな——?」

「ああ、そこだ。今度のデーモンは儀式の規模から見ても並みのデーモンじゃない。かなりのパワーを持っているはずだ。それに、奴らの行動に意図を感じる……！　こっちがデーモン狩りを決めた途端この有様だからな。向うも、何かを仕掛けていると見た方がいい――」

明は瞼(まぶた)を閉じて集中した。眉(まゆ)の毛の一本一本が伸びながら結合して二本の肉鞭(むち)のように軽くしなった。明は妖気(ようき)を探った。

人間の姿を取っていても、並みの人間よりは遥(はる)かに優れた身体能力を持っていたが、それでも悪魔の形を取ったときに

比べれば能力は制約された。人間の姿を取っていても、必要部分だけ変化させることで悪魔の能力を部分的に活性化出来ることを明は学んでいた。眉から伸びた触角がデーモンの妖気を捉えた。

「了、大当たりみたいだぜ――」

そう言って瞼を開けたときには眉は元に戻っていた。

「山の中だ。もう、家にはいない――」

細い崖路の間道がカーブを抜けると、眼前に高尾山が見えて来た。

「揃ってやがる。それも十や二十じゃねえ。うようよと集まってやがる……！」

了が運転する年代物のロードスターは古いガードレールだけが守る細い砂利道の坂を上って行った。

東淀橋署の神宮寺警部補が率いる捜査員たちが白石美彩に辿(たど)り着くまでにそう時間は必要なかった。事件を認知した日の午後には関係者のリストアップが出来上がり、夕方には現地所轄が美彩の自宅を訪問し、新宿の事件現場にも劣らない惨状を発見した。

白石美彩の自宅は昔からの兼業農家で、祖父は地主であり、広大な敷地の中に三世代が同居する立派な母屋(おもや)がある豪農だった。田畑を挟み、隣の家までは五十メートル程離れて

いた。こんな環境で育った娘が、何故、と、思いがちだが、らしいとか、らしくないとかいうのは只の幻想に過ぎないということを捜査員たちはよく心得ていた。多くの事件は〝あの人に限って――〟といわれる人間が引き起こした兇状だった。

　確認の依頼を受けた巡査が午後三時過ぎに自転車で訪れると、人の気配がまるで無く、静まりかえって返事も無かった。巡査は山に面した裏庭側に回り、一面に続く、旅館のように立派な縁側廊下の戸窓が一枚残らず内側から砕け散っているのを発見した。

　巡査から連絡を受け、その時点で新宿の『キャバクラ・ホ

ワイトラブ』の事件に関連するものであると判断され、東淀橋署の神宮寺道雄が呼ばれて現場の指揮を任せられることになった。丁度、昨晩、TVのイブニングニュースで新宿の事件が報じられていた頃には、神宮寺たちは白石美彩の自宅の現場検証をしていた。『ホワイトラブ』と同様に一面血の海だった。

「住人は三世代の八名です。祖父の夫婦。美彩の両親。美彩と、美彩の兄夫婦の家族、嫁と小学生の息子ですね」

「大家族だな」

「ええ、でも、この辺りではそう珍しくもないようです」

「鑑識の見立ては——？」

「状況から見て、『ホワイトラブ』よりも先に起きていたようです。一昨日（おととい）の夜という見立てです」

十六畳ある居間に滲（にじ）んだ血痕（けっこん）は、割れた山側の戸窓に向けて伸びていた。その先には、深い闇に包まれた高尾山が見えた。

「山狩りをするにも、朝を待たんといかんな。地元の青年団や関係団体に協力要請だ。人手が必要だ――」

「それが班長……」

「どうした？」

「そのつもりで既に当たってはみたんですが、地元の青年団

の大半に連絡がつかないんです」
「どういうことだ――？」
「青年団だけでなく、この辺りの若い成人の男たちが一昨日の夜から、かなりの数、連絡が取れない状況のようです」
神宮寺には益々意味が分からなくなった。
「おい、分かるように言え。それは、若い男たちが一遍に失踪したということか――？」
「はい、そのようです」
「はい……って……。どうなってるんだ……！」
「若い連中ですから、一日や二日連絡が取れなくなっても、

一概にそれがすぐ事件に結びつくとは言えませんが、この事件のタイミングですからね。しかも、一人や二人じゃありません。家族にも何も言わず、一昨日の夜辺りに、ぷいと、消えたと……」

「連絡が取れないのは何人だ？」

「青年団、消防団など合わせると、三十名近くになります」

「おいおい、そりゃー、それだけで、立派な事件だぞ……。仕事にも出てないということだろ？」

「ええ……まあ、ですが、そっちの方は事件性の認知がまだ無いので——。家族もまだ、行方不明者届を出していませんし……」

神宮寺警部補は頭を抱えた。状況はかなりの部分で事件の概要を照らしていたが、余りにも常識離れした不確定要素を含んでいた。
働き盛りの町の男たちが一斉に失踪しているという事実に目を瞑り、目の前の事件に臨むことなど有り得なかった。この件は、何処かで必ず繋がっているという感覚があった。
だが、そうは思っても、山狩りも時間との闘いだった。悠長に構えている暇はない。
「所轄も総動員だ。とにかく、集められるだけの人員を集めるんだ」
その日は戻らず、所轄署の傍のビジネスホテルに宿を取

り、明朝の日の出と同時に集まった人員で山狩りを決行することになった。
明けて五時半――。昨晩の割り振り通り、山狩りが始まった。普段、このような場合に集められる青年団に比べれば少し年を重ねた顔触れになったが、それでも警察関係者を含めて百名近い人員が集まった。中には本来の青年団である息子や孫が、この数日、謎の失踪を遂げたままの家の者も居た。その者たちにとってみれば、確信はなくとも、もしやという可能性の中の一つとして、自分たちの家族を捜すための山狩りでもあった。
山狩りは白石家の裏山から高尾山に抜ける山肌を、人が入

れる獣道に伝い、絨毯（じゅうたん）捜査で行われた。
獣道沿いの葉に付いた血痕が、何者かが確実に山に入った痕跡を残していた。
「間違いないな――」
神宮寺が地図を広げてその先を見ると、数年前に営業を止めたキャンプ場があった。
「キャンプ場の跡地か――。ここなら、潜伏して夜露を凌（しの）ぐには充分だな……！」
道無き山伝いに進むとなると、あと二、三時間は掛かりそうだった。

「このキャンプ場なら、車道からの別班の探索隊がそろそろ着いているはずです」

若い捜査員が携帯で確認の電話を入れた。

一昔前ならトランシーバーで擦れ擦れの音声で連絡を取ったものだが、最近は中継アンテナが整備され、里山に近い山なら、大抵、携帯電話が通じる。

「便利な時代になったものだな……」

こんな時にも拘らず神宮寺は時代の流れを感じた。

「ええ、ええ」と若い捜査員が先方に相槌を打ちながら状況を把握していた。

「最近、整備していないせいかキャンプ場への私道がかなり荒れていてスピードが出せないそうです。あと二十分程で到着しそうだとのことです」
「そうか、なら、こっちも地道に進むか――」
焦っても仕方なかった。神宮寺は足元を注意深く調べながら、また歩み始めた。

5

年代物のロードスターは崖道（がけみち）の中腹にある路側帯に停車し

ていた。飛鳥了と不動明はシートに腰を下ろしたまま高尾山へと続く崖下の森を見下ろしていた。

「思ったより、警察の動きが早いな——」

「ああ——」

崖下の木々の向うの集落に警察車両や人々が大勢集まっているのが見えた。

「山狩りか——、デーモンに遭遇したら、狩られるのは、確実に人間の方だ……!」

「だろうな」

「そうか、そういうことか……!」

「ん——?」

「これは奴らの罠だ――。通常、デーモンが肉体を得るためだけの合体なら人間一人を生贄にして合体すれば事足りる。だが、それでは一人ずつしか仲間は増えない。しかし、操り蜘蛛のラズバのように特殊能力として他者を操ることの出来るものが尖兵に立てば、一対一どころか、いきなり一対百でも一気に兵隊を増やすことが出来る……！」
「デーモンが知恵を付けたって訳か――？」
「ああ、行動が統率され始めている――」
「と、なると、昨日のニュースの女が新しいリーダーか？」
「いや、もっと上の存在が控えていると考えた方がいいだろ

う。恐らく、白石美彩と合体したデーモンはその尖兵に過ぎない」
「その手の能力を持つデーモンか……」
不動明は自分の記憶の奥にあるはずのアモンの記憶を呼び起こした。すべての記憶を呼び起こせる訳ではなかったが、アモンと因縁の深いデーモンなら記憶から引き出せることもあった。
「操り蜘蛛のラズバ以外なら、二人程心当たりがある。リリスやラミアなら、その手の仕事にはもってこいだ――」
「魔女伝説を多く残している二人だな。まるでハーメルンの笛吹のように、男たちを引き寄せて操るという。山狩りの連

中が全員デーモンにされてしまう前に手を打った方が良さそうだ──」
「任せとけッ──。了はここで待ってろ。幾ら覚悟を決めたと言っても、お前は俺と違って人間なんだからな──」
「ふっ、大人しくしてるさ──」
了がそう答えると、明はロードスターのドアを跳び越えて路肩に躍り出た。
「行って来る」
「ああ」
不動明は獣のように駆け出し、山の中へと飛び込んで行った。

特別な妖気が辺りを取り巻いていた。
昼間というのに、その周囲だけは闇の支配する深い森の中だった。そこは潰れたキャンプ場跡地のキャンプファイヤーの広場だった。
白石美彩はその中央に立っていた。薄汚れ、血に塗れたワンピースに裸足だった。髪も乱れ、見様によっては古代の呪術師か何かにも見えた。何人もの男たちが何重にも彼女を取り囲んでいた。二日前から失踪した男たちだ。青年団や消防団で把握している人数は三十名程度だったが、それを遥かに

超える人数が居た。男を引き寄せるラミアの能力に魅了され、道すがらで魅了された犠牲者も多く居た。男たちはどの顔も生気がなかった。幸せそうに薄い笑みを浮かべているようにも見えたが、瞳(ひとみ)には生きている者の輝きはなかった。

白石美彩は妖(あや)しく笑むと、聞き取れない呪法を唱えて右手を高く掲げた。

その途端、広がった妖気と共にメタモルフォーゼし、妖しくも悍(おぞ)ましいデーモンのラミアへと変貌(へんぼう)した。指先からは鋭い爪が伸び、腕の途中まで大蛇の如き鱗(うろこ)がびっしりと広がった。背からは猛禽類(もうきんるい)の翼が生え、一層艶(なま)めかしくなった女の

頭の上に蛇の顔がもう一つ、まるで鱗の帽子を被(かぶ)せたように載っていた。頭上の蛇の眼も妖しく光り、どちらが人格を持っているのか判らなかった。

「我が下僕、シェディム《悪霊》たちよ。集いしこの者たちに宿り、現(うつつ)にその姿を現すがよい――！」

すると冷たい放電が渦を巻くように広がり、それに接触した男たちが悶絶(もんぜつ)して叫びながら次々と肉体を持ったシェディム《悪霊》に姿を変えた。白い禿(は)げ皮だけの、のっぺりとした細長い犬のような姿をし、鼻先から広がる長い顎(あご)には無数の牙(きば)が生えていた。五十匹近い使役デーモンが一気に生み出

された。

タイミングの悪いことに、正面ゲートの車道からキャンプ場に向かっていた別班の捜査員たちが、その時、三台の車で駐車場に到着した。

シェディム《悪霊》たちはその音に反応した。ラミアが許しを出すと、涎（よだれ）を垂らしながら一斉に駆け出し、何も知らずに車から降りたばかりの捜査員たちに襲い掛かった。

「なッ、何だ……?!　このバケモノ共はッ……！」

野犬の群れかと思ったが違った。全く知らない生き物だった。銃を持っている者も居たが構える暇もなかった。見たこともない奇怪な獣の群れの前に捜査員たちはパニックに陥っ

た。慌てて報告しようと携帯を手にした者もいたが、手が震え、通話する前に零れ落とした。
「ううッ……?!」
〝どうした——、キャンプ場に着いたのか——?〟
着信を受けた神宮寺が出た。
「ギィヤヤヤァァーッ!」
電話に出た神宮寺はいきなり耳元で大勢の者たちの悲鳴を聴くことになった。
〝どうした——。どうしたんだッ……?!〟
答えはなく、悲鳴しか聴こえない。神宮寺の居る場所からそこへ着くには、まだ一時間は必要だった。

先行し、三台の車に分乗してキャンプ場を訪れた十五名の捜査員の中に、一人だけ女性捜査員がいた。シェディム《悪霊》たちは匂いでそれが女であると見定めると、一斉に彼女を取り囲み、むしゃむしゃと生きたままの人肉を喰らい始めた。

「うぎゃああああァァァ――――!!」

森に女の絶叫が響き渡り、突然、それが止んで静かになった。余りの信じ難き現実へのショック死だった。女は半身を喰われ、毒を刺された小動物のように動かなくなった。男たちは腰を抜かし、地面に尻を付けて何も出来ずに震えていた。

ゆっくりと、見たこともない化物が妖しく笑みを浮かべて近付いて来た。
「震えなくてもいいのよ。貴方たちも、私のシェディム《悪霊》の贄になりなさい」
ラミアが笑んでそう言うと、男たちはとろんとした表情になり、上に引っ張られた操り人形のようにぎこちなく立ち上がった。ラミアが冷たい放電を授けると、男たちの姿もまた、肉体を持った新たなシェディム《悪霊》に変わった。
「フフフ……。面白いように私のシェディム《悪霊》たちが増えていく――」

ラミアは妖しくも悍ましい表情で声を出して笑った。
背後からその笑みを打ち破る声がした。
「やっぱりなッ。ラミアか――！」
「ん――？」
ラミアが振り向くと、そこにはいつの間にか不動明が立っていた。
――人間……？
鋭く睨(にら)み、ラミアはその人間の中にある特別な気配を感じ取った。
「貴様ッ、アモンかッ……?!」

シェディム《悪霊》たちはラミアの指図を待って、ガルルル……と喉（のど）を鳴らしながら見守っていた。
「いいや、俺はアモンじゃねえ。アモンとやらを乗っ取って生まれた悪魔人間、デビルマンだ！」
その途端、不動明の身体から一気に波動が広がり、拡散し、脈動する力に振動しながら変化が始まった。衣服は細かく飛び散り、髪は伸び逆立ち、筋肉がしなやかに全身を覆い、肉体は獣の如き勇猛な戦士の姿へと変わった。その姿は、人が心に思い描く〝悪魔〟の姿そのものだった。
「ラミア、手の込んだ方法で仲間を増やしていたようだが、生憎（あいにく）だったなッ――」

デビルマンとなった不動明は牙が生えて広がった口元から空気を押し出し、低い声を唸(うな)らせるようにして言葉にした。
「アモンの肉体を手に入れたといっても、所詮(しょせん)は人間。こんなに集まった可愛い私のシェディム《悪霊》たちの群れに、勝てるとでも、思っているの――？」
凡(およ)そ六十匹のシェディム《悪霊》の群れが囲んでいた。デーモン随一のネクロマンサー《使役術師》として知られるラミアが笑っていた。
「貴方を狩ってあげる。さあ、逃げてもいいのよ。この私を楽しませて頂戴(ちょうだい)――」

「狩るのは俺の方だ。お前じゃねえッ——」
明も悪魔の表情で笑っていた。
ラミアが顎先で命令を下すと、シェディム《悪霊》たちが一斉にデビルマンに向けて飛び掛かった。
「ヘッ——」
その動きに合わせた右のカウンターの張り手が一匹目を弾き飛ばし、続いて繰り出した左手の爪が二匹目の腹を貫いた。内臓と共に振り下ろして三匹目にぶつけると、四匹目の頭を右手で摑み、胡桃の殻でも割るように握り潰した。禿げ犬の骸が無造作に転がった。

「チッ――この程度かよ？　もっと、期待したんだがなッ――」

明の挑発にラミアが目を剥（む）いて反応した。

「おのれッ――！」

デーモンは戦闘本能の権化だった。その戦闘能力を逆撫（さかな）でされ、馬鹿にされるようなことは絶対に許せない。強き者こそが霊長類として生きるに値する。その誇りが、知られざる歴史の彼方（かなた）、遥かなる太古のこの星で我が世の春を謳（うた）ったデーモン族の、何にも勝る揺るぎなき価値観だった。

両腕の爪を立て、ラミアは狂ったように挑み掛かった。そ

の動きに合わせ、シェディム《悪霊》の群れが統制された塊となり、盾や刃の役割りとなって掩護した。

代わる代わるで交錯し、三手に一手はラミアの攻撃がヒットした。動きは速く、野生の猿のようにトリッキーだった。動きを見失った瞬間、必ず弾かれ、別のシェディム《悪霊》が確実にダメージを与えた。ラミアの使役能力は噂だけでは無かった。

「チッ——まるで猿回しだぜ」

禿げ犬たちは疲れを知らなかった。何よりも数が揃っていた。まだ、四十匹は居た。

「口ほどにもないわね——」

翼を広げたラミアは止めとばかりに飛び掛かった。明は眉間から出した雷撃で周囲のシェディム《悪霊》を弾き、右腕を前へと大きく突き出した。

飛び掛かって来たラミアの首を、デビルマンの右手ががっしりと掴んだ。

「調子に乗って接近したお前の負けだ」

「なッ、なんだとッ……?!」

首を掴まれたラミアはデビルマンに片腕で持ち上げられたまま顔を歪めた。

「幾ら手下が居ようが、お前の能力は使役に過ぎねえ。つま

り、お前がやられれば、こいつらも、只の木偶の坊だってことさ」
「うっ、ぐくくッ……！」
ラミアの美しい顔が初めて恐怖に引きつった。最期の言葉も待たず、デビルマンは万力のようなその力で骨を砕いた。
鈍い音がした。肉体を持ったデーモンに死が訪れた。
と、同時に、主人を失った禿げ犬たちも眠りにつくように急に倒れて動かなくなった。
その身体は見る間に人間の男の姿へと戻っていった。森の地面に裸で横たわる男たちの大量の死体。肉体だけは人間の

姿に戻っていた。明はデビルマンから人の姿に戻り、ラミアの亡骸（なきがら）を見下ろした。合体して肉体を得たデーモンは死んでも人間の姿に戻ることはなかった。

明は予め（あらかじめ）用意しておいた青いビニール製のポンチョを広げて身に纏（まと）った。

飛鳥了の説によれば、この闘いの痕跡（こんせき）も何者かがすぐに消すはずだった。

すぐに山狩りの捜査員たちがやって来る。その時、彼らが見付けるのは行方不明になっていた男たちの数十体にも及ぶ、薄汚れた裸の死体だった。

良識あるこの世界で、この異常な事態に対し、その何者かがどう決着を付けるのか、明には想像がつかなかった。

13番目の刺客

1

東京ネオポートアイランド――。
企業展示やコミックマーケットで知られるネオ湾岸エリアも、かつては広大なゴミの埋立処分場（うめたてしょぶんじょう）だった。
19号埋立地・第6夢の島。半世紀に亘（わた）る都市開発は実り、新しい施設や街、多くの公園を生み出し、今では海浜副都心とも呼べる超高層ビル群まで形成していた。
三友工学本社ビルは、その中にあっても一際広大な敷地を

誇っていた。

幕末から続く財閥〝三友〟は国際工業部門を統括する本部をここに置いていた。

専務の加治原励治（かじわられいじ）は、その上階の部屋から眼下の臨海公園を見下ろしながら、今か今かと、社長のバン・ボグートが到着するのを待っていた。

「…………！」

「到着致しました」

秘書の声と共に扉が開くと、背筋の伸びた体軀（たいく）のいい西洋人の男が入って来た。シャギーを入れた銀髪で眉間まで隠す

サングラスを着けていた。四十を少し過ぎたくらいで、仕立ての良い薄縞（うすじま）のスーツを着ていた。

「お待ちしておりました。ボグート様」

加治原はボグートを〝様付け〟で呼んだ。

ボグートと呼ばれた男は、少し横柄な態度で、無言で頷（うなず）いた。

そして、顔色を窺（うかが）い、冷や汗を垂らしている加治原に向かい、流暢（りゅうちょう）な日本語で言った。

「そんなに警戒することはない。私は〝兼任〟で、君の手伝いをするために顔を出したまでのこと――。他のプロジェク

トも抱えているからな。君の仕事を奪おうなどとは思っていない」
「私は、そのようなことは……」
加治原が畏れ慄いて答えているうちに、ボグートは促されるまでもなく、茶革のソファに腰を深く下ろして足を組んだ。
「さてと、二つの懸案が我々の前にある——」
「はい……！」
「《試作改造人間計画》から、次なるステージに向けての展開と、ギルモア博士が連れ出した〝ゼロゼロナンバー〟たち

への今後の対応だ——」

「計画は凍結と伺っておりますが——？」

「ああ——プロト計画は予定通り〝ナンバー13〟で凍結させる。だが、サイボーグ計画そのものを凍結させる訳ではない。サイボーグは、最早、抑止力としてしか使えない核や細菌兵器とは違う——。これからの戦場の在り方を変える、金になる〝商品〟だからな」

「裏切り者たちの方は——？」

ボグートは策士の笑みを浮かべた。

「彼らは逃亡者を気取っているが、モノは考えようだ。皮肉

なものだな。今や彼らは、自（みずか）ら望んで優秀なモルモットの役割りを果たしてくれている。これを、上手（うま）く使わない手はない――」
「…………」
バン・ボグート。幽霊の代理人《ゴースト・エージェント》。彼こそが世界最大の〝死の商人〟の最高執行者。依頼人（クライアント）たちが尊顔（そんがん）できる顔役としては、その最高位として知られる存在だった。
「ところで、エリアの確保は済んでいるのだろうね――？」
「はい。20号埋立地と、その周囲を囲む古い工業地帯を全て

買占めてあります。予め（あらかじ）、再開発のための撤去作業と申請してあります。どんなに騒いでも、怪しまれることはないでしょう」
「ぬかりないな——。では、予定通り、コズミ博士は20号埋立地に——」
「はい」
「13（サーティーン）・ロボもSEA-REINE（シー・レイヌ）《海底輸送艦》からそちらに合流させてくれ」
「はい。あ、あの、ボグート様、肝心の0 0 13（ゼロゼロサーティーン）は？」
ボグートはニヤリと笑んだ。

「もう、接触している頃だ――」
「えっ……！」
「先ずは００９との加速装置の性能チェックだ。００13に取り付けた最新型の加速装置は００９より優れた００10のそれを、遥かに凌ぐ性能だ。ギルモア博士が手を加えていたとしても、このスペックの差は埋められるものじゃない」
「………」
　バン・ボグートは悪魔のような表情を浮かべた。
「だが――私はね、それでも期待しているのだよ。あらゆる研究は、戦いの中でこそ進化するとね――。そして、弱者の

あがきの中でこそ、真の革新的な研究は成し遂げられると――。生かさず殺さずだ――。そうやって生まれた力には、善も悪もない。見事彼らがそんな力を手に入れたら、それを我々がまた回収すればいい――。言ってみれば、彼らは今も、我々の支配下にあるのと同じなのだよ。このミッションはデータ収集と解析が出来ればいい――」

ボグートの狡猾（こうかつ）な物言いに加治原は戦慄（せんりつ）した。

世界を相手にする企業戦士として、時には悪辣（あくらつ）な手段も陰ではとった。闇の世界との交渉も何度か経験した。

――だが、そんなものとは比較にならない、決して触れて

はいけない世界に、足を踏み入れてしまった……！
言うまでもなく、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）と手を結ぶことは、悪魔との契約に匹敵する行為だった。

2

湾岸地帯の上を抜ける首都高を二台の白いハマーH2が連なって走っていた。
ギルモア博士が〝ゼロゼロナンバー〟たちの移動用に用立てた大型4WDだった。

「どうしたフランソワーズ？　ジョーと交信出来ないのか？」

アルベルト・ハインリヒ《004》は助手席のフランソワーズ・アルヌールに尋ねた。

後部座席にはジェット・リンク《002》とグレート・ブリテン《007》が座っていた。

後続のもう一台の運転はピュンマ《008》、そちらの助手席には張々湖（ちゃんちゃんこ）《006》、後部座席にはジェロニモ・ジュニア《005》が一人でシートについていた。

皆、動き易そうな思い思いの服装をしていたが、その下には戦闘用防護服を身に着けていた。今回は戦闘行動が想定さ

れていた。
フランソワーズ《003》は騒がしい外界の情報を遮断して、離れているジョー《009》の脳波にコネクトを試みていた。
「おかしいわ……。脳波通信で応答がないなんて……」
「どっかでサボってるんじゃないのか――」
後部座席のジェット《002》が冗談めかして言った。
「なら、いいがね。脳波通信をする余裕すらない相手と遣り合ってるのかも知れない」
大人の思慮を持つ英国紳士のグレート《007》が答えた。
「その可能性はあるな――」

ジェット《002》は自分の冗談を棚に上げて真顔になった。
「加速している時は通信どころじゃない。通信波が届いても、加速を止めるまでは情報を変換できないからな……。あの中は、あの世界は孤独なんだ。いろんな意味でな——」
正しくその時——ジョー《009》とあのゼスチャーの青年は加速して闘っていた。
加速装置を持つ者同士の戦闘ともなれば、加速風圧のため聴覚は役に立たない。音速を超えれば音自体が遅れた。視覚が互いの動きを追う唯一のセンサーだった。

二人は高速で移動し、場所を次々と変え、互いを弾くように闘った。

その速度は、普通の人間には見ることも出来ない速さで、二人が弾き合った瞬間に発する衝撃波を耳にするか、急激な空気対流が齎す旋風を漸く見るに留まる速さだった。

民家の辻で、神社の階段で、一瞬で場所を変えて旋風が舞い、空気が破裂した。

加速して神社の階段を駆け登ると、そこに小さな児童公園があり、幼い少女が一人、ブランコに乗っていた。

――……?!　巻き込んじゃいけない……!

ジョー《009》は咄嗟に思った。

加速空間での思考は補助ＡＩが働くからこそ可能な超高速感覚だった。

すると、まるでその想いが通じたかのように、ゼスチャーの青年は神社の屋根に跳躍して加速を解いた。

——ん……?!

ジョー《009》も跳躍して、青年と向かい合うように屋根の端に立った。

「君は、いったい……?」

じっと見詰めていた。

青年は口では答えなかった。

「…………」

脳波通信がジョーに届いた。

〝ゼロゼロナイン、闘いたくなくても、僕たちは、闘うしかないんだ――〟

ジョー《009》も脳波通信で答えた。

〝そんなことはないよ。君は優しい心を持っているじゃないか。あの子を傷付けちゃいけないと、君も思ったんだろ？ブラック・ゴーストから離れて僕たちと一緒に――。僕たちは友達になることだって出来るはずだ――〟

〝ともだち……〟

ジョー《009》の元に向かう車の中でフランソワーズ《003》がその交信をキャッチした。

「ジョーが、誰か、別の誰かと脳波通信で話してる……！」

「て、ことは、相手も俺たちと同じ、サイボーグということか――」

アルベルト《004》が言うとジェット《002》が続けた。

「13番目のゼロゼロナンバーのご登場か――」

「コズミ博士が攫（さら）われた時にキャッチしたキャラクター・フリークエンシー《固有周波》だわ……！」

が、その時、フランソワーズ《003》は新たな反応をキャッチした。
「あっ、ちょっと待って。別の反応が——！」
フランソワーズ《003》は精神を集中させるかのように、耳を澄まし、情報を補正して解析を始めた。
「海底を……何かが接近している。潜水艦かしら……。自衛隊に登録のある艦船じゃないわ——」
「臭うな。そいつの方向は？」
アルベルト《004》の問いに、フランソワーズ《003》は車のナビMAPでその場所を示した。
そこは東京湾のド真ん中だった。

「20号埋立地の側だな――どうする？」
「せっかく二台あるんだ。二手に分れようぜ。俺たちはこのままゼロゼロナインを。海の方はピュンマたち任せるってのはどうだ」
ジェット《002》がそう言うと、すぐに後続の車のピュンマ《008》から脳波通信が返って来た。
〝ああ、海なら任せておけよ。ゼロゼロファイブとゼロゼロシックスには退屈だろうけどね――〟
ピュンマ《008》の運転するハマーH2は、スムーズな動きでジャンクションに向かい離れて行った。

3

拉致(らち)されたコズミ博士を乗せた乗用車は20号埋立地へのトラック道を進んでいた。
コズミ博士は後部座席で腕を縛られ、両脇から屈強な黒ずくめの男たちに挟まれていたが、飄々(ひょうひょう)としていた。
「なあ君たち、悪いことは言わんから、降参した方がいいぞ」
顔中に白髭(しらひげ)を蓄え、昔ながらの眼鏡を掛けた優しげな老人だった。

「追手は手強(てごわ)いぞ。なんせ、お前さんがたの最高機密じゃからな。それが九人も居るんじゃから、かなうわきゃないと思うのだがなァ」
「うるせえな爺(じい)さん、黙ってろって。こっちだって馬鹿じゃねえ。何重にも作戦を立ててるんだよッ」
「ほう、そうか。それは頼もしいのぅ」
「あんたは囮(おとり)なんだ。静かにしてりゃいい」
「なんじゃ、わしが開発したステルスポリマーの化学式が目当てじゃなかったのか?」
「それは奴らを片付けてからゆっくりと頂く。0013(ゼロゼロサーティーン)と

13（サーティーン）・ロボは手強いぜ。特にロボには、あんたが開発したステルスポリマーの試作品が使われてる。009（ゼロゼロナイン）だって、今度ばかりはただじゃ済まねえぜ」

——なるほどのぅ。従来のゼロゼロサーティーンの計画に、このわしを囮として加えることで、ステルスポリマーの実戦データの収集を同時に行おうという、浅はかな考えか……。

コズミ博士は誘拐犯との僅（わず）かな会話で黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の狙いを把握した。

ピュンマ《008》はレインボーブリッジの袂にハマーH2を停めると、素早く私服を脱いで戦闘用防護服の姿になった。左下の黄色いボタンに制御装置があり、軽く触れると形状記憶とエアバルブが反応し、適切なフィットを齎した。黄色いマフラーが海風に靡いた。

赤いコスチュームはメンバーによっても機能が少し異なるが、外界からの耐熱・耐圧に優れ、それぞれが特化して与えられた特殊能力を最大限に発揮出来るように調整されていた。

「ゼロゼロシックス、君はゼロゼロファイブと一緒に、僕の

反応を地上から追跡してくれ」
「了解アルね」
運転席に移動した張々湖（ちゃんちゃんこ）《006》が親指を立てて答えた。
ピュンマ《008》はそれを合図に駆け出すと、十五メートルはありそうな堤防の縁から、見事に海へと飛び込んだ。
「まさに、水を得た魚のようアルね」
「ああ」と、ジェロニモ《005》が答えた。
張々湖（ちゃんちゃんこ）《006》はアクセルを吹かして白いハマーH2を湾岸道路に戻し、車の流れに乗って走り出した。

海中に飛び込んだピュンマ《008》は可能な限り一気に潜った。耐圧眼球に仕込まれた暗視スコープは地上と変わらない明るさで海底の世界を映した。水上の都会的な雰囲気から思っていたより魚たちが多く、ピュンマ《008》は少し、嬉(うれ)しい気分だった。

都市近郊部での水深は、せいぜい七十メートル程度だが、浦賀(うらが)水道に接する辺りにもなると東京湾の水深は六百メートル以上にも達する。フランソワーズ《003》がキャッチした反応は海中から近付いていた。

それが今、ジョー《009》と闘っていると思われる00(ゼロゼロサーテ)

13と呼び合っているとすれば、こちらの追う反応は海中を最短距離でジョー《009》の居る場所に進むはずだった。
そしてその二者が揃う場所に、必ず、囚われのコズミ博士が現れるはずだとピュンマ《008》は睨んでいた。
――潜水艦でコズミ博士をそのまま海外に連れ出すつもりか……！
〝ゼロゼロエイト、信号の発信源が近付いているわ。何か見える――？〟
フランソワーズ《003》からの脳波通信があった。
〝いや、ここからは……？〟

ピュンマ《008》の視界にはまだそれは見えなかった。だが彼は、海に住む生物たちの動きでそれを察知した。

――ん……？

分散し、急激に散開する魚影たち。魚たちがピリピリしていた。

気配を感じて海底の岩陰に隠れると、漆黒の色をした小型潜水艇が音も立てず頭上を進んで行った。

小型といっても、少なくとも三十名の兵員を輸送可能な黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の上陸用特殊舟艇だった。潜航機能だけでなく、飛行機能も備えた新型だった。

――戦闘要員も送って来たってことか……。

〝ゼロゼロスリー、反応はブラック・ゴーストの上陸用特殊舟艇だった——。奴らが戦闘要員まで送って来たとなると、少し厄介だ——〟

〝わかったわ。そのつもりで警戒するわ——〟

ピュンマ《008》は脳波通信を終えると、張々湖（ちゃんちゃんこ）《006》やフランソワーズ《003》らに黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の上陸用特殊舟艇の正確なルートを知らせるべく、密かにその後を追跡した。

4

海浜地帯を見下ろす山の神社でジョー《009》と0013（ゼロゼロサーティーン）は闘っていた。互いに加速した二人の動きは通常の時間を生きる人間には理解出来ない。存在の認知と加速空間の孤独感、そんな状況で、理由なき運命により闘わなければならない不条理な思い。入り混じった様々な思いが互いの攻撃を躊（ちゅう）躇（ちょ）させ、まるで相手のスペックを探るような、小手調べのような戦闘に留めていた。

——なんて速さだ……。0010（ゼロゼロテン）の時より、さらに性能が上がってる……！　マッハ4の壁を超えたのか……?!

いつの間にか、少女を巻き込まないことが二人のルールに

なっていた。
ブランコに乗る少女は、見えない闘いが発する音に怯(おび)えていた。空気が破裂するような音が自分を取り巻く神社の至る所から広がった。
――おばけ……？
気味の悪さは、一度意識してしまうと拭えない。きょろきょろと辺りを見回すが、やはり何も見えない。でも確実に、見えない何かがそこに居ることはわかった。
少女はブランコを止めて、座ったまま震えていた。
「…………？」

肩紐（かたひも）で下げた赤いビニール製の小さなバッグから、少女の宝物の色紙が、見えない戦闘によって生み出された空気流に巻き込まれて、ふわっと散乱した。

「あ、あ……」

〝待って――〟

〝ん――〟

ジョー《009》は神社の屋根の上で加速装置を解除した。0013（ゼロゼロサーティーン）が脳波通信で休戦を提案した。

0013（ゼロゼロサーティーン）は少女の周りの空間に散乱し、浮かんだままで止まっている色紙を破らないように気を付けて集めた。

そして少女を驚かさないように、少し後ろに回ってから加速を解（と）き、笑顔を作ってから集めた色紙の束を少女に差し出した。

「ムーウ」

「あっ」

少女はきょとんとしていたが、「ありがとう、お兄ちゃん」と、笑顔を見せた。ジョー《009》は屋根の上から静かに見守っていた。

００13（ゼロゼロサーティーン）の優しく純朴な笑顔が少女の恐怖を一瞬で解き解（ほぐ）した。

「お兄ちゃん、一枚あげる」
「ん――うん」
0013（ゼロゼロサーティーン）は桃色の色紙を一枚受け取ると、少女の目の前で何かを折り始めた。少女は瞳（ひとみ）を輝かせながら、その指先が作り出すものを期待を膨らませて見ていた。
〝ゼロゼロナイン――〟
0013（ゼロゼロサーティーン）は色紙を折りながら、脳波通信で語り掛けて来た。
〝おいらの会話能力が、なんで脳波通信だけにされているのか、それには理由がある――〟

〝えっ……?〟

〝おいらには、もう一つのカラダがある。大きなロボットのカラダだ――〟

0013（ゼロゼロサーティーン）は折り紙を続けながら語った。

〝そいつのカラダの中にはバクダンが入ってる――〟

〝何だって……?!〟

〝もうすぐ、そいつがやって来る。おいらとそのロボットは繋（つな）がってる。おいらがゼロゼロナインと闘う気持ちをなくしたら、バクダンが爆発する仕掛けになっている。だから、脳波通信で、キミと、ゼロゼロナインと闘う気持ちを出し続け

てないとダメなんだ――〟
〝そんなッ……?!〟
ふっと、息を吹きかけると、００13（ゼロゼロサーティーン）の掌（てのひら）の上には桃色の鶴が折り上がっていた。
「あ、ツルだ」
少女は花が咲いたような笑みを見せた。
００13（ゼロゼロサーティーン）は折り鶴を少女に渡すと、小さく手を振りながら少女から離れた。
〝だから、おいらたちは、闘うしかないんだ――〟
〝君はッ、闘いたくはないんだろ……！〟

その時、ジョー《009》には感知出来なかったが、離れた場所の何処からか、0013（ゼロゼロサーティーン）の脳波と連動し、制御する謎の電波が届いていた。

——今のは……？

ほんの一瞬だったが、フランソワーズ《003》もその電波を感知した。だが、それは前例のない信号で彼女には判断が付かなかった。

0013（ゼロゼロサーティーン）は突然苦しそうに両手で頭を押さえて蹲（うずくま）った。

「ううう……！　ムーム、ムーム……」

「どうしたの、お兄ちゃん……？」

「ムーム」
００13（ゼロゼロサーティーン）は少女に心配を掛けないように、精一杯の笑顔を作り、立ち上がった。
だが、ブランコの裏に回り、少女の視界から消えた瞬間、頭の中でカチリと音がし、仕込まれていた００13（ゼロゼロサーティーン）の戦闘プログラムが活性化状態に入った。
〝おいらは闘う。ゼロゼロナインと、闘う――！〟
そう発した００13（ゼロゼロサーティーン）の脳波通信は彼の真意とは裏腹だった。
ジョー《009》の胸にはそれが充分に届いていた。

〝ゼロゼロサーティーン……〟

0013（ゼロゼロサーティーン）は加速空間に入り、20号埋立地に向かって猛スピードで駆けて行った。

ジョー《009》も加速装置を作動させてその跡を追った。

二人が居なくなったことに、少女は気付いていなかった。

少女はブランコに座って小さな掌の上に乗せた折り紙の鶴を見ていた。

宝物にしようと、少女は思った。

フランソワーズ《003》の乗っているアルベルト《004》が

運転するハマーH2は20号埋立地のすぐ側まで来ていた。
「おっとっと、あそこから走って来る車、尋ね人、現れたり――じゃないのかね」
後部座席から目を光らせていたグレート《007》が反対側のトラック道から猛スピードで走って来る乗用車を見付けた。
フランソワーズ《003》が視覚情報をズームさせて確認した。
「ええ、あれよ。間違いないわ――」
「よし、ここからは慎重さも必要だ――」
アルベルト《004》がそう言うと、待ち切れずに戦闘用防護服に着替えたジェット《002》が後部座席から身を乗り出し

た。
「いい具合に潰(つぶ)れた工場があるだけで、人の気配もない。俺が飛んでも全力で走っても、問題なさそうだな」
「待って――」
フランソワーズ《003》が緊張に表情を硬くした。
その時、埋立地に近い海面から黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)の上陸用特殊舟艇が浮上した。
その音を――フランソワーズ《003》は感知していた。
「敵が来るわ――」
特殊舟艇は左右に付いたダブルブレードのプロペラを回転

させ、そのまま離水してヘリコプターのように空へと上昇した。

この埋立地一帯は〝三友工学〟の私有地であり、関係者以外の立ち入りも無く、見咎(みとが)める者も無かった。

〝空から来るわ。皆、気を付けて――！〟

ジェット《002》だけでなく、車から降りたアルベルト《004》、グレート《007》、フランソワーズ《003》も戦闘用防護服になった。

別の車で向かっていたジェロニモ《005》と張々湖(ちゃんちゃんこ)《006》も準備万端に着替えていた。

拉致されたコズミ博士が乗せられたセダンは、廃棄された工場の巨大なジャングルジムのように大型パイプが張り巡らされたプラントを抜ける道を真っ直ぐに進んで行った。
その先から、敵の援軍の飛行音が近付いていた。
トビウオが海面から跳ね上がるように、ピュンマ《008》が埋立地の埠頭に着地した。
〝そっちに向かってる。気を付けろッ――〟
〝ええ、ゼロゼロファイブとゼロゼロシックスも直ぐに合流するわ――〟
空中を飛ぶ黒い幽霊団の上陸用特殊舟艇とコズミ博士を乗

せたセダンが陸と空とで擦れ違った。
丁度その時、フランソワーズ《003》たちの元に張々湖《006》とジェロニモ《005》が合流した。
「待たせたアルね」
アルベルト《004》が上空から接近して来る上陸用特殊舟艇を睨みながら言った。
「俺たちを足止めさせるために用意したって訳か――。手の込んだまねを……！」
上陸用特殊舟艇から二発のミサイルが発射された。
「フッ――。無駄なことだ――」

立膝を付いたアルベルト《004》の右膝の皿がスライドしてミサイルサイロが口を開いた。〝死神〟の異名を持つアルベルト・ハインリヒは身体の至る場所に武器が内蔵されている。マイクロミサイルもその一つだった。

アルベルト《004》の右膝から発射されたマイクロミサイルは空中で分散して敵が放ったミサイルを迎撃した。

空中で爆炎が広がった。

だが、敵はその隙を突き、特殊舟艇の左右のハッチを開き、垂らした八本のロープから次々と黒いコンバットスーツに身を包んだ兵士たちを滑り降ろした。

ボンベマスクのようなゴーグルで顔を覆った戦闘要員だった。

〝新型のサイボーグマンよ、気を付けて――〟

地上に降りた三十名のサイボーグマンと空を飛ぶ特殊舟艇が、コズミ博士の救出に向かうフランソワーズ《003》たちの前に立ち塞（ふさ）がった。

「チッ、こいつらを斃（たお）さなきゃ、進ませねえってことかい……！」

ジェット《002》はスーパーガンを左右のホルダーから抜き、二挺（にちょう）拳銃に構えた。

アルベルト《004》はマシンガンの内蔵されている腕を構えた。他の者たちもスーパーガンを抜いた。
拉致したコズミ博士を乗せたセダンはその先の工場跡地に囲まれた赤土の広場の真ん中に停まった。
車に乗っていた黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の男たちは四人居たが、コズミ博士の口に布で猿轡（さるぐつわ）をかませ、両腕と両足を改めて縛り直すと、自分たちの仕事はここまでというように後部座席にコズミ博士を残したまま、そそくさと車から離れて逃げていった。
すると、そのタイミングを見計らっていたかのように、地

響きが鳴り、大地が激しく揺れ始めた。
ズゴゴゴゴ……！と、地面が裂け、赤土の大地に巨大な亀裂が稲妻のような形に口を開いた。
――なに……？
アサルトライフルで武装したサイボーグマン部隊との戦闘の最中、フランソワーズ《003》も状況を測りかねていた。音だけの判断材料だったがコズミ博士が乗せられている車の傍の大地に亀裂が生じたことまでは分かった。
そして、その裂け目の中から、何か新たな存在も感じられた。
その時、埋立地の割れ目から、鋭い爪をした巨大なロボッ

トの腕が持ち上がっていた。
その腕はコズミ博士が閉じ込められているセダンを掴(つか)み上げ、地割れの中から巨大ロボットの全身を現した。
二十メートルはある巨体だった。
巨大ロボットはセダンを自分の首の高さまで上げると、首のハッチを開き、車を斜めにしてコズミ博士を内部に滑り落とした。
「気を付けろ、ゼロゼロスリー。気になるだろうが、こいつらも、一筋縄ではいかないぞ」
アルベルト《004》が掩護(えんご)射撃をしながら注意を促(うなが)した。

「ええ――」
サイボーグマンは量産型ではあったが、部隊としての訓練を積んでいる戦闘のプロ集団だった。彼らには加速装置は無いものの、敵の加速接近に対する警告システムと瞬発回避が搭載されており、ジェット《002》が加速して接近すると自動的に回避行動を取って俊敏に身を躱（かわ）した。
「チッ、俺は鬼ごっこの鬼かよ……！」
広範囲に出鼻を挫（くじ）くには張々湖（ちゃんちゃんこ）《006》の火炎放射が有効だった。
「ホラ、わてが足止めをしてる間に――」

火炎が広がったと同時に、ジェット《002》が回り込んでスーパーガンを撃った。

丁度、埠頭から駆けて来たピュンマ《008》も合流し射撃に加わった。

その一瞬で五名のサイボーグマンを斃した。

「空からも来るぞ――」

グレート《007》が警告を発すると、空を飛ぶ特殊舟艇からミサイルが発射された。

アルベルト《004》が膝からマイクロミサイルを発射した。

今度は敵のミサイルだけでなく、特殊舟艇にも到達し、空からの敵の爆破に成功した。

ジェロニモ《005》がサイボーグマンを左右の腕で一人ずつ掴み上げ、シンバルのように互いをぶつけて行動不能にした。
だが、サイボーグマンはまだまだ居た。
——はっ……⁈
フランソワーズ《003》はその急接近を認識した。
地上に面した低い位置だった。
ボボボボ……ガガガッ——‼と、空気を裂き、まるで地面擦れ擦れをジェット戦闘機が飛ぶようなソニックブームが二つ、自分たちの居る場所に近付いていた。
「来るわよ——！」

フランソワーズ《003》が警戒を促した途端、地走りのような土煙が過ぎ去った。
マッハ3のソニックブームが一気に通過したのだ。
爆風にも似た急激な気流が巻き上がった。
「今のは、ゼロゼロナインとゼロゼロサーティーンなのか……？」
アルベルト《004》が確認した。
「ええ」
「二人とも、車なら一発免停のスピード違反だな」
集中を崩さず、サイボーグマンと戦いながらグレート《007》が冗談を言った。

5

三友工学本社ビルの社長室ではバン・ボグートが笑んでいた。天井から下りたマルチモニターが20号埋立地の工場跡地のそこここを映し出していた。

「さあ、愉(たの)しい性能テストの時間だ。スペックだけではないのだよ。今回のテストのサブテーマは試作改造人間(プロトサイボーグ)の〝心〟にも踏み込んでいる」

ボグートは背後で沈黙を守っている加治原に言った。

「プロトナンバーたちの奮闘には学ぶべきものがある。あの強さはスペックだけではない。それは認めざるを得まい――。追われる者たちの〝背水の陣〟の足掻(か)きか――。或いは我々に対する反骨の賜物(たまもの)か……。その源泉は〝怒り〟か〝正義の心〟か、それとも胸に秘めたる〝希望の光〟か――。それが効果を齎(もたら)すものであるならば、我々はその製造元として正確に分析し、把握する必要がある。低コストで効果を得られる重要なファクターだからな。そう思うだろ――？」

「は、はい」

最早（もはや）、加治原には同意するよりなかった。
「本来なら、闘争本能を優先して人選するところだが、今回の００13（ゼロゼロサーティーン）にはその真逆で〝優しさ〟を優先した。プロトナンバーたちも、ただ命を狙って来るだけの刺客には迷うことなく全力で反撃出来ても、不条理な憂いを秘めた存在には、どう出るのか――。そのケミストリィが楽しみじゃないか。特にナイーブな〝優しさ〟同士、００9（ゼロゼロナイン）との複雑な感情の〝共鳴〟は興味深いものだ……。勝敗を抜きにしても、展開が気になるカードだとは思わないかね――？」
バン・ボグートは楽しくて仕方がないというようにサング

ラスの下で不気味な笑みを浮かべた。

工場跡地に囲まれた赤土の広場でジョー《009》と0013（ゼロゼロサーティーン）が加速して闘っていた。

そしてそこには、二十メートルはありそうな巨大なロボットが立っていた。

——何なんだ、アイツは……？

〝13（サーティーン）・ロボだ。あの中にコズミ博士が居る——〟

——コズミ博士がッ……?!

13（サーティーン）・ロボは廃工場を拳（こぶし）で破壊しながら進み始めた。

〝ロボはおいらの気持ちと繋がっている――〟

ジョー《009》は不思議に思っていた。0013の動きを見れば、マッハ4以上の加速性能があることは確実だった。にも拘らず、0013は一向にその能力を見せようとはせず、ジョー《009》の加速限界であるマッハ3に合わせていた。

〝ゼロゼロナイン、そのまま、おいらと闘え――〟

――えッ……?

ジョー《009》は一瞬、拳を緩めた。

〝手を止めるな。闘い続けるんだ。通常速度での脳波通信は

聴かれてしまうけど、おいらたちの加速空間での脳波通信はブラック・ゴーストには受信出来ない――〟
〝君は、僕と話すために……?〟
サイボーグ研究の課題として上った数ある特化能力の中でも〝加速装置〟は飛び抜けて独創的であり、戦場で有効な能力だ。だが、その能力故に、どうしてもクリア出来ない弱点もあった。その弱点の一つが加速中の意思の疎通だった。加速中は加速していない者との会話は勿論(もちろん)のこと、加速者同士であっても同じ速度帯でなければ会話が出来ない。0013(ゼロゼロサーティーン)の行動はそれを理解した上でのことだった。
〝でも、おいらの気持ちは、奴らのせいで闘うことに傾いて

る……。うまくできるか、わからない……！〟

〝サーティーン！〟

〝ゼロゼロナインと闘わなくちゃいけない――。闘いを止めたら、13（サーティーン）・ロボの中に取り付けてあるバクダンが自動的に動き出す。おいらたちが闘いを止めても、見張っているブラック・ゴーストがスイッチを入れる。だから、闘うんだ――それしかない！〟

〝闘いながら、隙を見て、コズミ博士を助けろってことだね。わかった……！〟

ジョー《009》と0013（ゼロゼロサーティーン）は、13（サーティーン）・ロボの動きに合わ

せ、移動しながら、加速空間の中で弾き合い、戦闘をしているように見せ掛けながら、加速を解(と)かずに交錯を繰り返した。

監視カメラでその様子を視ていたボグートは、００13(ゼロゼロサーティーン)の動きに疑念を浮かべた。

「何だ、あの闘いは——。００13(ゼロゼロサーティーン)め、こんなに温(ぬる)い闘いを見せるとは……。よもや、この私を謀(たばか)ったつもりではあるまいな——」

ボグートは控えていた技師に向け、「脳波出力を上げろ」

と命じた。

「承知致しました」

技師は遠隔装置を操作した。

その途端、13（サーティーン）・ロボの頭部から、再度、強力な電波が迸（ほとばし）った。

それは００13（ゼロゼロサーティーン）の戦闘プログラムを強制的にＭＡＸ状態にする指令波だった。

「ムーム、ムームム……！」

突然、００13（ゼロゼロサーティーン）は頭を掻き毟（むし）って倒れた。

「サーティーン！」

「ムーム……！！」
脳波通信の声も聴こえなかった。
苦しみ、身悶（みもだ）え、次に顔を上げた時には、００13（ゼロゼロサーティーン）の表情には、あの優しい雰囲気は何一つ残っていなかった。
――ゼロゼロサーティーン……。
「ムーム――」
００13（ゼロゼロサーティーン）は13（サーティーン）・ロボの掌（てのひら）の上に跳び乗った。
首のハッチが開き、００13（ゼロゼロサーティーン）はロボの中に入った。
「ゼロゼロナイン。おいらと勝負しろ」
13（サーティーン）・ロボのスピーカーを通じて００13（ゼロゼロサーティーン）の声がした。

「こ、このロボットは、おいらの脳波ちゅうもんで動く。お、おいらは、口が不自由でことばをしゃべれないけど、このロボットは、おいらの考えをことばになおしてしゃべる装置をつけてる。さあ、おいらと勝負だ！」

——おかしい……。さっきまでの彼じゃない……！

迷う暇もなかった。

００13（ゼロゼロサーティーン）を内部に入れた13（サーティーン）・ロボは加速装置を使いジョー《009》に殴り掛かった。

——ハッ……?!

ジョー《009》も危ういところで加速装置を使って躱（かわ）した。

13（サーティーン）・ロボの加速装置はマッハ１程度だったが、それを補うようにステルスポリマーが作動する仕組みになっており、加速に合わせ、銀色のボディ自体が迷彩変化を起こし、間合いの感覚を鈍らせた。

――あの中には、コズミ博士も居るはずだ。これじゃ、思いっ切り戦えない……！

スーパーガンで13（サーティーン）・ロボの腕と胸部を狙ったが、表面のステルスポリマーを焦がすだけで、致命的なダメージを与えることは出来なかった。

――ダメか……！

ジョー《009》は跳躍し、ロボの頭部に取りついた。

「このハッチを、開けられれば……！」

が、13（サーティーン）・ロボは両腕を伸ばし、力を誇示するように挙げたかと思うと、僅（わず）かな幅ではあるが全身を超振動させた。

ブァ、ブァ、ブァブァブァ……！と周囲の空間自体が激しく振動した。

――なっ、何だッ……?!

それは、その仕組みが分からなければ、地震とも音波とも電波とも取られる効果を発する超科学兵器で、超伝導を利用した振動による物理的な破壊装置だった。

ジョー《009》は張りついて居たロボの頭部から、いとも簡単に揺すり落とされた。
背中から地面に叩(たた)きつけられた。振動の影響で受け身を取ることすら出来なかった。
「ううっ……」
13(サーティーン)・ロボは攻撃の手を緩めず、倒れているジョー《009》を踏みつけて来た。
——加速装置ッ！
ジョー《009》は間一髪でそれを避けた。
13(サーティーン)・ロボが接近し、超振動の影響圏に入るだけであらゆ

るものが壊れていった。
廃工場、ガスタンク、送油プラントが砕け散った。
埋立地の赤土の地面までもが超振動によって液状化現象を起こし始めた。
「このままじゃ、全部壊れて海の底だ……！」
誰も居ない埋立地だけの被害ならいいが、13（サーティーン）・ロボは都心部に向けて歩んでいた。
ジョー《009》は叫んだ。
「ゼロゼロサーティーン！　やめるんだー！　キミの気持ちはそうじゃないはずだ！　思い出すんだ。本当の気持ちをッ

――！」
「ムーム……！」
００13（ゼロゼロサーティーン）は自分の中に無理矢理広げられてしまった〝悪意〟と闘っていた。
〝闘うんだ。闘うんだ……！〟
そう思うと、何故だか胸が苦しくなった。
13（サーティーン）・ロボは歩みを止めていた。
「ゼロゼロサーティーン！」
だが、００13（ゼロゼロサーティーン）の思考は不安定で、靄（もや）の中を彷徨（さまよ）っている状態だった。

振り向いてジョー《009》を見付けると、闘争本能を優先して更に襲い掛かった。

巨大な拳(こぶし)で殴り掛かり、ジョー《009》がそれを躱すと、今度は握り潰(つぶ)そうと大きく腕を振るった。

――んッ……！

飛び退いたジョー《009》だったが、足場が悪く、大地の裂け目の縁(ふち)に辛うじて摑(つか)まった。

その裂け目が、13(サーティーン)・ロボの超振動を受けて、激しく揺れながら閉じ始めた。

「閉まるッ……！」

そこに13（サーティーン）・ロボの腕が迫って来た。
「ハッ――」
握り潰されると思ったが、その巨大な腕はジョー《009》を優しく摘（つま）み上げ、安全な大地の上に降ろした。
13（サーティーン）・ロボから声がした。
「ゼロゼロナイン、かりを返すぞ」
「えっ――?」
「ウーウ、おいらは、いつもいじめられてばかりいた。ゼロゼロナインは、おいらに優しくしてくれた」
「僕にかりって、僕は……何を――?」

ジョー《009》には直ぐに思い浮かぶ心当たりはなかった。唯一、それらしいことがあるとすれば、初めて彼と会った時、バイクの少年たちに、思わず抗議をしたことくらいだった。

ひどいじゃないか——。そう言っただけだった。

「ほんの、ちょっとの親切でも……うれしい」

少し間があって、13（サーティーン）・ロボの首のハッチが開き、縛られ、猿轡（さるぐつわ）を付けられたコズミ博士が0 0 13（ゼロゼロサーティーン）に外へと押し出された。

「コズミ博士……！」

13(サーティーン)・ロボは左腕でコズミ博士を摘み上げた。

「00 13(ゼロゼロサーティーン)、コズミ博士をどうするつもりなんだ……！　頼む。コズミ博士を返してくれ――」

サイボーグマンの部隊を斃(たお)したジェット《002》、フランソワーズ《003》、アルベルト《004》、ジェロニモ《005》、張々湖(ちゃんちゃんこ)《006》、グレート《007》、ピュンマ《008》が駆け付けて居た。

左腕に摑まれ、持ち上げられているコズミ博士を目撃し、一同に緊張が走った。

00 13(ゼロゼロサーティーン)は13(サーティーン)・ロボの内部で俯(うつむ)いていた。

「コズミ博士は返す」
13（サーティーン）・ロボは静かに腕を降ろし、コズミ博士を解放した。
「ゼロゼロサーティーン」
「はやく、いけ。コズミ博士をつれて、おいらの、このロボットから離れるんだ。黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）を裏切ったら、爆破されることになっている！」
「君はどうするんだ？」
「爆発は止められないけど、威力は小さくできる。おいらにしかできない。おいらも、すぐあとからでる。はやくいけ！」

その行動に驚き、監視カメラで視ていたバン・ボグートは怒り心頭となった。
「何をやっている……?!」
ジョー《009》はコズミ博士を抱き起こして、13（サーティーン）・ロボから離れながら叫んだ。
「君も早くッ、待ってるぞ、ゼロゼロサーティーン！」
他のメンバーも13（サーティーン）・ロボから走って離れた。
ボグートはワナワナと震えていた。
「００13（ゼロゼロサーティーン）め……！　ここで裏切るとは……！」
その手が技師から手渡された13（サーティーン）・ロボの自爆装置のス

イッチに伸びた。
ボグートは笑っていた。
「面白い——。これが〝優しさ〟のケミストリィか。これだからモルモットたちの実戦テストは堪らなく楽しいのだよ」
スイッチを押した。
その瞬間、20号埋立地の13・ロボが轟音をたてて爆発した。
〝大丈夫だ——〟
爆炎と粉塵が包む中、0013の脳波通信が届いた。
〝この爆発は13・ロボの自爆装置のものだけさ——。仕掛

けられていた高性能バクダンは、おいらが切ったから……。

もう、心配は……ない――》

バスバスッ……と、脳波通信は擦れるようにして消えた。

ジョー《009》たちの場所にも爆風は届いたが、コズミ博士に怪我はなかった。

「――サーティーン」

0013（ゼロゼロサーティーン）が心配で、ジョー《009》はフランソワーズ《003》にコズミ博士を託すと引き返した。

吹き飛んだ13（サーティーン）・ロボの残骸が散乱していた。

「ゼロゼロサーティーン!」

叫んだが返事はなかった。
００13（ゼロゼロサーティーン）の唯一の会話手段だった脳波通信も、今の爆発で故障していた。
ジョー《009》は粉塵の中に踏み入り、ボロボロになり、うつ伏せで倒れている００13（ゼロゼロサーティーン）の姿を見付けた。
「ああっ、ゼロゼロサーティーン！」
００13（ゼロゼロサーティーン）はジョー《009》を見ると、力なく少しだけ首を上げ、嬉（うれ）しそうに優しく笑んだ。伝えたいことがあるのか、何かを話そうと懸命に口を動かしたが、あの温かみのある、優しい擬音のような言葉も、もう出せなかった。

「ゼロゼロサーティーン。君のお蔭（かげ）だよ……！」

００13（ゼロゼロサーティーン）は最後の力を振り絞って右手の指先で赤土の地面に文字を書いた。

と・も・だ・ち・に・な・り……。

そこまで書いて、００13（ゼロゼロサーティーン）の腕は動かなくなった。

「友達になりたかった。僕だって……」

ジョー《009》はその手を握り締めた。

００13（ゼロゼロサーティーン）の首は力なく赤土の地面に垂れ、彼はその機能を停止させた。

――僕たちは心を通わせることができた。気持ちを伝える

方法は一つじゃない。本当の思いを伝え合える仲間になれば、僕たちは孤独じゃない……。僕は、そう、信じたい……！　ゼロゼロサーティーン、君はもう、友達なんだ……。

ジョー《009》は永遠の眠りについた友に、心の中でそう語り掛けた。

残像の死角

「そういや、いつかの病院でラズバの子蜘蛛に憑依された奴らと闘ったときに現れた奴、デーモンには思えなかったが、アイツ、何だったんだろうな――?」
　ラミアの件に片が付き、次のターゲットは、いよいよ、操り蜘蛛のラズバだった。
　飛鳥了のマンションで、明と了は次の作戦を練っていた。
「見えないが、気配を感じたという、お前がそう言っていた奴の事か――」
「ああ、どうやったか、わかんねえが、ほんの一瞬であれだ

けいたラズバの子蜘蛛を始末しやがった」

「時間を操れるということか？　若（も）しくは瞬間移動か――」

「いや、あの気配は瞬間移動の類（たぐい）じゃなかった。途轍（とてつ）もなく速いが気配は途切れずに流れていた。俺の中のアモンの記憶にはない。了、お前の得意な神話や伝説に、そんな奴はいねえのか――？」

「――そうだな……」

飛鳥了は己が知識を紐解（ひもと）くとき、不思議な目力だけを残し、無表情になる。この表情をするときは、本気で脳を活性化させているときだった。

「合体して肉体を得る前のデーモンなら、霊体だからな。瞬間移動のような真似も可能だが、明の言うように、気配が持続していたとすれば、そいつの能力はテレポートではなく、常識を超えた高速移動だって事になる。だとすれば、それは悪魔ではなく、寧(むし)ろ神の力に近い。韋駄天(いだてん)だ――」
「韋駄天って、あの〝韋駄天走り〟の、あれか？」
「ああ、元はスカンダというヒンドゥー教の軍神が仏教の護法神になったもので、足の速い青年の神だ。確か、梵名はクマーラだ――」
「正義の味方、鞍馬天狗(くらまてんぐ)か？」

飛鳥了は「フッ――」と鼻で笑った。
「――馬鹿にすんなよぅ」
「いや、そうじゃない。お前は冗談のつもりで言ったのだろうが、本質的にはその通りだ。ある意味――当たってる」
「はあ?」
「鞍馬寺の尊天の一人は、サナート・クマラだからな」
「もう、いいよ。了の話は出て来る言葉が難しくって、全然、頭に入って来ねえ。聞いた俺が、馬鹿だった」
「わかった、わかった。ラズバの手掛かりは、俺の方で解かり易くまとめておく。奴らの行動予測もつくようになって来た。取り敢(あ)えずは大物のラミアも斃(たお)したんだ。たまには美樹

の相手でもしてやるんだな」
「簡単に言ってくれるぜ。アイツはな、デーモンより怖いんだぞ」
ある意味、それも嘘ではなかった。
守りたい存在を〝意識〟することは、恐怖との闘(せめ)ぎ合いに身を置くのと同じだ。絶対に失いたくない存在を〝意識〟すれば強さも得られるが、弱みにもなり、底知れない恐怖を感じずにはいられなかった。
コズミ博士の誘拐事件で先延ばしになっていたが、ジョー

《009（ゼロゼロナイン）》は再度あの新宿の病院を調査に訪れた。

女子高生を守り、蜘蛛に憑依された人々と二人の高校生が闘っていたのを目撃したのは、ほんの一週間程前だった。今、思い返しても、あの二人の高校生の修羅の如き闘いは普通ではなかった。

三階の病室の窓硝子（ガラス）をすべて割るような闘いだった。

元々は〝断崖（だんがい）の屋敷〟に設置した全方位レーダーの感知した重力異常を確認するために訪れたのだが、それは確認出来ず、あの闘いに遭遇した。暴動とも呼べる程の事件だったにも拘（かかわ）らず、不思議なことに新聞やＴＶでも一切報道されな

かった。

　そればかりか、再び訪れたジョー《009》は敷地の中に入り改めて詳しく調べたが、病院には破壊された痕跡（こんせき）一つなかった。医師も看護師も患者も何の変哲もなかった。割れた硝子を交換し、壁を塗り替えたとか、そんなことではなかった。屋上にも痕跡がまったくなく、あの闘いそのものが無かったかのように、落ち着いた時間が流れていた。

　――どういうことなんだ……？

　まるであの日体験したことが、自分だけが見た白昼夢のように思えた。

　――幻だったのか……。いや、そんなはずは……。

不思議な感覚だった。脳に連動した補助メモリーがその存在を確認しているのに、その内容に関しての記憶だけが読み取れない場所にどんどん沈んでいく、そんな感覚だった。

「この頃、よく授業サボるよね——明君」

「そうかなァ……」

はぐらかそうとしたが美樹は追及を緩めなかった。

「そうかなァ、じゃないわよ——。授業どころか、この前なんか、学校までサボっちゃって——。いったい、ドコ行ってたのよ?」

注意というより疑惑の視線だった。

昼休みの高校の屋上で不動明は近頃の生活態度全般についての牧村美樹から吊し上げをくっていた。

「どこって、まあ……。散歩だよ、散歩」

美樹にしてみれば毎日一緒に登校しているのに、いつの間にか教室からいなくなって屋上でサボっていると思ったら、その屋上からもときおり姿を消す明が心配だった。

両親を事故で一遍に失って牧村家に来て、家では明るく振舞っている明だったが、やはり、心の傷が癒えてないのかと美樹は心配していた。

明にも美樹の気持ちは伝わっていた。悪いとは思っていたが、こうやって美樹に可愛く怒られる時間も嫌ではなかっ

た。それに学校を抜け出している本当の理由が、飛鳥了と一緒にデーモンを追い、奴らを狩っているためなどと正直に答えられるはずもなかった。

「何も今、ココで話さなくても。家で話せばいいだろ——？弁当食ったばかりで消化に悪いぜ」

明が牧村家に居候するようになってから、明の弁当は美樹が作っていた。美樹たち女子は中庭のテラスで気の合う仲間たちと一緒に食べるのが習慣となっていたが、明は午前中に教室を抜け出すと、屋上のてっぺんにある給水タンクの横で大半の時間を過ごし、正午になったら弁当を食べ、下校時間までうたた寝をするのが日課となっていた。

了と昼間のデーモン狩りに出ない日は、大体こんな感じだった。

無論、今だって本当に、ただゴロゴロとサボっている訳ではない。デーモンは弱いところを衝(つ)いて来る。明の行動を封じる目的で何か仕掛けて来るとすれば、真っ先に狙われるのは美樹であり、この町に住む身近な人々だった。精神集中し、悪魔人間(デビルマン)となった明の超感覚でデーモンたちの動きをいち早くキャッチするには、見晴らしが良く、美樹にも目が届くこの屋上で見張るのが最も効率的だった。

言ってみれば、本当のところ、すべては美樹を護(まも)る為であ

り、それ以外の理由などなかった。
「家で話せるわけないでしょ。タロちゃんの教育にも悪いし、お母さんたちに心配かけるでしょ。また飛鳥君とつるんで、ろくでもないことしてるんじゃないわよね？」
「ろくでもないことって……」
そう言われても、確かにその通りなので反論も出来なかった。
美樹は飛鳥了にあまり良い印象を持っていないようだった。元々、三人の父親同士は研究分野こそ違ってはいたが、家族ぐるみで付き合いがあって知らない仲ではなかった。
美樹も幼い頃からの記憶は確かにあった。

小学生の頃、夏休みに三家族一緒に海へ出掛けた想い出もある。海の家でかき氷を食べ、夕方はバーベキューをして、夜は浜辺で花火もした。でも不思議なことに、記憶は綺麗に整理されているのに、美樹には想い出の中に登場する飛鳥了の顔を思い出すことが出来なかった。確かに明に比べれば、あまり会う機会もなく、一年に一度くらいしか会わない親戚のような距離感だったが、それでも親戚の顔なら思い出せた。

先頃、飛鳥了の住んで居た〝森の洋館〟が火事になり、久しぶりにその存在を思い出すまではすっかり忘れていて、飛鳥了自体、美樹にとっては最初から〝居ない〟存在と、余り

変わりのない感覚になっていた。

――何で……、思い出せないんだろ……。

それは、牧村美樹だけが感じていたこの世界の違和感だった。

イルカの夢

1

大海へと続く空で、数えられないほどの白い海鳥たちが競い合うように鳴いている。

海風の音、断崖(だんがい)に波が砕ける音。少し離れた砂浜に寄せる波の調べ。自然の音はどんなに騒がしくとも不思議に心地好かった。

断崖の上に建つ屋敷は戦後すぐに建てられたもので、築七十年を迎えようとしていたが、代々の所有者によって細(こま)やか

に管理され、古い洋館の見た目に反し、最新の居住設備が整っていた。

元々、近隣の有力者が孤独を好み、何もない断崖に老後の住処（すみか）として建てたものだったが、その狙い通りか、いつまで経ってもバスも通らず、町とのアクセスが悪く、建てた当人が亡くなると屋敷は売りに出された。二代目の所有者はイギリス人の海洋生物学者だった。オスカー・ドルフィンといい、世界屈指のイルカ研究者で、日本での活動拠点としてこの屋敷を購入した。

彼がここを選んだ理由は屋敷そのものより、その地下から通じる秘密の海底洞窟（どうくつ）にあった。それは元々この屋敷を建て

た先代の所有者も知らないことだったが、研究施設の候補地を探していたオスカー・ドルフィンは断崖をくまなく調査し、海底の浸食部に隠れた洞窟を発見した。強固な断崖の内側には大海と繋(つな)がった海底湖があり、傷ついたイルカを保護したり、調査のために船で海に出かけるには恰好(かっこう)の環境だった。

オスカーは私財を擲(なげう)って海底洞窟を整備し、その内部に海洋生物研究所を造り、凡(およ)そ三十年ここで研究を続けたが、やがてハワイに拠点を移すことになり、科学者仲間で交流のあったコズミ博士が施設ごと買い取った。

九人のサイボーグとギルモア博士が日本のコズミ博士を頼ったのは、ギルモアとコズミの信頼関係だけでなく、この屋敷の秘めたる環境にもあった。

海洋生物学者のオスカー、工業化学研究者のコズミ、サイボーグ研究者のギルモア。

専門分野の異なる三人だが、この三人と、オスカー・ドルフィンの一人息子であるウィリアム・ドルフィンを含めた四人は、二十年来の、共通する一つの夢を持っていた。

不幸にしてその夢を叶（かな）える前にオスカーは天寿を全うし、ギルモア博士自身もサイボーグ研究の誘惑に魅入られ、黒い（ブラック）

幽霊団（・ゴースト）の研究者に身を窶（やつ）してしまった。

　ギルモア博士は、あの島で脱出計画を練りながら、ここに辿（たど）り着ければ、人々の未来を思い、純粋に科学を追求していた頃の自分が取り戻せるような気がした。

　幸いなことに、親友であり、現在の屋敷の所有者であるコズミ博士は黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）との繋がりもなく、九人のサイボーグたちの取り敢（あ）えずの潜伏地としてもここは最適だった。

　黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の研究施設から脱し、数度の攻防戦を太平洋の島々で繰り広げ、結果として、彼らの潜水艦《101》を奪い、無事、ここに辿り着くことが出来た。

世界広しといえども、奪った大型潜水艦を丸ごと隠せる海底洞窟のあるアジトなど滅多にあるものではなかったが、古い友人との関係はその奇跡を実現した。

「ギルモア君。それは大変なことだったな――」

ここに着き、顚末を打ち明けたギルモア博士にコズミ博士は言った。

コズミ博士は昔ながらの黒眼鏡を掛けた白髪の温厚な老人だった。ギルモア博士より十五歳年上とのことだった。

「君は研究にのめり込むきらいがあったから、そういうこともあるだろう」

コズミ博士はギルモア博士を責めることもなく、ギルモアと九人のサイボーグを受け入れた。
「過ちに気付いたのなら、そこからまた始めればいい。人生も研究も同じじゃよ」
そして、ジョー《009（ゼロゼロナイン）》たちに、「君たちも、自分の家だと思って寛（くつろ）いでくれ。私も一人暮らしで退屈していたんで、ときどき遊びに来るさ。願ってもないことだ」と、優しい笑みを向けた。
コズミ博士は工業化学の重鎮で、自分の研究所は都心の郊外に持っており、都内のマンションに住んでいた。

今はこの屋敷は、時折り別荘として使う程度で、住むために所有しているのではなく、寧ろ、かつての友との夢を守るために、この〝断崖の屋敷〟を守って来たというのが本当のところだった。
「楽しくなりそうだな、ギルモア君。これでアレを造る夢も再開できそうだ」
「ええ、やりましょう、コズミ博士」
嬉しそうな二人の博士を見て、ジョー《009》はギルモア博士に尋ねた。
「アレって……何ですか?」

「私とコズミ博士と、あと二人の仲間が居てな、以前からの夢なんだ」
ギルモア博士がそう言うと、コズミ博士が続けた。
「完成すれば、きっと君たちの助けにもなるものじゃよ。尤も、この夢を思い描いたときには、こんな状況になることは想定してはおらんかったがな」
と、笑った。
初めてゼロゼロナインたちがコズミ博士と顔を合わせたとき、そんなことも話した。
コズミ博士も多忙で、この三ヵ月、〝断崖の屋敷〟にはあ

まり訪れず、詳しい話は聞けずにいた。

当然の如く黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の追手が想定されたし、予想通り、0010（ゼロゼロテン）や0011（ゼロゼロイレブン）が現れる騒動も発生し、そこに来て、0012（ゼロゼロトウエルブ）の待ち伏せと、0013（ゼロゼロサーティーン）の絡んだ、あのコズミ博士の誘拐事件だった。

正しく、暇がないほどに事件が続いていた。

それでもギルモアはここに着いてから、やるべきことを着実に進めていた。先（ま）ず行ったのは、〝断崖の屋敷〟の警備態勢の強化と、足場を固めるための基地造りだった。軍事施設並みの索敵能力を有する全方位レーダーを屋敷の傍にカムフ

ラージュして設置し、地下の海底洞窟にあったオスカーの海洋生物研究所を改造し、基地を造り上げた。
ゼロゼロナンバーの九人は闘うだけでなく、自分たちの拠点作りにもその能力を遺憾なく発揮した。
ジェロニモ《005》や張々湖(ちゃんちゃんこ)《006》の物理的なパワーは言うに及ばず、ピュンマ《008》の水中行動能力には大いに助けられた。フランソワーズ《003》はギルモアのアシスタントとしてシステム周りを調整し、イワン《001》はギルモアの要望に対し、常人の発想にはないアイデアを次々と提示してギルモアが思考をまとめるには欠かせない良き相手となっ

た。ジェット《002》もアルベルト《004》もグレート《007》もジョー《009》も、足りない資材を調達したり、配線を繋げたり、コンクリートをかき混ぜたりと、作業の内容を選ばず協力した。

その作業は九人のサイボーグたちの一人一人が新しい人生を前向きに生きるために必要な作業でもあった。黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）によってサイボーグにされてしまった現実を受け入れ、その身体を最大限に使い、この世界から、必ず争いを失くす——。

争いを失くすための戦いの始まり——一見、矛盾に満ちた〝彼らの願い〟だったが、その覚悟を実感するには丁度良い

時間となった。
海底洞窟は僅(わず)か二ヵ月で潜水艦の港湾設備を併設した基地へと生まれ変わった。
「さてと……」
その基地の研究室でギルモアは黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)から奪った大型潜水艦《101》を設計図に落とし込み、念願の作業に着手した。《101》は、優れた隠密(おんみつ)性と高速性を兼ね備えていた。排水量千五百トン。動力は最新型のディーゼル・エレクトリック方式でプロペラの腐食や振動による騒音《キャビテーション》を防ぐためハイスキュー・プロペラを使用していた。

ギルモアはこの大型潜水艦を素体にして、ゼロゼロナンバーの九人が秘密裏に世界の何処へでも赴き行動するための万能潜水艇を造ろうとしていた。
大型潜水艦を分解し、使える部分はそのまま使用し、足りない部分は新しく開発する。造ろうとする潜水艇は中型なので、必要な基本マテリアルは充分だった。海底洞窟のドックには造船に必要な設備も準備した。
それでも特殊な部品などはどうしても足りないものもあり、比較的、外を出歩いても目立たないジョー《009》がギルモア博士の描いた図面を手に町工場を巡り、丁寧に交渉して入手した。

「ギルモア博士、他に必要なものは？」

特注の接続部品を届けに来たジョー《009》が声を掛けた。

「ああ、これで大方の材料は何とか揃ったな。本当なら、加工されたものを買えば楽なのだが、そんなモノが商品リストにあるような大手企業は大抵ブラック・ゴーストの息が掛かっているからな」

横でビス打ちをしていたアルベルト《004》とピュンマ《008》がニヤリと笑った。

「ギルモア博士が《101》を分解して新しい潜水艇を造ってるなんて知ったら、奴ら、見物ツアーでも組んで押し寄せて来るかもな——」

「見物だけで、大人しくしていてくれればいいんだけどね」
ギルモアが思い描く万能潜水艇には三つの課題があった。
一つは完璧（かんぺき）なステルス機能を備えていること。そして、移動司令室に使えるほどの高精度の索敵能力を有していること。それともう一つ、潜水艇でありながら飛行能力を兼ね備えることだった。
ギルモアは机上の設計ではこれらをクリアしていたが、その一つ一つを実現させるためには、それぞれの専門分野の友人たちの力が必要だった。
ステルス加工用の合金ポリマーはコズミ博士が完成させた。黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）が13（サーティーン）・ロボに採用するため、コズミ博士か

ら技術を奪おうとしたシュピーゲルポリマーだ。コズミ博士の論文にヒントを得た黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）だが、結局、自力で実用強度に至るポリマーを完成することが出来ず、試作のポリマーを装備した13（サーティーン）・ロボでコズミ博士自身を拉致（らち）するという強硬手段に出た。ところが、13（サーティーン）・ロボが００９（ゼロゼロナイン）たちと戦ったことで、それを間近で目撃することになったコズミ博士は実用強度の着想を得た。加速した13（サーティーン）・ロボの迷彩フィルムのダメージから逆に打開策を見出（みいだ）した。試薬を予（あらかじ）め遠心加重することでポリマー強度が増すことが分かり、見事、シュピーゲルポリマーが完成した。

黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）にしてみれば、全く皮肉な展開だったとしかいいようがない。

飛行能力に関してはエンジンの問題が大きかったが、これについてはギルモア自身が以前から温めているアイデアがあった。

ロケットエンジンとジェットエンジンのハイブリットである。元々構造の異なるこの二つを併用型にすることは不可能とされていたが、それは数ヵ月も宇宙を旅する宇宙ロケットを想定した壁であり、今回、目指している機能に限定すれば不可能ではなかった。

重く、大規模なエジェクタロケットやハイブリットエンジンではなく、内部型カートリッジロケットと外殻ラムジェットの複合型エンジンという発想で、離水時のみに限定するロケット噴射の使用ならば実現出来ると踏んでいた。

動力に関しては潜水艇の状態や環境に合わせ、さらに分散させることにした。接水時は海水に磁界をかけて推進力とする超伝導電磁推進とハイスキュー・プロペラのソーラー・エレクトリック方式。非接水時にはラムジェット噴射による推進。蓄電は太陽光で賄えるので、プログラムで適性動力を制御すれば液体燃料の消費を大幅に抑えることが出来た。

一番の問題は潜水艇に備えるレーダーだった。重量を抑え

たいところだが高精度の索敵能力を備えたセンサーを幾つも連動するとなると、そうもいかない。あらゆる局面に威力を発揮する汎用性の高いマルチレーダーが必要だった。

ギルモアには、その分野の専門家に心当たりがあった。

「ゼロゼロナイン、これに備え付けるレーダーの設計を頼みたい友人がいる。今から会いに行こうと思うのだが、一緒に行ってもらえるかね？」

「ええ、博士」

「そうだ、フランソワーズにも一緒に行ってもらおう。確か、同じくらいの娘さんが居たはずだから、いい友達になれるかも知れんしな」

ギルモア博士は旧友との久しぶりの再会に心が躍っているようだった。表情は明るかったが、ジョーには、どこかぎこちない作り笑顔のようにも見えた。

——博士……。何か、心配事でも……？

ジョー、ギルモア、フランソワーズの三人は、ジョーの運転する赤いコルベット・スティングレーで訪ね人の住む横浜へと向かった。

2

横浜の近郊に〝海〟をコンセプトとしたテーマパークがあ

り、海に直結した水族館と遊園地が隣接していた。
ウィリアム・ドルフィン教授はそこに近い海岸沿いにあり、自宅を兼ねた研究所で娘のシンシアと暮らしていた。
ウィリアムこそがコズミ博士の屋敷の元々の所有者である、亡くなったオスカー・ドルフィンの息子だった。彼は父のイルカ研究を受け継ぎ海洋生物研究の世界で権威となる一方、音波研究のパイオニアとしても知られ、世界有数の音響物理学者でもあった。
娘のシンシアは十九歳で、父の研究を手伝う傍ら、シーパークでイルカの飼育係をしているとのことだった。
「いいところですね」

海の見える駐車場に車を停めたジョーは研究所を見て言った。桟橋が一体となり、殆ど海面に密接しているヨットハーバーのような造りだった。ジョーは一瞬、波の高い日は大丈夫なのだろうかと心配したが、海の波と音波の違いはあっても、波の専門家である物理学者が造ったものなら案ずるには及ばないかと、自分の心配性に笑みを溢した。

ギルモアたちが訪れることは、予め電話で告げていた。

旧友との再会はギルモアにとってこの上ない喜びだった。

だが、ジョーとフランソワーズには黙っていたが、ギルモアは気の重い問題を一つ、胸に抱えていた。

ウィリアムの妻、クレメンスが亡くなっていたことを知っ

たのは、つい、先日、コズミ博士に聞かされてのことだった。

十数年前、クレメンスもまた、良き科学の未来を語り合った仲間だった。それなのにギルモアはサイボーグ研究の誘惑に駆られ、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の片棒を担ぎ、友人の妻の死すら知らなかった。

一つの過ちは、知らないところでも後悔の種を生むものだと否応（いやおう）なしに知らされた思いがした。

ギルモアは途中でジョーに寄ってもらい花屋で買った〝葬送の花束〟を手に取った。

フランソワーズもジョーも敢(あ)えて聞かなかったが、その花束から察していた。
ウィリアム・ドルフィンの研究所の入口は桟橋を海側に回った場所にあった。
三人がエントランスに向けて歩いて行くと、脇から延びた桟橋の上に、鮮やかなピンク色のラインの入ったダイビングスーツの女性が海の方を向いて立っていた。
「おお……」とギルモアが懐かしそうに声を上げた。
前に会ったときは十にも満たない少女だったが、ギルモアにはそれがシンシアだとすぐに分かった。シンシアは長い銀

髪が邪魔にならないようポニーテールに結んでいた。

「あ……」

不意にフランソワーズが小さく言った。

危険のない情報をキャッチしたときの表情だった。ジョーは警戒心を解いた。

シンシアが立つ場所のほんの五メートル先の海面から、一頭のイルカがジャンプした。

クキキキキッ——と、悪戯坊主のような笑い声を上げると尻尾で海面を叩きながら立ち、テールウォークでバックして、勢いをつけて頭から潜り、楽しそうにまたジャンプし

た。
「うわ、すごいなぁ」
ジョーは楽しそうなイルカの動きに一瞬で魅了された。サインを出した様子もなく、餌を与えている訳でもなかった。曲芸ではなく、ダイビングスーツの女性に対するイルカの愛情表現なのだろうとジョーは思った。
「もう、お帰り。フィンピー」
女性がそう言うと、イルカは〝またね〟と言うように一度鳴き、海面のすぐ下を気持ち良さそうにスルスルと泳いで行った。
「シンシアだね、久しぶりだね」

ギルモアの声にダイビングスーツの女性は振り向くと、彼女も懐かしそうに微笑んだ。
「ギルモアの小父様！」
そしてギルモアが持っていた〝葬送の花束〟を見て、「小父様、ありがとう――」と神妙な面持ちで小さく頷いた。
ギルモアはシンシアにジョーとフランソワーズを紹介した。
「紹介しよう。以前、君たちが住んでいたあの〝断崖の屋敷〟で、今、一緒に暮らしている仲間でな、ジョーとフランソワーズだ」

「よろしく」とジョーが言い、「初めまして」とフランソワーズが笑顔を見せた。

「シンシアです。ようこそ」

「あのイルカ、フィンピーっていうの？」

「ええ、すぐに私を追い掛けてシーパークから脱走して来るの。プールから海に繋（つな）がっているゲートに柵（さく）の低いところがあって、他の子たちは怖がってジャンプしないのに、あの子だけは怖いものなしで——。こっちが冷や冷やし通しよ。さあ、どうぞ、パパも楽しみに待っています」

ボートハウスのロッジのような応接間で、開いた東向きの

窓から波の音が絶えず聴こえていた。
　以前はまだ若者の面影のあったウィリアム・ドルフィン教授も十数年の時を経て、今ではすっかりダンディな髭（ひげ）を蓄えた英国紳士の風貌（ふうぼう）になっていた。父のオスカーに一層似て来たと思い、ギルモアは微笑ましかった。
　首元の開いた黄色いワンピースに着替えたシンシアとウィリアムは並んでソファに着き、それに向かい合うように、ジョー、フランソワーズ、ギルモアの順に座った。花束はシンシアが窓際にあったクレメンスの写真の横に飾ってくれた。
「ウィリアム君、済まなかった。御不幸があったことを、つ

い、先日まで知らなかったものでな……」
「いいえ、ギルモア博士。お互い、研究や学会で世界を飛び回っている身です。互いに少々連絡が途絶えても、それは仕方のないことです。それよりも、貴方（あなた）とこうして再び会えたことが、今は何よりも嬉（うれ）しい……」
ギルモアとコズミとドルフィン親子の四人の仲間は、年齢で言えば亡くなったオスカー博士が飛び抜けて年上で離れており、次にコズミ博士、ギルモア博士、ウィリアムの順だった。ウィリアムは、すぐ上のギルモアを兄のように慕っていた。
「三年前のことです」

　ウィリアムは静かに語り始めた。

「クレメンスとシンシアを連れて、私はロシアを巡っていました。危険のない旅のはずでした。ですがそこで、ウクライナの内紛に巻き込まれてしまい、気が付いたときには私たち家族三人は、そこが何処とも分からない病室のベッドの上に寝かされていました」

　コズミ博士からはウィリアムの妻のクレメンスが亡くなったと聞いただけで、詳しい話は聞いていなかった。

　だが、ギルモアはその出来事の裏に、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の気配を感じていた。

ウィリアムは続けた。
「誰が敵なのか、誰がそうでないのか——。今となっても、それすらも分からない。そんな内紛でした。ただ——どちらの勢力にも、奴らは兵器を流していた」
ジョーにもフランソワーズにも、それが黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)であることは容易に理解出来た。ジョーは知らず知らずのうちに拳(こぶし)を強く握っていた。
「奴らには、以前、接触を受けたことがあった。開発者として迎えたいとの誘いだった。私は断った。それであんなことに……」

シンシアは悲痛な面持ちで口を噤んでいた。
「奴らは、予め計画されていた内紛を利用し、脅しを掛けて来たのです。家族の命をチラつかせるようにして……。私は軽傷で済んだが、妻とシンシアは危ない状態だった。そして奴らは、交換条件を持ちかけて来た――」
　ウィリアムは一瞬シンシアを見て、それから、後悔に押し潰されるかのように視線を伏せた。
「ギルモア博士に懺悔します。私は……、科学者として、あるまじきことをした。奴らに、自らの研究を手渡してしまったのです」

「ウィリアム君……」

「ＭＭＭ１（マッドマシーンエムワン）。あらゆる音波をリトレースし、増幅再現するシステムです。イルカやクジラの会話をヒントに、極小波でも世界の端と端で会話が出来る音波通信システムとして研究を進めていました。だが、この分野は見る者が見れば、音波兵器と紙一重なのです——」

「確かに……。そのシステムなら、音波により任意の敵だけを殺傷することも出来るだろうし、使いようによっては、非接触で敵のプログラムのデータを書き換えることも可能かも知れん……！」

「ええ、ＭＭＭ１は生物も機械(マシーン)も制圧出来る、兵器に成り得るのです。奴らはそれにいち早く気付いてしまった。そして、そんな危険なものを、私は、奴らに捧(ささ)げてしまった……。クレメンスを失ったのは、その報いなのです。悪魔に屈服した、この私の……！」

ギルモアは身を乗り出し、ウィリアムの手を握っていた。

「いや、懺悔しなければならないのは、私の方だ……！」

「ギルモア博士……」

「私の罪の方が、遥(はる)かに重い……！　私もなッ、彼らの誘いを受け、その誘惑に負け、彼らの庇護(ひご)の下で研究をしてし

まった。科学の前に立ち塞がるモラルに縛られず、資金の心配もなく好きな研究を続けられた。家族を思い、止む無く彼らに協力した君に比べれば、同じ過ちでも雲泥の差だ――。私はただ、自分の欲望のために手を染めてしまった。恥ずかしいことだ……！」
その眼には薄らと輝くものがあった。
ギルモアはジョーとフランソワーズを見た。
「大勢の者たちを巻き込んでしまった。この罪は消えやせんだろう……」
ギルモアが余りにも肩を落としたので、ジョーが優しく言

葉を挟んだ。
「でも、僕たちは気付いた。間違いを正すと――」
「ええ」
ジョーとフランソワーズは静かに頷いた。
ギルモアはウィリアムに向き直った。
「ブラック・ゴーストの庇護によって開発された数々の力は、恐ろしい兵器であると共に、奴らに対抗する力にもなる。ウィリアム君、ブラック・ゴーストを倒し、争いのない未来を作ろうとしている仲間たちがいる――。君も、私たちに力を貸してはもらえんだろうか――？」
「……ギルモア博士」

ギルモアは渾身(こんしん)の想いで今に至る状況と心のうちをウィリアムとシンシアに打ち明けた。

ウィリアムは視線を落として考えていた。

「…………」

窓から、波の音が小さく聴こえた。どのくらいだろう、暫(しばら)くの間、全員が波の音だけを聴いていた。

「――帰ってください」

突然、娘のシンシアがきっぱりした口調で言った。

シンシアは努めて無表情に顔を強張(こわば)らせているようだった。深い想いを抑えている表情に見えた。

——えっ……？

ギルモアもジョーもフランソワーズも突然のことで、返す言葉が見付からなかった。

気に障ることがあったのなら謝るつもりだった。しかし、これまでの遣り取りを思い返し、シンシアが頑なになった理由を探したが、すぐに思い浮かぶ理由らしいものはなかった。

「パパには、いえ、私も、もう、ブラック・ゴーストには関わってもらいたくないし、関わりたくもありません。そのようなお話なら、お帰りください」

シンシアは絞り出すように言葉を区切って言った。

　ギルモアは自分の感覚が麻痺していたことに漸く気付いた。
　考えるまでもないことだった。シンシアが、今、口にした理由に勝る理由など、他にはなかった。
「済まなかった。突然、お邪魔して、こんな話を……」
　ギルモアは素直に詫びてから、ゆっくりと立ち上がった。
　ジョーとフランソワーズもそれに倣って静かに立った。
「ギルモア博士……」
　ウィリアムも気まずさに戸惑っている様子だった。
「本当に済まなかった。長い時間を埋めるには、相応しくな

い話をしてしまった。次は、君の好きなスコッチを持参するから、楽しみにしていてくれ」
精一杯の笑顔を見せたギルモアに、ウィリアムも力ない笑みを返した。シンシアは優しい表情を取り戻したが、それでもやり場のない思いに、まだ困惑している様子だった。
二人に送り出され、エントランスの桟橋に出た。ギルモアは打ちひしがれていた。
歩き出して数歩目、不意にフランソワーズが何かに気付いたように立ち止まった。
「フランソワーズ?」
「あ、いえ——」

ジョーの問いにフランソワーズは言葉を濁した。ジョーの知る限り、その表情は彼女が強化されたその特殊能力により、悲しい発見をしたときのそれだった。

優しい警告

三年前、ウクライナの内紛に巻き込まれたウィリアム・ドルフィン教授、クレメンス、シンシアの家族は、何処とも知れぬ病院に収容された。
シンシアにしてみれば、場所も分からなければ、そこが本当に安全な場所なのかも分からなかった。

ただ、憶(おぼ)えているのは、何日も自分が生命維持装置に繋(つな)がれているうちに、比較的、軽症だった父が先に快復し、枕元に現れ、安心したのも束の間、やがて暫くして、その父が暗い顔をしてまた現れ、母のクレメンスを救(たす)けられなかったと伝えられた。

シンシアは身動きも出来ず、その悲しい事実を受け入れることしか出来なかった。

父のウィリアムは亡くなった母のためにもシンシアを救うと、病床の彼女に誓ったが、彼女もこの事故が、ただの事故ではないことに薄々気づいていた。

〝死の商人〟として世界で暗躍する黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）が有能な科学者たちを強引に囲い込み、その武器開発の手先としていることとはシンシアも知っていた。

病室に窓もなく、看護師も笑顔一つ見せず、必要なことと以外は話さない。身体はベッドに固定され、首も動かせない状態だった。自分の身体がどうなっているのかも分からなかった。父のウィリアムは〝交換条件〟を実行するために滅多（めった）に病室には訪れず、殆（ほとん）どの時間を、天井を見て過ごした。

投薬のせいもあり、記憶は曖昧（あいまい）だったが、それでも、永遠に近い退屈さの中にあったからこそ、昨日のことのように鮮

明に残る記憶もあった。
ある日、眠りから覚めると、自分を覗(のぞ)き込んでいる人の気配がした。天井を見る枕元の視界の外だった。顔は見えなかったが、室内灯の明かりが作った影の動きで、背の高い男が立っているのがわかった。
「ドクター……？」
シンシアが尋ねると影は首を横に振った。
「ドルフィン教授に様子を見て来るように頼まれた――」
どこか頼もしげで、落ち着いた感じのする男の声だった。
物腰は柔らかいが、その発音から、きっと兵士だろうとシン

シアは思った。兵士は嫌いだが、この男の声は好きだった。
「今のままでは、君も、助からない」
「…………」
「はっきりと言おう。君のお父上は、君の命を救うために特別な技術を使う許可を求めて来た。我々に手を貸すという交換条件で――」
「〝悪〟に……、手を染めるということですか……？」
「科学には二面性がある。それが直接、すぐに〝悪〟になるとは断言出来ない――。だが、その可能性はある。それだけの技術を、君のお父上は持っている――。拒んでも、いずれは誰かが生み出すだろう」

「私の父が、それを兵器ではない形で完成しても……、その後で、誰かが悪用すれば、同じだってこと……？」
「俺は科学者じゃないが、科学とは、どうやら、そういうものらしい――」
背の高い男は、どこか悲しそうにそう答えた。
「お父上はそれほどの決意をした。後は君に、それを受け入れる覚悟があるかどうかだ――」
シンシアにはすぐに答えられる問いではなかった。
「何故、そんなことを私に――？」
「お父上との〝交換条件〟で、君の記憶を操作したり、消したりすることはしないと約束したからだ。約束は守る――」

「…………」

「君に守ってもらいたいのは一つだけだ。ただ、人として生きること――。何があっても疑ってはいけない――。君の手術は成功し、必ず元通りになる。すべてを忘れろ。ここであったことも〝死の商人〟に関わったことも――。そして何があっても、二度と、我々に関わってはならない。ただ、人として生きろ――それだけだ」

拒む気力も無かったというのが正直なところだった。だが、いきなり訪れた背の高い男が、真実を語り、彼なりの誠意を見せているのは理解出来た。

「――わかったわ……」

首も動かせないシンシアは視線で頷（うなず）いた。

硬い床の上を離れて行く軍靴の音が聴こえた。シンシアはその音が聴こえなくなるまでずっと耳を澄ましていた。すべてを忘れて、ただ、人として生きろ――。手術を受け、快復し、父、ウィリアム・ドルフィン教授とトロントのピアソン国際空港の駐車場で解放されたとき、その言葉だけを思った。

それ以来、シンシアの脳にこびり付き、何にも勝る〝警告の言葉〟となった。

記憶の底の記憶

1

海風が心地好かった。
ギルモア博士は〝断崖(だんがい)の屋敷〟の海側にある岩場に腰を下ろし、海を眺めていた。
時間を置くこともも必要だとギルモアは思った。自らの焦りに他人を巻き込むのは危険が伴った。一方的に望みを伝えても、相手を急(せ)かせ、混乱を招くだけだった。
自分自身が経験し、積み重ねて来た日常で得た〝納得〟は

自分だけのものであり、それを自覚せずして他者に協力を募っても、相手の〝納得〟はまた別のものであり、易々と同意を得られるものではない。

古い友人との再会はそんなこともギルモアに教えてくれた。

「ギルモアくん、ここにおったか」

コズミ博士の声がした。

「——コズミ博士」

振り向くと、和服の流しに薄半纏（うすばんてん）を羽織ったコズミ博士が立って居た。その姿で、コズミ博士が今日は休日気分の別荘

モードだとギルモアには判った。
　コズミ博士は飄々（ひょうひょう）とした笑顔でギルモアの隣の岩に腰を下ろした。
「あまり、芳（かんば）しくなかったようじゃな」
「この歳になっても、まだまだ反省することばかりです」
　ギルモアは海を見ながら頭を掻（か）いて自嘲（じちょう）した。
「いい話もあるぞ」
「は？」
「腕のいい板金職人が見付かった。新幹線も叩（たた）いたことがあるらしい。松五郎（まつごろう）といってな、顔はちょっと君に似ている

な。趣味で潜水艇を造っていると言ったら、四の五の言わず
やらせろと、そりゃー、ノリノリの上機嫌じゃよ」
「四の五の……？」
ギルモアには難しい日本語だった。
「つべこべ言わなくてもいい――と、いう意味じゃよ。科学者も職人も一緒じゃな。やりたいことは考えなくても、頭の中や腹の中に湧いて出て来る。肝心なのは報酬でも世間の目でもなく、それを成す意味を自分自身で見出（みいだ）せるかどうかじゃ。それを感じることの出来るものに出合ったとき、理由は必要なくなる」
「…………」

「つまり、それが、四の五の言うな——と、いう、日本語なんじゃよ」

ギルモアには、コズミ博士の心遣いが痛いほどに分かった。

ここでの生活を始めて、いつの間にか食事当番は張々湖（ちゃんちゃんこ）、グレート、ジョー、フランソワーズの四人に落ち着いていた。

自然に役割りの分担ができたので、他のメンバーもサボっている訳ではなかったが、この大所帯の食事を準備するのは

大変な作業だった。
「ハイ、出来たよ。運んで運んで――」
中華鍋（なべ）を器用に操り、張々湖は料理の才能を発揮した。
「本当に大したもんだな。店出せば繁盛するぞ。やりますか？　チーフマネージャー兼、社長はこのわたくしで――」
グレート・ブリテンがいつもの調子で厨房（ちゅうぼう）を和ませていた。
大皿に盛られた棒棒鶏（バンバンジー）にホイコーロウ、エビチリに麻婆豆腐（マーボーどうふ）。どれもプリプリのつやつやで、味も見た目も申し分なく、横浜辺りで店を開いても通用しそうな腕前だった。

「どこで料理覚えたの？」
「覚えた――？　料理は修業ね。どこで修業したね？　それ、正解ね」
　ジョーとフランソワーズは完成した料理を次々と暖炉のあるダイニングまで運んだ。
　赤ん坊（イワン）《001（ゼロゼロワン）》は窓際のソファの上の籠（かご）の中で、すやすやと寝息をたてていた。危機感知能力のあるエスパーサイボーグである彼が眠っているということは、差し迫った重大な事件が起きていないことを示していた。
　ウィリアム・ドルフィン教授の研究所を出たときのフラン

ソワーズの様子は、普通ではなかった。

気になってはいたが、ジョーもフランソワーズが敢（あ）えて口にしなかったことを聞き出そうとも思わなかった。

フランソワーズもジョーがそのことを気にしているのに、その話題に触れないようにしていることを気付いていた。

テーブルに料理を置くとフランソワーズから切り出した。

「ジョー」

「えっ」

「もう一度、シンシアさんと話をしたいと思うの」

「ドルフィン教授の所へ？」

「いえ、あたしが話したいのはシンシアさん。シーパークに行ってみようと思うの」
——何か……、確かめたいことがあるのか……。
フランソワーズが考えた末、特別な思いでジョーに打ち明けたのは判った。
「僕も、一緒に行こうか？」
「まだ、あたしにも確信がないの。あたし一人で話してみたいの」
「わかった。じゃあ、僕は近くで待機してるから、何かあったら、いつでも脳波通信で連絡して」
「ええ」

統制の取れた組織なら、作戦の指令を出す者は決まっている。しかし、抜け出した戦士たちとギルモア博士だけで構成された彼らのチームにはそれが無かった。

誰か一人の〝心〟に引っ掛かれば、それは切っ掛けとなり、行動が決まった。

必要に応じ仲間が加わり、その状況に合わせて〝信じる〟ことを選択する。それは、戦略という意味では不安定で曖昧（あいまい）な態勢だったが、短所でもあり長所でもあった。ここに来て、数度に亘（わた）り追手との交戦を重ねたことで、彼らが日常に向き合う特別なスタンスは、自然に出来上がりつつあった。

2

まだ、午前のショーの前で、円形の大プールの観覧席には観客を入れておらず、無人のスタジアムに似た気配があった。その割りに、人の居ない寂しさや閉塞感（へいそくかん）がなかったのは、プールの中を楽しげに泳ぐイルカたちのお蔭（かげ）だった。イルカのフィンピーはフランソワーズに挨拶（あいさつ）するように大きくジャンプした。

突然だったが、フランソワーズがシーパークの受付で面会を望むと、すぐに連絡が届き、シンシアは応じてくれた。

大プールを望む柵の前で、ダイビングスーツ姿のシンシアが待っていた。
「先日は、ごめんなさい」
シンシアの方から謝罪した。
表情も落ち着いていて、敵意を隠している気配もなかった。
ジョーは大プールの敷地の外にある五十メートル程離れたシーパークの駐車場から見守っていた。何かあればすぐに分かる。それまでは約束通り、フランソワーズに任せることにした。

「小父様の言うこと、わからない訳じゃないの……。でも、〝死の商人〟と関わったことで、ママは死んでしまった――」

「…………」

「私も、長い間生死を彷徨い、意識を失っていた。パパは、私を救けることを条件に、彼らにＭＭＭ１の研究成果を渡してしまった。私の、せいなの……！」

「…………」

「私の身体が治り、日本に戻って来てから、少なくとも、彼らは私たちに接触して来てはいない。彼らなりに約束を守っ

ていると信じたい。――だから、これ以上、こちらから関わりになるようなことはしたくないの……！」

その表情からも悲痛な想いは伝わっていた。

フランソワーズはその想いを受け止めるようにして聴いていた。そして、分析していた。

シンシアの言葉と、彼女の身体から僅かに洩れ聴こえる、機械の調べを――。

サイボーグとして括られるカテゴリーの中にも様々なタイプがある。

半機械人間として特化能力を付けられた者もあれば、グ

レートやイワンのように、生体サイボーグに位置付けされるタイプもあった。
フランソワーズは先日対面した際、その可能性に気付いていた。見た目では判らない生体サイボーグでもナノサイズの制御チップは内蔵されている。
初めは疑いを抱かず、集中していなかったことと、絶えず波の音が聴こえていた環境だったので確信には至らなかった。
でも、改めて耳を澄ますと、強化されたフランソワーズの聴覚は、サイボーグだけが放つ、キャラクター・フリークエンシー《固有周波》をキャッチした。

——彼女は……。自分自身がサイボーグだということを、知らないのね……。

特別な能力を与えず、措置としての生体サイボーグ手術により延命を図り、新たなる生存手段とする。そのこともサイボーグ研究が掲げる一つのテーマだった。

フランソワーズは、シンシア自身がその研究が完成したことを証明する存在だと理解した。

「あなたは——サイボーグなの？」

シンシアがフランソワーズに尋ねた。

「ええ……。目と、耳の能力を強化されているの」

「そう、サイボーグになったあなたが、その能力を使ってブ

ラック・ゴーストに立ち向かおうという思いに駆られる気持ちは、わからないでもありません」
「…………」
「でも、争いのない世界にするために、ブラック・ゴーストと戦う……。平和のためにという理由で、また戦いの準備をする……。それこそ、私には、今まで何度も繰り返されてきた過ちに思えるの――」
シンシア自身の知らない秘密を知り、彼女が口にした正論の前に、フランソワーズは返す言葉が見付からなかった。
「…………」
「ごめんなさい。あなたを責めている訳ではないの……。私

は、ブラック・ゴーストが怖いの……」

それもまた正直な理由であり、真実だった。

確かめたかったことは確認した。

この先はフランソワーズだけの考えでは決められなかった。ギルモア博士や他の仲間の意見も聞きたかった。

フランソワーズはシンシアに会釈して、プールの中のフィンピーに小さく手を振って別れを告げると、ジョーの待つ駐車場に向けて歩き出した。

3

夜、〝断崖の屋敷〟の応接室に九人のサイボーグとギルモア博士とコズミ博士が揃った。

半月周期で眠りにつく赤ん坊は相変わらず籠の中で眠っていたが、フランソワーズは自分の隣に置いてこの相談に同席させた。

「フランソワーズ、どうしたんだァ、やけに深刻な顔して？　何でも話せよ、俺たちの仲だ――」

暗い空気が苦手なジェットはフランソワーズを力付けるように言った。

「ええ」

フランソワーズはギルモアに確認しながらウィリアム・ドルフィン教授の来歴を語り、三年前のウクライナでの事件と、その娘であるシンシアについて、自分が知り得た事実を話した。
「何ということだ……」
途端に、ギルモアとコズミは背を丸め、深く項垂(うなだ)れた。他の者たちも、神妙な顔つきに変わった。
「シンシアは、自分の身体について、知らないんだね?」
人の気持ちに敏感なピュンマが、優しく確認した。
「ええ、彼女は、病院で通常の治療を受けて快復したものだ

と思ってる」
「そうか、だったら、それについては彼女に伝える必要はないだろ。人として暮らしていけばいい。それよりも心配なのはブラック・ゴーストの動きだね」
「ああ、どんな交換条件だったかは知らんが、奴らが素直に約束を守るとは思えない――」
アルベルトが眉間(みけん)に皺(しわ)を刻ませて言った。ジェットが続いた。
「大方、妻のクレメンスと娘のシンシアをサイボーグ手術で救うことを条件に、ＭＭＭ１の設計図を渡すことを要求し

たってところだろうな。奴らのやり方はそんなところだ――」
「でも、奥さんのクレメンスは助からなかった」
ピュンマが悲痛な表情で言った。
いつになく神妙な表情でグレートが口を開いた。
「博士なりに抵抗したんだろうな。見知らぬ地で、家族の命を交渉材料にされて……。想像したくもないな。そのMMM1とかいうのを組み立てたとして、実戦配備するとなれば、当然、その道のプロの調整が必要になる。奴ら、また現れるぞ」
少し、芝居掛かった言い方だったが、彼の意見は尤もだっ

た。
「設計図を渡して三年か――。そろそろ完成していてもいい頃だな――」
ジェットが言うとギルモアは頷(うなず)いた。
「三年前からのプロジェクトか……。だとすると……」
ギルモアは記憶にある思い付く限りのプロジェクトを思い出し、それに該当するものがないか考えた。先日、ウィリアムに聞いたとき、無意識にそれを探りかけてはいたが、サイボーグ計画に関係するものには、直接、音波兵器とリンクする案件はなかった。それぞれのプロジェクトは余程のことが

なければ該当する研究者チーム以外には機密とされる。だが、他のプロジェクトとの技術供与が見込まれる場合、コードネームと概要が公開されることも稀ではあるがあった。

「うーん――」

「心当たりが浮かばんか？　ギルモア君、こんなときは知識ではなく、知恵じゃよ」

項垂れ、ずっと黙っていたコズミ博士が漸くいつもの調子を戻し、飄々とした表情を見せた。

「は？」

「プロジェクトの性格を考えればいい。ＭＭＭ１のマイクロ

ウェーブをモニターするためには、どんな環境がいいかね？」
「この世界はマイクロ波で満ちています。精密なデータを検証するためには、出来るだけ他の影響を受けない環境を選ぶ必要がある。理想的には、電界や磁界による壁で遮蔽し――」
「ああッ！」
「おお、該当するプロジェクトが浮かんだようじゃな――？」
ギルモアは頷いた。
「コードネーム《プロジェクト・アウローラ》。始まった時期から考えても、アラスカの施設で進められていた〝オーロ

ラ作戦〟です――」
「行こうぜ、行ってハズレでも、ブラック・ゴーストの施設を一つ潰しとけば、それはそれでこの世界のためになるってもんだ――!」
ジェットはそう息巻いたが、ピュンマが冷静なトーンで答えた。
「行くと言っても、僕たちがブラック・ゴーストから奪ってここまで乗って来た潜水艦《101》は、今は解体してしまってバラバラだよ」
「ああ」と、低い声で、今日それを解体した当人のジェロニモが静かに頷いた。

「それは、困ったのぅ……」
コズミ博士は白く短い顎鬚(あごひげ)を掻(か)いた。
「よくよく考えれば、君たちはパスポートも無いから、旅客機も使えんのだったなぁ……。まあ、それでギルモア君が万能潜水艇の完成を急いでいた訳でもあるが……」
「ええ、まあ、それにしても、今、解かったような事情なら、ウィリアムやシンシアの元に、いつ、ブラック・ゴーストが現れて、彼らがまた危険に曝(さら)されてもおかしくはない――」
ギルモアはジョーを見た。

「何もなければそれで良いのだが……、暫くは身辺警護をしてもらえると安心なのだがな。シンシアのこともあるので、彼らにも知られないよう、そっとな――」
ジョーは仲間たちの顔を見て気持ちを確かめた。サイボーグたちは頷きを返した。
「勿論です、博士」
コズミ博士はその様子を見て、ポンと膝を打った。
「よし、ギルモア君は何とかしてアラスカの施設の状況と詳しい座標を調べてくれ。わしは君たちの移動手段を当たってみる。折角、フランソワーズの嬢ちゃんが先手を取ってくれ

たんじゃ、行ってはみたが違ってましたじゃ、奴らに出遅れてしまうからな」
「ええ、コズミ博士」
今後の行動は決まったが、ギルモアには、まだ、引っ掛かることがあった。
シンシアがサイボーグ手術を受けていたとすれば、施術を行った研究者は限定される。だが、件のことが行われた三年前は《プロトサイボーグ計画》の最中だった。少なくとも、それに参加していたブラウン博士、ガモ博士、ガイア博士とウラノス博士、ギルモア自身はシンシアのサイボーグ手術には立ち会ってはいなかった。

別の場所で別のチームが、《プロトサイボーグ計画》とは違うラインで並行して、サイボーグの開発を進めていたということになる。

——と、なると……、一体、誰が……？　いや、まさか……！

ギルモアには一人だけ脳裏に浮かんだ人物があった。だが、その人物が研究を続けているとは到底思えなかった。

——アダムス・トイフェル博士……！

変り者の多い科学者の中でも、類を見ない強烈な人物だった。その情熱は変人を超え、狂気をも感じさせた。その異常性の余り、悪名高き黒い幽霊（ブラック・ゴースト）団の《プロトサイボーグ計画》

からも弾(はじ)き出された男だった。

ボグートプログラム

バン・ボグートの独立研究機関《ボグートプログラム》。その活動は黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)の中にあっても秘密裏に進められ、多くの謎に包まれている。

かつて、ゼロゼロナンバーの《プロトサイボーグ計画》に参加していたアダムス・トイフェル博士だが、彼は００９(ゼロゼロナイン)の完成を待たずしてその開発チームから去った。

継続し、《プロトサイボーグ計画》に当たっていたアイザック・ギルモア博士らはその去就を知る由もなかったが、アダムス博士は独自の発想を首領のスカールに買われ、バン・ボグートの指揮する《ボグートプログラム》に活躍の場を移し、恐るべき研究を続けていた。

深い雪に閉ざされたカナダの山岳地帯にある極秘施設。そこでアダムス博士は同じく研究者である息子のエドワードと共に、《アドバンスド・カスタム》と名付けた次世代型生体サイボーグ計画に着手していた。

この場所では、彼らが来る前からバン・ボグートによるインテンショナル・ミュータント《意図的突然変異体》の研究

が進められていた。雪に閉ざされた施設は、理想の人類を自ら創造し、収穫するためのものだった。ボグートはその計画にアダムス博士の《アドバンスド・カスタム》を応用開発部門の要（かなめ）として招き入れた。

ここで生まれた子供たちには名前はない。配合と共に識別番号が付けられ、採用されるプロジェクトが決まれば、また別の番号が与えられた。

データ管理上、個体の差異を明確化するために系統呼称のみが許されたが、それも当人同士が姉や弟と呼び合うためだけのものであり、統計的な組み合わせのエントロピーで見れば、すべてが家族であり、一部を意図的に変えられただけの

存在でしかない。

寧ろ、そうでなければ研究は成し得ない。研究とは他の条件を揃えることによりその差異を確認する、気の遠くなるようなデータ解析の蓄積だった。

子供たちは何人かずつで〝白い部屋〟の中で暮らしていた。学習、運動、遊び、食事など、あらゆる事象をコントロールされ、成長と目的に応じた教育が施された。

時には、近い年齢の子供たちだけを集めた懇親プログラムなどもあり、外の世界を知らない彼らには、それでも十分な集団行動の研鑽の場であり、他者を認識する機会となった。

行動をモニターする様々な機器と、背後に隠れている白衣の研究員たちを除けば、モノ好きな金持ちが、金に糸目を付けずに作った〝天才〟を育てるための、少しばかり特別な寄宿舎というところだった。

コンソールの上に数知れないグラフ波形が流れていた。管理ルームのディスプレイには、そこで暮らす子供たちの様々な脳波が、覚醒(かくせい)時・睡眠時を問わずモニターされていた。

「また、ガンマ波がシンクロしている――」

研究員の一人が指摘した。

「P－0015WとH－0014Wだな――」

「あの姉同士は脳波までそっくりだ」

「姉同士ばかりじゃないぞ。弟同士も大したものだ」
「H－0017WとP－0018Wか――。確かに、こっちも姉同士ほどじゃないが、そっくりだ」
「この二組の姉弟（きょうだい）は、配合率から言っても、お隣同士だからな。特性が似るのは当然なのかも知れないが……。個体それぞれがいくら優秀でも、こう、不規則シンクロを起こすとなると、データ解析には向かないな」
「その件についいては、アダムス博士たちも考えているようだ。ガイア博士とウラノス博士が視察に来ることになったのは、そういうことらしい」

その頃、施設のエントランスに到着したガイア博士とウラノス博士をエドワードが出迎えていた。
「この様な場所まで、よく、いらして下さいました」
アダムス・トイフェル博士の息子のエドワードが笑顔で言った。まだ、二十代の半ばを過ぎたばかりだが、彼自身も代用細胞の分野に於いて優秀な研究者として知られていた。
「久しぶりだな、エドワード君」
顔全体に黒髭を蓄え、黒眼鏡を掛けた小柄なガイア博士がそう言うと、プードルのような髪型をした長身のウラノス博士が「元気そうで何よりだ」と続けた。

「私が今あるのは、父と、ブラック・ゴーストのお蔭（かげ）です」
エドワードはしみじみと言った。
数年前、エドワードは実験中に事故に遭い、命は取り留めたものの、身体の大半の自由が利かなくなってしまった。
当時、ゼロゼロナンバーの《プロトサイボーグ計画》の真（ま）っ只中（ただなか）であり、００13（ゼロゼロサーティーン）までの計画は決定していたが、それ以降のサイボーグ計画についてはまだ明らかにはされていなかった。
アダムス・トイフェル博士は息子のエドワードを救うため、十四人目のサイボーグとして改造による治療を願い出た

が、正規のプロジェクトとしては認められなかった。
《プロトサイボーグ計画》に参加していたガイア博士とウラノス博士は、そのときの模様を克明に憶えていた。こと、研究については異常な程に執着し、暴走気味に邁進するアダムス博士ではあったが、息子を救いたいという思いは、珍しく、人の親としての純粋な魂の叫びそのものだった。
アダムス博士は《プロトサイボーグ計画》を去り、別のプロジェクトに着任したと聞き、風の便りにエドワードが快復したとの噂も聞いていたが、この親子についての正確な情報はガイア博士もウラノス博士も知らされていなかった。
エドワードは、二人をアダムス博士の待つ研究室に案内し

た。
　アダムス・トイフェル博士はそこに居た。
「よく、来てくれた。ガイア博士、ウラノス博士――」
「正直に言おう。君にはいろいろと聞きたいこともあるが、組織の機密に属す面倒なことを研究の場に持ち込むつもりはない。今、必要な技術供与だけをテキパキと行おうではないか」
　小柄なガイア博士が、彼なりに過去のいざこざを不問にするつもりとの姿勢を先に示した。
「そうなのか。わしはやはり、いろいろ聞きたいがな――」
　長身のウラノス博士はすっとぼけた調子で言った。

「ふははは……、何でも聞いてくれ。諸君に隠すことなどない。こちらも、せっかく開発したプロトサイボーグたちに逃げられた気分を聞きたいからな」
アダムス博士も相変わらず、負けず劣らずで意地悪そうに笑んだ。
「ギルモア君とは決着をつける準備がある……！　今回の視察は、そのためのものでもあるのだよッ――！」
ガイア博士が不機嫌そうに答えた。
「これは失礼。では、さっそく、お約束の実験体のデータを御覧頂こうか――」
アダムス博士に促されたエドワードがディスプレイに三名

分の実験体データを表示した。

「諸君のリクエストに合致するのは、P－００17。H－００14W。H－００17Wの三名だ――」

「ほう……」

先程までむくれていたガイアだが、データを見せられると研究者魂に火が点いたのか、黒眼鏡を上げて画面に見入った。

エドワードが説明した。

「P－００17には絶対零度の氷結特性と超低温下での耐性があります。H－００14WとH－００17Wは双子の姉と弟です。姉には微弱ですが観念動力（テレキネシス）と精神感応（テレパシー）があり、弟には耐

熱特性とアドレナリン変異による攻撃特性が認められています。この姉弟は潜在能力としては補足的なものでしかありませんが、その関係性に於いて効果を発揮することが期待出来ます」

「記憶を何処まで残すかが鍵（かぎ）になるな。００13（ゼロゼロサーティーン）の場合は〝優しさ〟という感情のみを残した。対ゼロゼロナイン用の戦略としてな」

「確かに効果はあった。じゃが、結果として非情さに欠けたのが本末転倒じゃった」

「Ｐ－００17はまだ若過ぎる。小僧枠には、もう〝パン〟が

決まっておるしな」
「ああ、採用は、この姉弟の二名にしよう」
　エドワードは頷（うなず）いた。
「承知しました。彼らも喜ぶでしょう。これで漸（ようや）く名前を与えてもらえるのですから」
「姉はヘレナ。弟はアポロンじゃ。彼らには《ミュートス・サイボーグ計画》の柱になってもらう」
「ただのサイボーグではない。伝説の神々に造り替えてやるわい」
　アダムス博士やエドワードに比べれば、人柄こそ人間的に

映るガイアとウラノスだったが、口から出る非情な言葉の数々は、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の研究者として相応（ふさわ）しいものだった。

誰がための力

〝断崖(だんがい)の屋敷〟の地下に造った彼らの基地には、あらゆる情報を解析するシステムが取り付けられていた。
ギルモア博士と、その方面に明るいフランソワーズ《003》とピュンマ《008》が敵施設の特定を担当した。フランソワーズは索敵に関するスペシャリストとしての訓練プログラムを受けており、ピュンマは戦闘指揮に於いても元々プロフェッショナルであり、最新の戦略システムも、どんな軍用特殊車両でも使い熟(こな)せた。
ギルモアの記憶を基に、その場所を見付け出すところまで

は順調だった。

各国の衛星の軌道周期に合わせ、そのカメラとリンクし、アラスカの大地にある黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の研究施設を割り出した。

衛星写真用の偽装プログラムを幾つか外すと、氷の大地に白くカムフラージュされた軍事施設が現れた。

「ここまで鮮明でなくて良いのなら、今では安いモバイルが一つあれば充分だ。便利な時代になったというか、嫌な時代になってしまったというか、迷うところだな……。鉄のカーテンの時代が信じられん――」

「施設の北西に部隊のような人影が見えます」

「フランソワーズ、寄ってみてくれるかな」

「はい」
フランソワーズ《003》が軽やかにコンソールを操作すると、衛星カメラの映像が移動し、注文の場所を拡大させた。
そこには黒いダイビングスーツのような戦闘服を身に着けた二十人程の歩兵小隊が居た。
「サイボーグマンか――？」
その姿は冷戦時代の初期に実戦配備用に開発された《サイボーグマン》に似ていたが、何処か違っていた。
フランソワーズが特殊センサーを付加させて映像情報にフィルターを当てた。
サーモセンサーを代用する衛星の遠隔システムの一種だっ

た。

「生体反応がありません」

「この部隊、一見、サイボーグマンのようにも見えるが、生体反応がないとな……？」

《サイボーグマン》なら簡易的に強化肉体を活性化させるボンベマスクを装着していたが、彼らはそれを付けていなかった。

サイボーグ技術そのものの促進を目的とする《プロトサイボーグ計画》は、量産型の兵器開発指向ではなく、謂わば研究そのものに主眼を置き、付加した特殊能力の可能性を徹底して探る、課題に則したワンオフの追究だった。

それに対し、《サイボーグマン》は、開始から長年に亘（わた）った《プロトサイボーグ計画》で得られた様々な技術を低コストで実戦配備用に落とし込んだ量産型特殊戦闘員だった。

運用は一九七〇年代から始まり、当初、ベトナムやアフリカに配備されていた頃は、兵士の欠損部位の代用義体に通常以上の能力を付加して再生させることが主要目的となっていたが、冷戦も中期に差し掛かると、人の肉体を素体とする強化自体に意味を見出（みいだ）せなくなり、量産型特殊戦闘員の開発は人の肉体を介在しないアンドロイド方式に移行した。アラスカの研究施設で、今、衛星画像に映ったのは、その発展型の

ようだった。
「サイバノイドですね」
戦闘兵器の推移に詳しいピュンマ《008》が敵を絞り込んだ。
「ああ、恐らくな——。動きにぎこちなさはない。基本ロジックは人間のものをプログラム化しているな。作戦指示を出すリーダーだけが人間という部隊じゃろう」
「手強（てごわ）そうですね」
「奴らには死ぬことへの恐怖がないからな。一体一体の能力は君たちに劣るが、部隊として徒党を組まれたら厄介だぞ」

「それなら、同じ理由で僕たちが有利ともいえますよ。改造人間（サイボーグ）である僕たちには、死ぬことへの恐怖心がある――。だから、その負けられないという気持ちが、機械にはない力になるってね」

　それこそが、改造人間（サイボーグ）が改造人間（サイボーグ）たる所以（ゆえん）であり、その意味であるとギルモアも思っていた。そこに人間の〝心〟があるからこそ、機械だけでは到達出来ないスペックの壁を超えることが出来た。

　その日から衛星によるアラスカの研究施設の監視は続いたが、ＭＭＭ１がそこに存在するかどうかの確認は遅々として

進まなかった。大袈裟（おおげさ）でなく、ＭＭＭ１は核に匹敵する脅威となる音波兵器だった。それが黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）によって完成してしまえば、彼らを倒そうとするギルモアや九人のサイボーグたちの目的は遠ざかり、軍備の上でも大きく引き離されることにもなる。

ウィリアムとシンシアの身の安全も心配ではあったが、それがなかったとしても、ＭＭＭ１は潰（つぶ）しておく必要があった。

一方、ジョー《009》、ジェット《002》、アルベルト《004》、グレート《007》、張々湖（ちゃんちゃんこ）《006》の五人は、交代

でシンシアとウィリアムの警護に当たっていた。

警護対象者にもバレないよう、警護は昼夜を問わず慎重に行われた。この夜の当番はアルベルトとジェットだった。

さざ波の海面が月明かりを反射していた。隣のボートハウスの桟橋から寝ずの番だった。

「狙われてるって確証もないのに、俺たちも、よく頑張るよな」

流石に時間を持て余したジェットが愚痴を零した。

アルベルトは桟橋の縁のロープ止めに片足をのせて微笑んだ。

「俺たちだから出来るのさ。これが軍や警察なら、この程度の情報じゃ人員を出すことも出来ない——。何もなければそれでいい。あの親子が、人として幸せに暮らしていければな——」

「……まあな」

いつもなら、ニヒルなアルベルトの歯の浮くような台詞に、何か一言茶化したいところだったが、この日の月はやけに美しく、ジェットは素直に同意した。

数日後の昼——。

コズミ博士は〝断崖の屋敷〟の居間で世界地図を広げてアラスカまでの移動プランを練っていた。旅行者がするような通常のルートは使えない上、パスポートも無く、見るからに怪しげな多国籍の大人数。それを決行するタイミングもいつ来るのか分からない。今日かも知れないし明日かも知れないし、一週間後かも知れなかった。

予定が付かなければ航空機をチャーターすることも出来なかった。

それでもそんな無茶なお題にも拘わらず、コズミ博士は九人のサイボーグたちをアラスカに送り届ける方法を苦心し、

現実的な計画まであと一歩というところだった。

「センセイいるかーい！　コズミの爺(じい)さんやーい！」

玄関から大きな声がした。

「ん？　そうか、今日じゃったか――！」

コズミはすっかり忘れていた。

慌てて玄関に出ると、木製の道具箱と麻袋を担ぎ、江戸股(もも)引(ひき)に黒半纏(くろばんてん)を羽織った職人が立っていた。

「棟梁(とうりょう)、よく来てくれた！」

「おお、来たぜ――」

その職人は、以前、コズミがギルモアに話した板金職人の

十文字松五郎（ともんじまつごろう）だった。

四十を少し超えたくらいで背はそれ程高くはないが、がっちりとしていて、黒髪に鉢巻をしていた。四角い天狗鼻（てんぐばな）の顔は、やっぱり、何処かギルモアに似ていた。

コズミは内線で屋敷に居るメンバーを集め、すぐにギルモアと棟梁を引き合わせた。

シンシアとウィリアムの警護に付いているジョー《009》とグレート《007》と張々湖《006》以外の顔が居間に揃った。

「なっ、似とるじゃろう」

開口一番、コズミ博士は自慢げに言った。

「うむ――確かに……！」
顔を見合わせた十文字とギルモアは互いの鼻がぶつかりそうになるくらい、まじまじと顔を近付けた。
「――ってまあ、それだけなんじゃけどな」
と、コズミ博士は笑った。
お約束の分かる英国紳士（グレート・ブリテン）が居れば面白い突っ込みの一つも入れていたが、残念なことに今は留守で、すぐに普通の挨拶（あいさつ）が交わされた。
「流体設計の要になる潜水艇の顔をお願いした棟梁じゃよ」
「十文字松五郎だ。よろしくなッ――」

松五郎は気風（きっぷ）のいい笑みで挨拶した。そしてジェロニモ《005》を見て、「そこのでっかいの、おめえ力ありそうだな。ちょいと荷物運ぶの手伝ってくれ――」

道具箱を一つ押し付けると、「さあ、案内してくれッ――」と、初対面のジェロニモの巨漢に怯（おび）えることもなく、いきなりアシスタント扱いで先に歩き出した。ジェロニモは無言だったが、ここ数ヵ月、見たこともない笑みを浮かべていた。

眠れる天使

「セト……」
カプセルの硝子（ガラス）越しに、姉が悲しみに震える声を掛けた。棺桶（かんおけ）のような生命維持カプセルの中で、十六、七に見える西洋人の青年が眠っていた。
優しげなその表情は安らぎに満ちているようでもあったし、無表情のようにも見えた。もう、二年、毎日祈るようにして、姉は眠ったままの弟に声を掛けていた。
〝セト〟という名前は青年が眠ってから与えられた名前だった。弟は名前を欲しがっていた。姉はその願いが叶（かな）ったこと

を伝えるために、必ず、名前で語り掛けていた。
「セト……、あなただけが、天使のような表情で、ずっと眠っている……」
セトは外界との繋（つな）がりを断っていた。
疾病が原因の物理的なダメージによるものではなく、心因的で、彼自身の深層心理から来る自己封印にも似た自分自身に対する残留思念が原因だった。
「セトは自分の意思で目覚めることを拒絶しているのだ」
二年前、アダムス・トイフェル博士はそう断言した。
「だが、セトのポテンシャルは諦（あきら）めるには惜しい。必ず利用

価値はある。だから私は見捨てたりしない――。そう、セトの存在こそが、私のサイボーグ研究の未来を照らす、究極のサイボーグを生み出す鍵になるという直感があるのだ――」

アダムス博士はその野望を隠そうとすらしなかった。

《ミュートス・サイボーグ計画》がガイア博士とウラノス博士によって始動したのと時を同じくして、アダムス博士と息子のエドワードによる《ハイティーンナンバー計画》も次なる局面に移った。

カナダの山岳地帯にあるバン・ボグートの極秘施設で行われていたインテンショナル・ミュータント《意図的突然変異体》の応用開発部門に招かれた二人は、その検体を自身らが

研究を続けて来た次世代型生体サイボーグ計画《アドバンスド・カスタム》に利用して、新型サイボーグの開発に着手した。

〝白い部屋〟の子供たちは、改造プランに適合する能力ごとに何度もテストされ、改造するに相応(ふさわ)しい素材であるかどうかをチェックされた。

子供たちの喜びは検体に選ばれ、名前を貰(もら)うことだった。普通ならそんなことには何の価値もない。だが、番号で呼ばれ続けて来た子供たちは、名前を貰うことこそが、何より勝る名誉だと教えられていた。

二年前のあの日、P－0015WとP－0018WとP－0017の三名が最終テストに臨むこととなった。
　テスト内容は単純だった。山岳地帯の施設の更に奥にある極秘の訓練地で量産型アンドロイド兵士の《サイバノイド》一個小隊二十体と闘い、生き残ること。それだけだった。
　しかし、インテンショナル・ミュータント《意図的突然変異体》といえども、三人は改造前であり、生身の肉体で、しかも、子供だった。P－0015WとP－0018Wの双子の姉弟(きょうだい)は生体年齢にして十六歳であり、P－0017に至っては十四歳の少年だった。
「エスパーとしてのポテンシャルは確認されている。その能

力が発動すれば何の問題もない――」
父アダムスにも劣らぬ冷酷さでエドワードが子供たちに説明した。
「生き残れば、お前たちには名前が与えられ、《ハイティーンナンバー》として改造が施される。栄誉なことだ。期待しているぞ――」
ところどころ雪の残ったぬかるんだ山中に訓練地はあった。敷地には粗末な村を模した丸太小屋が幾つか建てられていた。
この中に、武器を持った《サイバノイド》が二十体隠れている。最終テストを前にして三人の子供たちに与えられたの

は、訓練用の白い防護服とスーパーガンだけだった。

三人のエスパーとしての能力は様々だった。

双子の姉のＰ－００15Ｗは観念動力（テレキネシス）と精神感応（テレパシー）が戦闘使用レベルの五段階でレベル３。予知能力（プレコグニション）がレベル４だった。

弟のＰ－００18Ｗは精神感応（テレパシー）が認められたものの、観念動力（テレキネシス）の一部特化としての衝撃波（ショックウエーブ）がレベル２と、僅（わず）かに認められているだけだった。

だが、アダムス博士もエドワードもこの能力に着目していた。エスパー能力とは、心に掛かるストレスがポテンシャルを引き出すものだった。Ｐ－００18Ｗはまだ命の危険を感じ

る戦闘を経験していなかった。それに彼の衝撃波(ショックウェーブ)は物理的に計測出来ない不可思議なものだった。例えば、正規の《プロトサイボーグ計画》で進められている００10(ゼロゼロテン)の衝撃波(ショックウェーブ)は一部の筋細胞を発電板とするものとして機械的に代用可能な構造を理解出来るが、Ｐ－００18Ｗの衝撃波(ショックウェーブ)は発電ではなく、光そのものの破壊力だった。今のところ威力は弱いものの、それは精神の力で放射線の無い核爆発を起こしているのと変わらない稀有(けう)な能力だった。合わせて、個体としての彼の脳運動の特徴として《ミュートス・サイボーグ計画》に採用されたＨ－００17Ｗ《アポロン》と同じ、アドレナリン変異によ

る攻撃特性が認められていることも、注目し、期待する理由の一つだった。彼が〝恐怖〟と〝怒り〟に支配された時にこそ、その真価が垣間（かいま）見られると予測された。

まだ少年であるもう一人の試験体、P－0017にはレベル4の氷結能力（フリージング）が確認されていた。彼は物心がついた時から自由に氷塊を発生させ、それを玩具（おもちゃ）代わりに遊んでいた。攻撃の技として転化すれば、様々な形で冷気を操れると期待されていた。

「フィフティーン姉ちゃん、エイティーン兄ちゃん。心配いらないよ。おいらが守ってやるから。みんな凍らせてやる」

「セブンティーン、無茶をしちゃダメだよ」

エイティーンが心配して言った。セブンティーンは幼いだけに自分の能力を過信する向きがあった。

「わかってるよ」

「慎重にいきましょう。《サイバノイド》は人造人間。疲れも知らないし、破壊されることも恐れないわ」

模擬戦場の村の外に設置された監視塔からアダムス博士とエドワードが見守っていた。

「最終テストを開始する――」

エドワードがそう言うと開始を告げるサイレンが山深い訓練地に響き渡った。

――能力のすべてを見せるがいい……。

アダムス博士はまだ計測されていない試験体たちのポテンシャルが解放されることを期待した。
「始まった！」
少年《Ｐ－００17》が待ってましたとばかりに、他の二人にウインクし、親指を立てた。
「へへっ」
「私がシールドを張るから、離れないで――」
「うん」
「行こう！」
弟《Ｐ－００18Ｗ》は少年《Ｐ－００17》を掩護（えんご）するよう

に注意深くスーパーガンを構えた。
三人のエスパーは横一列に並んだまま一斉に駆け出した。
民家の窓で黒い兵士の影が蠢(うごめ)いた。
「あそこ、狙って来るよ！」
少年《P－0017》が真っ先に指摘した。
窓枠から乗り出し、アサルトライフルを構えた複数の《サイバノイド》がすぐに発砲を始めた。
「えいッ――――！」
姉《P－0015W》が念を込めた。その瞬間、彼女の《テレキネシス》で銃身はグイッと逸(そ)れ、弾をあらぬ方向に発射

しながら、銃は宙にもぎ取られ、その腕から離れた。

「それッ！」

そこに弟《Ｐ－００18Ｗ》と少年《Ｐ－００17》がスーパーガンを撃ち込んだ。

一瞬にして四体が行動不能になった。

「楽勝、楽勝！　あと、たった十六体だよ」

「油断しちゃダメだ」

「わかってるよ、エイティーン兄ちゃん」

三人は次々と現れる《サイバノイド》たちを姉《Ｐ－００15Ｗ》の精神感応（テレパシー）で狙うべき相手を振り分けて確実にスーパーガンで仕留めていった。

すぐに三体が行動不能となり、残るは十三体となった。
村を模した丸太小屋は方々に死角を作っていた。姉《P－0015W》は予知能力（プレコグニション）で二十秒先の未来を見た。小屋の陰から出て来る《サイバノイド》が三体見えた。
〝右の影から三体出て来るわ――！〟
二人に対し、精神感応（テレパシー）で注意を促した。
「おいらに任せな――！」
少年《P－0017》はスーパーガンを素早く腰のホルスターに戻すと、掌（てのひら）を向かい合わせにして両腕を挙げた。
「いっぺんに、やっつけてやるッ――」

両の掌の間の隙間に巨大な雪の結晶が出現した。
「ドーン！」
気合いと共に大きく腕を振ると、それは回転する丸いノコギリとなって飛んで行き、丁度、物陰から出て来た三体の《サイバノイド》の腹を同時に切断した。
残る《サイバノイド》は十体となった。
監視塔の中でアダムス博士が微笑んだ。
「エドワード。《サイバノイド》のリミッターを解除し、レベル４のサイキック遮断シールドを発動させろ」
「はい――」
不気味な笑みで受けたエドワードがコンソールを操作する

と、稼働中の十体の《サイバノイド》をモニターする計器がシールド状態になったことを表示した。

「さて、いよいよ、その潜在能力を見せてもらう時が来た――」

精神感応（テレパシー）を持つエスパーにも、目の前にいない敵の感情は読めない。まして、今、直接、闘っている相手は〝心〟のない《サイバノイド》だった。

それでもその瞬間、姉《P－0015W》と弟《P－0018W》は言い知れない違和感を覚えた。戦場に屈折するアダムス博士とエドワードの〝悪意〟を、僅（わず）かにだが拾ってい

た。
〝姉さん――。なにか、おかしいよ……〟
〝ええ、気を付けて――〟
〝えっ？　どうしたんだよ……！〟
左の物陰からアサルトライフルを構えた《サイバノイド》が二体現れた。
「来たわ――！」
同じ手順で姉《P－0015W》が《テレキネシス》を発動しバインドを仕掛けたが、《サイバノイド》は一瞬、ぎこちなく動きを震わせただけで呪縛（じゅばく）を弾（はじ）いた。

〝効かないッ――?!　躱してッ――!〟
「えっ――!」
ライフルの銃弾が降り注ぎ、抉られた土砂が飛び散った。
すんでのところで三人は飛び退いたが、分断され、それぞれがバラバラに物陰へと退避した。
「くっそう……」
〝超能力遮蔽装置を使ってるんだわ……!　私たちがこれまでデータで検出されている以上の能力を発揮しなければ、勝てないようにプログラムされているんだわ……〟
〝チッ、そんなの、アリかよッ……!〟

〝姉さん、僕があの力を見せなきゃ、皆死んじゃうってことだね……〟

弟《P－0018W》が冷静に応(こた)えた。

〝エイティーン……〟

〝でも、エイティーン兄ちゃんはまだ、あの力を、制御出来ないんだろ……？〟

〝ああ、でも、やらなきゃ。僕たちはただの失敗作として処分されてしまう……。名前も貰(もら)えないし、外の世界にも、行かせてもらえない……〟

〝待てって、無理すんなって！　あんくらいの奴ら、おいら

が、やっつけてやるって！〟
　少年《P－0017》は身を乗り出すと、巨大な雪の結晶を作り出し、「ドーン！」と《サイバノイド》に向けて投げつけた。だが、その瞬間、《サイバノイド》は腕部の防御小手にエネルギーを宿らせ、氷塊で出来た丸ノコを軽々と弾いた。
「ええッ、ダメなの――?!」
　監視塔から見ていたエドワードはモニターのデータと見比べ分析した。
「生体サイボーグとして強化された後ならともかく、今のセブンティーンの能力では《サイバノイド》にとっては水芸に

も劣る見世物に過ぎない――」

十体の《サイバノイド》がアサルトライフルを構え、横一列に並んでいた。

そのすべての銃口が、少年《Ｐ－００17》に向けて狙いをつけた。

〝ダメッ――！〟

突然、訪れた、仲間の命に係わる切迫感に、姉《Ｐ－００15Ｗ》の予知能力（プレコグニション）が勝手に発動した。そのパワーの拡散は制御を失くしており、これから撃たれる少年《Ｐ－００17》だけでなく、弟《Ｐ－００18Ｗ》にまでビジョンを共有して広がった。

無数の銃弾を受けて蜂の巣となった二十秒後の少年《P－0017》が見えた。
──そうはさせないわ……！
限界突破した姉《P－0015W》のバインドがきりきりと十体の《サイバノイド》の動きを封じ込めた。と、同時に、弟《P－0018W》も無意識のうちに能力を発動させていた。
彼を中心に閃光（せんこう）が広がったかと思うと、大地を揺るがす波動が急激に放出され、三人の子供たちと十体の《サイバノイド》を輝きが包み込んだ。

――エイティーン兄ちゃん……！
――エイティーン！
弟《P－0018W》は無意識の中でエネルギーの奔流を感じていた。
〝怖い……。こんな力、僕は…、僕は、いらない……〟
「うおおおおおおーッ……！」
十体の《サイバノイド》は光の中で跡形も無く分解して消えた。それは恰も、人ならざる者のみに許される神の力だった。光が収まったとき、三人の子供たち以外の物質は、揺り鉢状に消失し、大地はクレーターのように抉れていた。

弟《P－0018W》は意識を失くしたまま、ゆっくりと仰向けに倒れた。

「エイティーン！」

「兄ちゃん！」

姉《P－0015W》と少年《P－0017》の叫びが虚しくこだました。

弟はそれ以来、二年の間、天使のように美しく無垢な表情で眠り続けた。

アドバンスド・カスタム

海浜副都心の超高層ビル群は東京の海の玄関を見下ろすように、静かだが、圧倒的な存在感で佇んでいた。
その三友工学本社ビルの上階にある国際工業部門本部の社長室に、バン・ボグートと加治原励治の姿があった。
「そうだ、ドルフィン教授の件だが、本日、同時刻に決行することにした。プロトナンバーたちがうろちょろしているようだが、彼らが有能なら、どちらがより脅威なのか、理解出来るだろう」
「……はい」

小刻みに震え、口を噤（つぐ）んでいる加治原をからかうように尋ねた。

「君は、悪魔とは何だと思う――？」

バン・ボグートは眼下の景色を見ながら、背後で小さくなって顔色を窺（うかが）っている加治原に尋ねた。

加治原の知る限り、その答えに一番近い存在がバン・ボグートだった。

「善なる神と対立する存在。或（ある）いは、人の恐怖が生み出した存在。そもそも、神が善であるという大前提的な思想すら、言葉の定義で揺らぐ曖昧（あいまい）なものでしかない――」

バン・ボグートは加治原が狼狽える（うろたえる）のを背中で愉しんでいた。

「結論から言おう。悪魔が何であろうと関係はない。それが使える力であるのなら、それを行使した者が新しい悪魔となり、悪魔と呼ばれる存在になるだけだ――。我々にとっては、核ミサイルやサイボーグと何も変わりはしないのだよ」

「…………」

「今日は記念すべき日だ。人類が誕生し、進化し、あらゆる時代の文明の陰で、その闇の存在として怯え（おびえ）て来た悪魔たちと、初めて対等に契約が為さ（なさ）れるのだからな――」

バン・ボグートは腹の底から込み上げて来る狂気の笑みを、深い皺（しわ）の入った目尻（めじり）と頬で堪（こら）えてから、一気に吐き出した。

「フッ、フハハハハハハハハハッ……！」

加治原は確信した。奇跡や迷信への畏怖（いふ）や恐怖が辛うじて人の踏み止（とど）まる良識を守っていた時代が終わりを告げたと——。悪魔は狂気を秘めた人間をかどわかす。そしてその契約者たちにはいつでもそれが対等な契約であることを仄（ほの）めかした。過去の歴史上、過度の権力を手にし、悪魔の烙印（らくいん）を捺（お）された者たち。それらの者たちも、ある視点から見れば英雄

だったのかも知れない。だが恐らくそれは、有史以前から何度となく繰り返されて来た悪魔の悪戯（いたずら）に違いない——。

それでもこれまでは、一振りの剣や一発の銃弾が奪う命は高が知れていた。だが、今は違った。黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）が所有する力は、様々な方法で地球を何度も滅ぼすことが出来た。

「君の表情は見ているのが愉しいよ」

「ハッ——?!」

いつの間にかバン・ボグートは窓から向き直り、加治原の困惑と畏怖に歪（ゆが）む顔を見て笑んでいた。

「いい表情だ。それこそが人の恐怖だ——」

バン・ボグートはそう言うと、再び高らかに、狂気じみた

笑いを撒き散らした。

横浜の丘の上にある古い外国人墓地だった。
片眼鏡を着けた背の高い瘦せた西洋人は知的な学者のようにも見えたが、伸ばし放題の髪はただの狂人にも見えた。もう一人の青年はその息子のようだった。同じように知的な雰囲気を醸し出していたが、何処か他人を見下すような冷たい笑みを浮かべていた。
アダムス・トイフェル博士とエドワードは約束の場所で肉体無きデーモンが訪れるのを待っていた。

デーモンにとっても、魂が囚(とら)われているヒマラヤの永久氷結から一気に空間転位を行うには磁界の淀(よど)みや湿気などにも左右され、様々な条件が課せられた。それは、ただ妖(あや)しい霊的な理由ではなく、視点を変えれば極めて科学的な条件ともいえた。近隣でその条件に適合する空間がこの場所だった。

そして何よりも、ここはプロトサイボーグたちがウィリアムとシンシアを密(ひそ)かに護(まも)り、網を張っている場所からも遠くなかった。

バン・ボグートはそれを見通していた。デーモンの空間転位によって発生する空間の歪みを彼らが感知すれば、それ自

体が囮（おとり）の呼び笛となることを狙ってのことだった。アダムス・トイフェル博士がデーモンの存在に着目し、息子のエドワードと日本に潜伏していた。

それ以前の彼らはカナダの山岳部の深き場所にあるバン・ボグートの特別施設に研究の場を与えられ、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の中でも独立研究部門として、あるプロジェクトを進めていた。
『ボグートプログラム《アドバンスド・カスタム計画》』。
そう命名されたプロジェクトは、ゼロゼロナンバーの《プロトサイボーグ計画》から派生したものではあるが、その余りの異端さ故に、正規の黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）のプロジェクトからも独立

して進められていた。
　カテゴリー的には次世代型生体サイボーグの開発に属していたが、アダムス博士が素材とする対象は、通常の人間の肉体とは異なる未知の存在だった。
　彼の仮説はこうだった。太古から歴史の中で人を超える存在として、吸血鬼や狼男、獣人、超人、神、悪魔などと呼ばれる者たちが様々な文献や伝承に登場する。その存在を不可侵のものと捉（とら）えず、何らかの影響により肉体を持って実際に存在した突然変異体《ミュータント》だと考えれば、生体サイボーグ研究の新たなる切り口となると——。事実、《プロトサイボーグ計画》の中でもガモ博士が００１（ゼロゼロワン）に施したエス

パーサイボーグの能力は機械的なカテゴリーを超える大きな成果を挙げていた。だとすれば、歴史の中で〝人ならざる者〟として存在した彼らの肉体を素材とすれば、更なる生体サイボーグの開発が可能なはずである。それが《アドバンスド・カスタム計画》の本質だった。アダムス博士はその狂気の発想を実現させるべく、伝承に残る、人ならざる者を探し求める一方で、自らその素材から生み出す研究も行った。

意図的な(インテンショナル)突然変異体(ミュータント)の発現。

その研究実験施設がカナダの山中にある、あの〝白い部屋〟だった。

それまで黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）は、サイボーグ研究の素材となる人間を拉致（らち）によって賄（まかな）っていたが、アダムス博士のプランはバン・ボグートに新たなる可能性を提示した。与えようとする特殊能力に応じ、目的により適した肉体を素材から生み出す。

モラルなど元来なく、禁域の科学に踏み入ることに何の抵抗もない彼らには迷いなど無かった。その成果が〝白い部屋〟からガイア博士とウラノス博士が選び出したあの姉と弟であり、アダムス博士とエドワードがハイティーンナンバーに選んだ、あの三人の子供たちだった。

悪夢

飛鳥了は魘（うな）されていた。

無理をしたつもりもないのに、ここ数日、言い知れない疲労を感じていた。ほんの少し仮眠を取るだけのつもりでソファに転がった了は〝意識〟を失い、倒れ込んで冷や汗を浮かべた。

〝意識〟は誰かの身体の目からその世界を覗（のぞ）いていた。だが、それが誰の身体なのか、それどころか〝意識〟の主であ

るはずの自分自身が何者なのかもはっきりしなかった。

色の薄い、墨絵のような夢だった。

それは——今は既に焼け落ちたはずの、父の巌と暮らした〝森の洋館〟だった。

部屋のマントルピースの上には父が遺跡調査で発見して持ち帰った、あの悍(おぞ)ましい悪魔の首の石彫が置かれてあった。表に車が到着する気配がした。二階の窓から揺れるカーテン越しに見ると、西洋人の男が二人、車から降りて来た。

知らない顔だったが、何故か了にはそれがアダムス・トイフェルとその息子のエドワードであるとすぐに分かった。次の瞬間、三人は居間のテーブルを囲んでいた。〝意識〟が語

を撫でられた猫のように恍惚の笑みを浮かべていた。〝意識〟は了ではなく、それを語っているはずの了にはその内容は聞こえず、その目を通して光景が見えるだけだった。

——何を……、何を話しているんだ……？

その〝意識〟を宿す身体から見ているのに、語っている内容もその〝意識〟が考えていることすら了には分からなかった。

〝意識〟と了は違う存在だった。〝意識〟が選び、選択した情報だけを了に見せているかのようだった。

「それで、契約がなされるのだな――？」
アダムス・トイフェルが笑みながら尋ねた。
「ああ、知ってしまえば簡単なものだ。太古から繰り返されて来た、単純な儀式だ」
了をその場に立ち会わせている身体の〝意識〟がそう答えた。聞き覚えのある声だった。
その声で、自分が共有している身体の主が、父・飛鳥巌のものだと理解した。
――父さんが、悪魔との契約法を……！　何ということを……！
「心より感謝する。プロフェッサー・ミスター・デーモン。

飛鳥教授、やはり貴方(あなた)こそ、この世界で最も悪魔を知る者だ」
「ああ、知っているとも——フフフフ」
と、飛鳥巌は悪魔のように笑んだ。
話が終わり、二人を玄関から送り出し、車が走り去るまで見送った。
見上げると、葉を落とした庭の大樹の枝が、葉脈の扇のように灰色の空に向けて広がっていた。それはまるで、罅割(ひび)れて無くなる世界の終末を暗示しているかのようだった。
——これは夢なのか……？　それとも、父さんが体験した

ことを、何かの力が働いて、見せられているのか……?!
デーモンの仕業なのか……!
ソファで魘(うな)されている了は、色の薄い、墨絵のような世界で、父の身体の中で自問していた。
玄関のドアを閉めて中に戻ると、壁に備え付けていた姿見が見えた。
——何だとッ……?!
父の姿が映るはずの姿見に映ったのは、悪魔のように笑む、了自身の顔だった——。
その瞬間、了の思考は更に深い闇の中へと落ちて行った。

自分の知らない〝意識〟が自分の心と五感を支配していた。
微（かす）かにそれを確認した感覚だけは残ったが、次に目覚めたとき、それを憶（おぼ）えている自信は了にはなかった。

悪魔と悪魔

海底洞窟のドックでばらばらになった大型潜水艦の残骸を見た十文字松五郎は瞳を輝かせた。
「でっけえの、お前さんがぶっ壊したのか？」
「ああ」
松五郎はジェロニモ《005》を〝でっけえの〟と呼ぶことに決めたようだ。
「いいね、いいねー。こいつぁ、叩き甲斐があるってもんだぜ――」
ギルモアが設計図を広げると、松五郎のテンションは更に

上がった。
「おおおお……！　愛嬌（あいきょう）があって、いい面構えだな、こりゃ。これを叩いて作れってんだな――？」
「どうかな、出来そうかね？」
「あたぼうよ。俺を、誰だと思ってんでぃ」
設計図に見入る松五郎の横でギルモアは説明を始めた。
「つまり、こう、ここにレーダーを配置したいのだが、船首の流体設計とレドーム・ベイの可動域を考慮してだな」
「ふむふむ、この無駄のねえフォルム。燃えてくるねえ。あんたが設計したのかい？」

「あ、ああ」
「わかるぜッ、俺はわかるぜッ！　こいつはスゲーやッ！」
松五郎はギルモアの手をぎしりと握り、大きくバタバタと上下に揺さぶった。
「ははは、そうかな……」
ギルモアは照れながら松五郎に合わせて腕を振った。鼻の似た二人はすっかり打ち解けた。
「それにしても、ホントにいい顔してるぜ、こいつ」
松五郎がしみじみと言った。
「それぞれの機能を考えてバランスを取って設計したら、この、イルカの顔になったのだよ」

「やっぱよぅ、この世界の大自然の中で生き生きしてるもんってのは、うまく出来てんだよなぁ～」
「ああ、まったくだ。自然には見習うべきものが多い」
「おっし、始めるぜぇぃ！　でっけえの、一枚目を下ろしてくれ！」
松五郎がそう言うと、ジェロニモはその百万馬力の怪力で易々と鉄板を運び、作業がし易いように設置した。
棟梁の金槌(かなづち)はトンテンと心地好いリズムを刻み始めた。
「おお、これぞ名工の音だな……」
ギルモアは松五郎の技に心底感動した。

〝断崖(だんがい)の屋敷〟の全方位レーダーが空間の歪(ゆが)みをキャッチした。
「この反応は――?!」
海底洞窟の基地に詰めていたフランソワーズ《003》はすぐさま解析を始めた。
以前、新宿の裏通りにある病院でキャッチし、ジョー《009》が確認に行った反応と似ていると思った。座標を確認すると横浜の外国人墓地の辺りだった。街の監視カメラに割り込んでライブ映像を探したが、撮影方向に角度が合う常設

カメラは見当たらなかった。
「ジョー、グレート、張々湖（ちゃんちゃんこ）」
フランソワーズ《003》は同じ横浜で護衛任務に就いている三人に脳波通信で呼び掛けた。
〝フランソワーズ――〟
〝なんだね、マドモアゼル――〟
〝どうしたアルか――〟
それぞれの場所から三人が答えた。
〝外国人墓地の方角から、空間の歪みが検出されてるの。前に新宿でキャッチしたものと似ているわ――〟

シーパークから自宅に戻るシンシアの跡を尾行し、密(ひそ)かにガードしていたジョー《009》は港の丘の上の墓地がある方角をそれとなく見上げた。

〝僕の居る位置から近いよ。シンシアさんも、もうすぐ自宅に到着する――〟

ウィリアム・ドルフィン教授の自宅近くの空き地にハマーH2を停めていた張々湖(ちゃんちゃんこ)《006》がそれに続いた。

「教授の方も動きはないアルよ」

グレート・ブリテン《007》も海を挟んだ向かいにあるボートハウスのカフェからダージリンを呑(の)みながら答えた。

〝陽動ってことは考え過ぎかな――。まあ、ここはわたくしめが残りましょう――〟

グレートが襟を正して紳士の身支度を整えて、「お会計を――」と、言ったときには、既に張々湖のハマーH2は走り去っていた。

ジョーもシンシアの背中を見送ると、目立ち過ぎない速度で外国人墓地に向かって駆け始めた。シンシアはいつもと変わらない様子で海側の桟橋を通り、自宅のエントランスへと入って行った。

その空間の近くだけ、巨大な墓石が微振動を起こし、激し

く震えていた。
　アダムス・トイフェルとエドワードは、狂気の浮かぶ笑顔でデーモンの出現を待っていた。二人の前にある墓石の二メートル程上空に空間の歪みがゆっくりと広がっていた。
「エドワードよ。これは我々の研究が真の到達点を迎えるための儀式だ――。我々の計算は完璧（かんぺき）だ。これまで、幾多の者たちが悪魔との契約に敗北を喫してきたが、我々の目的は最強の証明にのみある。この欲望は、如何（いか）なる代償にも勝るものなのだ。その覚悟がある限り、最早（もはや）、我々に一分の憂いもない――」
「これで、ハイティーンナンバー・サイボーグ計画《アドバ

ンスド・カスタム》の最高位の形、本物のデーモンと融合した悪魔改造人間《サイバネティック・デーモン》が実現するのですね――」

「ああ、遂にすべての駒が揃うという訳だ――」

空間の歪みは聖なる光球のように眩（まばゆ）い光を放射しながら更に広がった。二人には、それが地獄からの出口とは思えなかった。

「さあ、来るがよい、デーモンよ。我と契約を結び、我と共に行かん――！」

アダムス・トイフェルは両手を高く掲げ、笑みに固まった

顔で地獄の光を受け止めた。
その瞬間、どの世界とも独立した時空が彼らを包み込んだ。
「おおッ――?!」
アダムス・トイフェルとエドワードは、未知の何かに包まれた感覚を受けたと同時に思考が遠ざかり、白濁した空間に飛んでいた。

〝歪みが……。破裂したわ――!〟
重力反応も変わっていた。ディスプレイに映る立体座標は外国人墓地の上空だった。

全方位レーダーのセンサーはその灰色の雲の中から怪しく滲み出す未知のエネルギーを検出していた。
ジョー《009》からの脳波通信が届いた。
〝フランソワーズ、墓地に着いたけど、誰も居ない……！〟
〝上空に、雲の中に反応が跳躍した……?!〟
〝何だって——？〟
〝行っても無駄アルか——〟
〝どういうことだいそりゃ——？〟
混乱した脳波通信が飛び交った。
グレート・ブリテン《007》がボートハウスを出て海岸道路の歩道からウィリアム・ドルフィン教授の屋敷に近付いたと

きだった。屋敷の桟橋からモーターボートのエンジン音が聞こえて来た。

「やばいぞ――――！」

グレート《007》は懸命に桟橋を駆けた。

悪い予感は当たっていた。黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の手の者と思われる黒ずくめの男たちに二人が船に乗せられているのが見えた。

拘束されたウィリアムとシンシアを乗せたクルーザー級のモーターボートは物凄（ものすご）い勢いで海に飛び出した。

「二人が攫（さら）われた！　くっそう……！　やっぱり、陽動だった……！」

〝ゼロゼロセブン、ゼロゼロナインもゼロゼロシックスも、すぐには応援に向かえないわ――〟

〝ああ、こっちは吾輩（わがはい）が追跡する――〟

グレート《007》は走りながら衣服を脱ぎ捨てて戦闘用防護服になると、そのまま桟橋の突端から海に飛び込んだ。

「ここで見失ったら一生の不覚だッ――！」

モーターボートとは既に百メートル以上の距離が開いていた。グレート《007》は海中に潜ると細胞を組み替えてイルカの姿にメタモルフォーゼした。ゼロゼロセブンの特殊能力だ。

——ちぃ、何処まで行くつもりだッ……！

グレート《007》の変身したイルカはぐんぐん海中を泳ぎ、ウィリアムとシンシアを乗せたモーターボートを追跡した。

フランソワーズ《003》の傍にはアラスカの施設を衛星監視していたピュンマ《008》とギルモア博士が居た。覚醒（かくせい）周期の赤ん坊（イワン）《001》も自分の入った籠（かご）ごと観念動力（テレキネシス）で宙に浮いてグレート《007》との遣（や）り取りを聞いていた。

〝何とか追い付けそうだ……！〟

グレート《007》の脳波通信を受けて、ピュンマ《008》が危惧（きぐ）を口にした。

「海から現れたということは、近くに迎えの潜水艦が隠れて

いるかも知れませんね」
「うむ。13（サーティーン）・ロボを運んで来たSEA-REINE（シー・レイヌ）《海底輸送艦》クラスが待機しているとなると、そのまま海外に連れ去られる恐れもある……！　行き先が判らん以上、一先（ひとま）ずはゼロゼロセブンの追跡に賭（か）けてみるしかない……！」
ギルモア博士も焦りの色を浮かべた。
「あっ、外国人墓地の上空の反応が……消えました――」
モニターをチェックしていたフランソワーズ《003》が声を上げた。
ピュンマ《008》が消えたエネルギーの波形をリプレイさせ

た。
「それにしても、何の反応だったんだろう……。ゼロゼロナインたちを誘き出して、ドルフィン教授たちのガードを薄くするためだけに発生したとは思えない……!」
「ジョーたちも呼び戻して、フルメンバーで次の行動に備えた方が良さそうですね」
フランソワーズ《003》の提案にギルモアが頷いた。
グレート《007》の化けたイルカは猛スピードでモーターボートを追い掛けていた。
〝なっ、たくっ、どんどん行きやがって、もぅ……!〟

まだ、海沿いに人家の多い、海岸通りに面した湾の中だった。周囲にはレストランや養殖場もあり、堤防には大勢の釣り人たちがひしめいていた。

グレート《007》はときどき海面から鼻先を上げて目視で確認した。

モーターボートの甲板で黒ずくめの男が何かを担いで立ち上がるのが見えた。

〝ん……?!〟

バズーカのような小型のランチャーだった。

〝ゲッ、嘘だろッ――?! いや、バレてたのー? おいおい、こんなとこで、そいつをぶっぱなすのか……?! 止め

ろッ、止めろッ、それは、止めろッてーーッ！〟
〝ゼロゼロセブン、大丈夫かーー？〟
脳波通信で聞いていたピュンマ《008》たちも息を呑んだ。
〝やばい、やばい、やばい……！　ロックされたーー！〟
ズシャーッ！　と、小型クラスター魚雷がモーターボートの甲板から発射された。
〝こんな武器を持っていやがるとはッ、これだから、ブラック・ゴーストなんて、大ッ嫌いなんだよーッーー！〟
海面に潜った魚雷は海中で分離し、無数のマイクロ魚雷が目前に迫った。

――さて、どうするッ！

グレート《007》はその一瞬で腹を決めると、イルカの姿のまま、高密度の鉄の彫像に細胞の分子構造を組み替えた。急激に比重が増え、沈みそうになったが、重い鉄の身体のまま泳ぎ、何とか魚雷群を誘導した。

――よーし、こっちだ、こっち……！

本来なら、海と同じ液体となってやり過ごすのがセオリーだったが、グレート《007》がここで躱（かわ）すと、釣り人たちの居る堤防にクラスター魚雷が命中するコースだった。

〝無茶させやがって……！　南無（なむ）さん――！〟

沈みかけた鉄のイルカの頭にクラスター魚雷が次々とぶつかって爆発した。
〝わッ、たッ、たたたたッ……！　ぬわんの、此(こ)れしきッ──。吾輩の石頭、見せてくれよう──！〟
まるで、仕掛け花火と一緒に海に沈められたようだった。一つ一つは小さな爆発だが、太鼓のバチで頭を連打されている気分だった。
深い位置での爆発だったので、直上の海面が僅(わず)かに波打ち、所々に気泡が上がった程度で済んだ。
〝大丈夫、ゼロゼロセブン──？〟

フランソワーズ《003》が脳波通信で呼び掛けた。
〝ああ、何とかなァ……。悪い、少し細胞が安定するまで、追跡は、無理かも――〟
海底に腹を付け固まったままの鉄のイルカが、ぐにゃりとなった。一瞬なら問題ないが、幾ら自在に姿を変えることが出来るといっても持続的にダメージを受け続けると細胞の変化を統合する機能が麻痺(まひ)し、感覚的なデフォルト状態に戻るまで多少の時間が掛かった。
ドルフィン教授とシンシアを拉致(らち)した黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)のモーターボートはその間に外海へと出て行った。

索敵能力が強化されていないグレート《007》にはこれ以上の追跡は困難だった。

――くそっ、見失ったかッ……！

するとその耳に、何か心地好い音が届いた。

キュピ、キュピ、キュピ……。

――ん……？

キュピ、キュピ、キュピ……。

――イルカの鳴き声か……？

鳴き声の主は近くには居なかった。何処か遠くで鳴いている声が届いているようだった。

キュピ、キュピ、キュピ……。

先程までは、確かに鳴いていなかったイルカが、突然、鳴き出したことが気になった。
〝フランソワーズ、吾輩の聴いている音を、そっちで拾えるかい――？〟
〝ええ、グレートの聴覚情報を脳波通信に変換して受け取るわ――〟
〝やってくれ――〟
海底洞窟(どうくつ)に居た面々も再生したその鳴き声を確認した。
キュピ、キュピ、キュピ……。
それを聴いたフランソワーズ《003》が即座に断定した。

「これは、シンシアさんと仲のいい、イルカのフィンピーの鳴き声よ――」
「なんと……」
「もしかすると、フィンピーも拉致されたシンシアさんを追っているのかも……」
ピュンマ《008》はそう言いながら、全方位レーダーを調整し、探知周波をその鳴き声に合わせた。
MAPの海図に新しいマーカーが表示された。
ギルモアはそこから放たれるイルカの生体反応を確認した。
「間違いないようだな――」。フィンピーはシンシアさんの気

配を感じて、奴らのボートを追跡しているんだ……！」
そのとき、ピュンマ《008》がアラスカを監視していた衛星カメラにそれを発見した。
「博士、MMM1です。確認しました！」
拡大した衛星動画は白い大地の上をゆっくりと走る巨大なレーダーを備えた雪上装甲車らしきものを捉（とら）えた。
「フランソワーズ、皆を集めてくれんか」
「はい――」
事態は、遂に動いた。

オーロラ作戦

1

横浜に行っていたジョー《009》やグレート《007》たちも戻り、〝断崖（だんがい）の屋敷〟の地下にある海底洞窟の基地にゼロゼロナンバーのサイボーグたち全員とギルモア博士とコズミ博士が揃った。

ピュンマ《008》が現状を報告した。

「フィンピーの声の追跡は継続しています。イルカの鳴き声は鮮明で拾い易くて、本当に助かるよ」

現在地のマーカーは仙台沖二十キロ地点を示していた。

「この速度で進んでいるということは、やはり、SEA-REINE（シー・レイヌ）《海底輸送艦》クラスに乗り換えているということだね」
「行き先はアラスカか――」
アルベルト《004》がＭＡＰに表示されたマーカーの矢印の先を見て言った。
「まさか、イルカが奴らの行き先を証明してくれることになるとはな――」
ジェット《002》が意外な味方の登場とその活躍に感心していた。
「でも、フィンピーは大丈夫なのかしら……」

「いくらイルカでも、余り無理をすると心配だけどね。だけど、こればかりは、こちらから伝える手段はないからね」
野生動物の保護にも携わった経験があるピュンマ《008》も実はそれが心配だった。
ジョー《009》は決意を浮かべて言った。
「行こう、アラスカへ——。ドルフィン教授とシンシアさんを救出し、ＭＭＭ１を破壊しよう……！」
「ああ——」と、全員が頷いた。
コズミ博士が準備していた彼らの移動方法はこうだ。博士が団長を務める国連の〝環境調査団〟として横田基地から国

連の専用機でカナダのリッチモンドにあるバンクーバー国際空港に渡り、そこで調査用にチャーターした飛行艇《ボンバルディアＣＬ－４１５》に乗り換え、アラスカのポイントを目指す。すべて手配済みだった。

ピュンマ《008》が操縦出来るので部外者のパイロットを雇う必要もなかった。乗り換えも空港のゲートから出ず、しかも、国連の調査団という国際パスがあれば法的にも問題はなかった。まして、コズミ博士とギルモア博士が同行していれば、疑う者など誰もいないという筋書きだった。

「すごいな、ホントに何とかなるもんだ」

グレート《007》が尊敬の眼差(まなざ)しでコズミ博士を見た。

「わしはバンクーバーで待っとるよ。どうか、ウィリアム君とシンシア嬢ちゃんを救(たす)けてやってくれ」

コズミ博士は祈る瞳(ひとみ)で皆を見た。

「了、了……」

不動明はソファで魘(うな)されている飛鳥了の肩をそっと揺すった。

――ん……?

耳元で明の声を感じた。

「大丈夫か、了――」
了の頭脳が緩やかに活動を再開した。
「う、ううう……」と小さく唸(うな)った。状況を把握するのに、暫(しば)しの時間が掛かった。
「俺は……、眠っていたのか――?」
「ああ、随分、魘されてたみてえだな」
自分で後頭部を擦(さす)ってみたが、頭は重く、身体全体に倦怠(けんたい)感が残っていた。眠りについた瞬間も憶(おぼ)えていなければ、疲労を倍増させたらしい〝夢〟の内容も憶えていなかった。
「そうだ、俺は、ラズバの手掛かりを追っていて……」

明は了の肩に手を置いた。

「了、お前は、のめり込み過ぎなんだ——たぶんな。何度も言うが、お前は悪魔人間（デビルマン）になった俺と違って生身の人間なんだ——。平気に見えても、デーモンの存在を知り、奴らと関わるだけでも並みのストレスじゃない」

飛鳥了はいつもの表情に戻り、肩に置かれた明の手を退けた。

「心配はいらん——。悪魔人間（デビルマン）でなくとも、俺には、覚悟がある」

「やれやれ、医者の不養生じゃねえが、どうやら、その境地

に入っちまったか……」
不動明は呆（あき）れて笑んだ。
「そんなことより、操り蜘蛛（ぐも）のラズバだ。アイツを早く斃（たお）さないと、どれだけデーモンの手下が増えるかわからない。子蜘蛛を寄生させるだけで人間を操るデーモンだ。遅れると人類とデーモンのパワーバランスがあっという間に崩れかねん——」
「で、分かったのか？」
「ああ——絞り込んだ」
了はパソコンの前に移動してマウスとキーボードを使い、

関東の地図を表示させた。
「ここが、ラズバがこの世界に転生した新宿のあの病院だ——」
続いてマウスをクリックし、地下鉄の路線図をだぶらせて表示した。
「地下鉄か」
「ああ——ここに灰色の破線で記されている部分があるだろ。廃線になった旧路線が集中している」
面白いことに、真上から見たその路線図の形は蜘蛛の巣が広がった姿に酷似していた。
「おいおい、これって、もろバレじゃねえのか……!」

「冗談みたいだが、こういうケースは神秘学の世界ではよくあることだ——。例えば日本やアジア圏でもレイ・ラインに似た〝龍脈（りゅうみゃく）思想〟というものがある。風水的なエネルギーの通り道だ。不思議なことに知ってか知らずか、電気会社の大きな鉄塔は今でもそれに沿って建てられている。特別な知識のない素人でも、鉄塔を見れば龍脈が分かるって訳さ——」

「なるほどな。この蜘蛛の巣の中心にラズバが居るってことか——」

「ああ、地下鉄の路線を使えば、東京の主要地域に、一気に子蜘蛛をバラ撒（ま）ける。恐らく奴は今、ここで子蜘蛛を増やしているはずだ」

「いいねえ——面白くなってきたぜ」
明の瞳がギラリと輝いた。
「さて、向かうとするか——」
了は立ち上がった。
「おい、了……。まさか、お前も潜るつもりじゃないだろうな——?」
「フッ——そこまで命知らずじゃない。俺は地獄への入口に、お前を案内するところまでだ。送ってやる——」
「——脅かしやがって」
そろそろ日も暮れようとしていたが地中に潜るのなら昼だろうが夜だろうが関係なかった。了の運転する年代物のロー

ドスターは明を乗せて、新宿方面を目指して走り出した。

2

冷たい海を潜って到着したSEA-REINE《海底輸送艦》から、ドルフィン教授と娘のシンシアは黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）のアラスカにある極秘施設へと移送された。

二人はすぐに引き離され、ドルフィン教授は研究棟の組み立て工場に、シンシアは管理棟の牢（ろう）の中に囚（とら）われた。

シンシアは一言もしゃべらず、壁に作り付けになって設置されている牢獄の椅子に腰掛け、俯（うつむ）いて目を閉じていた。

「…………」

潜水艦の船倉に閉じ込められたときからシンシアはあの言葉を思い出していた。

〝すべてを忘れて、ただ、人として生きろ――〟

ずっとその〝警告の言葉〟を心の友として来た。それなのに黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）は父と自分を放っておいてはくれなかった。

廊下を軍靴が近付く音がした。

――はっ……、この足音……⁈

聞き覚えがあると思った。足音の主はシンシアの檻（おり）の前で立ち止まった。恐る恐るその方向に首を向けると、黒い戦闘

服を着た背の高い男が立っていた。

その男は、両の目と口の周りだけに穴が開いた鉄仮面を被（かぶ）っていた。

「済まない。そんなところに閉じ込めて」

聞き覚えのある声だった。

あの日、病室に現れた背の高い男は言った。

ただ、人として生きろ——。何があっても疑ってはいけない——。すべてを忘れ、〝死の商人〟に関わったこともすべて忘れ、そして、何があっても二度と自分たちに関わってはならないと。ただ、人として生きろ——と、そう、あのときに言った男の声だった。

「俺はジョン・ケーン・スミス。ここの警備を任されている者だ——」
「私は、すべてを忘れて、ただ、人として生きて来ました」
「…………………」
「それをさせてくれなかったのは、ブラック・ゴーストよ……」
「……済まない」
鉄仮面の男は数秒だけ無言で佇むと、そのまま何も言わず、踵を返して静かに歩いて行った。離れて行く軍靴の音がやけに寂しげに響いた。

その頃、研究棟の組み立て工場では、ＭＭＭ１を前にしてウィリアム・ドルフィン教授が施設に常駐する研究員たちに囲まれていた。

「ドルフィン教授、貴方のデータに嘘がないことは分かっています。だが、この複雑なＭＭＭ１の最後の調整は貴方にしか出来ない。こうなることは、承知していたはずですな

――？」

「そうですとも、博士。これ以上拒むことは、悪い結果しか生まないと、貴方にも分かっているはずです……！」

「――ああ」

ウィリアムは顔を伏せて、沈痛な面持ちで決意した。
「こうなったら……仕方ない――」
研究員たちは、その言葉を博士が拒むことを諦めた〝決意〟であると受け取ったが、ウィリアムの思いはその逆だった。
――こうなったら……仕方ない……！
悪しきことたちに目を逸らした細やかな幸せに、見切りを付けるときが来た。
「わかった」
ウィリアムはディスプレイに並んだＭＭＭ１のデータに目

を移し、計器の調整に掛かった。
「手伝ってくれ。波形のチェックが必要だ」
「安心しましたよ、ドルフィン教授。これで、私たちの首も繋(つな)がりそうだ」
研究員たちは安堵(あんど)してウィリアムの指示に従った。

バンクーバーの空港にコズミ博士だけを残し、予定通り、飛行艇《ボンバルディアＣＬ－４１５》に乗り換え、アラスカ湾上空を飛行していると、ギルモア博士に抱かれていた赤ん坊(イワン)《001》が目を覚ました。

「おや、ゼロゼロワン、起きたかね？」

〝敵のレーダーは強力だ。迎撃システムも持っている。この飛行艇で着地するのは避けた方がいい――〟

赤ん坊（イワン）《001》が精神感応（テレパシー）で伝えた。

「近付いた途端、ミサイルで撃ち落とされるなんて、かんべんだからな……」

グレート《007》はブルッと身を震わせた。

ジョー《009》が作戦を提案した。

「飛行艇の安全は確保しなければならない。戻る手段を失うからね。ゼロゼロエイトにはパイロットに専念してもらお

う。ゼロゼロワンと、ギルモア博士はこの飛行艇で待機していて下さい。僕とゼロゼロツーが先に降下して囮になる。その間に、残りの皆もパラグライダーで降下してくれ――。ゼロゼロワン、こんな作戦でどうだい？」

〝ああ、ゼロゼロナイン。その方法が確率的にも、一番、成功率の高い作戦だ――〟

「よし、そいつで行こう――」

アルベルト《004》がそう言うと、全員が頷いた。

〝ああ、そうだ。フィンピーのことなら心配いらないよ――。ボクの説得に応じて、日本に帰ってくれたから――〟

グレート《007》が思わず突っ込んだ。
「お、おい、いつの間に……、いや、それ以前に、イルカと話せたのかよ……？」
〝話したわけじゃないよ――。安心感を送って、戻る気持ちになってもらっただけだよ――。でも、これでシンシアさんたちを助けられなかったら、ボクは嘘をついたことになってしまう――〟
赤ん坊《001》にしては珍しく、弱気な思いを仲間に晒した。
それを聞いたジェロニモ《005》は力強く頷き、「そうなら

ないように、踏ん張ってみるさ――」と低い声で答えた。
コクピットのピュンマ《008》の声がスピーカーで届いた。
「そろそろポイントに到着する――。皆、降下の準備を始めてくれ――」
《プロトサイボーグ》たちの表情に改めて覚悟と緊張が宿った。

3

アラスカは、まだ、ぎりぎり白夜の季節で、あと数時間は視界も確保出来そうだった。フランソワーズ《003》が敵施設

の索敵能力を逆算し、飛行艇《ボンバルディアＣＬ－４１５》は敵のレーダーからの安全距離を取って上空から接近した。

丁度、冷たい空の天井に、美しいオーロラのベールが揺らぎながら現れた。

上空、千五百メートルからジェット《002》に腋（わき）を支えられたジョー《009》が外へと飛び出した。

落下が始まった。高速度の風圧と叫ぶような空気流も、加速装置を備えた二人には慣れた世界だった。

〝俺たちは、精々、このまま目立ちながら地上に降りる。そ

の隙にパラシュート部隊を接近させてくれ――〃
ジェット《002》が脳波通信でそう伝えると、ピュンマ《008》が〃了解――〃と答えた。
目標の施設の建物は大きく2ブロックに分れていた。
〃僕が監視棟を調べるよ――〃
ジョー《009》がそう言うと、
〃じゃあ、俺は研究棟の組み立て工場を先に調べる――〃
と、ジェット《002》が答えた。
〃こっちはパラシュート部隊を降下させたら、飛行艇を安全な場所に下ろして待機する。何かあったら、いつでも呼んでくれ――〃

ピュンマ《008》の操縦する飛行艇《ボンバルディアＣＬ－４１５》は大きく旋回した。
「さて、俺たちの番だ――」
アルベルト《004》が他の者たちのパラシュートをチェックしながら促した。
フランソワーズ《003》は耳を澄まし、敵のレーダーが００９（ゼロゼロナイン）と００２（ゼロゼロツー）の影をキャッチするエコーを確かめた。すぐに反応があった。
「今よ――」
パラグライダーのコンテナを身に付けたフランソワーズ《003》、アルベルト《004》、ジェロニモ《005》、張々湖（ちゃんちゃんこ）

《006》、グレート《007》が、次々と機外に飛び出した。

座席にはギルモアと博士に抱かれた赤ん坊（イワン）《001》だけが残った。

——頼むぞ、皆……。

ギルモアは祈っていた。

側面ハッチはコクピットのピュンマ《008》の操作で静かに閉鎖した。

機内に静寂が戻った。

敵のレーダーは上空から急接近するジェット《002》とジョー《009》の影に反応し、自動警報を作動させた。

施設内に警報が響き渡った。
「何かが、上空から接近して来るッ！」
「ミサイルか……？　隕石（いんせき）か……？」
「わからん、それほど大きくはなさそうだが……」
「確認を急げッ！」
司令室はたちまちパニックになり、常駐研究員や一般警備兵が騒ぎ出した。
鉄仮面の男は冷静に指示した。
「落ち着け——。対空砲を用意しろ。迎撃だ。《サイバノイド》をすべて起動させろ。その二つは囮だ。敵の目的はＭＭ

M1だ。他にも来るぞ――」

研究員たちは《サイバノイド》部隊二個小隊を起動させた。以前、ピュンマ《008》やギルモアが衛星からの映像で確認したのは一個小隊の二十体程度だったが、実際の配備はそれを上回る三十体小隊が二部隊の総勢六十体だった。しかも、《サイバノイド》だけでなく、それなりに訓練された一般警備兵も二十名程常駐していた。

そして、それらを指揮するのは、かつてウクライナで暗躍した際に指揮を執っていた、あの鉄仮面の男、ジョン・ケーン・スミスだった。

ＭＭＭ１の開発を進めるこのアラスカの極秘施設は黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）にとってそれ程重要な拠点だった。

施設の上部にある幾つかのドームが開き、対空砲が現れ、激しい迎撃を開始した。

「ゼロゼロナイン、おっぱじめるぜ――」

「ゼロゼロツー、ドルフィン教授とシンシアさんを救うのが最優先だ――。それを忘れないでくれよ――」

「ああ、わかってるって――！」

ジョー《009》を摑（つか）んで飛ぶジェット《002》は対空砲の銃弾を掻（か）い潜り、充分に敵の注目を引き付けた上でその手を放

した。

ジョー《009》は空中でくるりと回転してバランスを修正すると、猛威を振るう対空砲のすぐ脇に自分から着地した。一瞬で鉄の銃口をひん曲げ、機関部を破壊した。

加速装置で飛び退いたジョー《009》の背後で対空砲が大爆発を起こした。ジェット《002》もスーパーガンの二挺拳銃（にちょうけんじゅう）で上空から攻撃を加えた。

起動した六十体の《サイバノイド》は予め（あらかじ）プログラムされていたそれぞれの防衛ポイントに展開した。

パラグライダーのコンテナを付けて降下した五人はその騒

ぎの陰で接近した。ベリーフライの俯せ姿勢を取り、時速二百キロを超えるスピードでジョー《009》たちが闘っている位置の反対側から斜めに下降して一気にパラグライダーを開いた。

急減速が掛かり、シュルシュルと傘が開いた。

五人は巧みにパラグライダーを制御し、敷地内の広場に着地した。

「とりあえず、ここまでは成功だな――」

アルベルト《004》は跪く姿勢を取り、膝からマイクロミサイルを発射した。細かく分離したミサイルは複数のトーチ

力を同時に沈黙させた。
フランソワーズ《003》はドルフィン教授とシンシアの居場所を探った。この距離なら、教授の生体反応もシンシアのキャラクター・フリークエンシー《固有周波》も容易にキャッチ出来た。
「えっ……?!」
「どうしたね――ゼロゼロスリー?」
張々湖《006》が尋ねた。
「シンシアさん以外にも、別のキャラクター・フリークエンシー《固有周波》が……」
「《サイバノイド》の反応じゃないのか?」

グレート《007》がそう言ったが、フランソワーズ《003》は首を横に振った。

「この反応はシンシアさんと同じ、生体サイボーグのものだわ……」

「厄介な敵が、また増えたらしいってことか――」

アルベルト《004》は膝元の埃（ほこり）を払いながら立ち上がった。

上空ではジェット《002》が飛び回り、施設の屋上では加速装置で戦闘を続けるジョー《009》が敵の兵器を無力化させていた。

「とにかく、二人の救出が先だ――」

現場で迷っては勝機を逸する。アルベルト《004》はフランソワーズ《003》を促した。
「ええ」
フランソワーズ《003》は頷いた。
「シンシアさんはあの建物の中に、ドルフィン教授とＭＭＭ１の反応は、向うの建物に――。座標を送るわ」
脳波通信を通じて、それぞれの補助メモリーにＭＡＰデータが送られた。
「あーあ、きれいに二ヵ所に分れてるもんだなァ」
グレート《007》が脳内に映ったＭＡＰのマーカーを確認し

て言った。
「その生体サイボーグは、どこね――？」
張々湖《006》が尋ねた。
「今は司令室に居るわ。彼がピュンマ《008》の言っていた《サイバノイド》部隊の指揮官かも知れない……」
「よし、こっちも二手に分れよう。ＭＭＭ1の破壊が想定される方は、俺とゼロゼロファイブとゼロゼロシックス――。シンシアの救助はゼロゼロスリーとゼロゼロセブン。それに、ゼロゼロナインに合流してもらう。ゼロゼロツーは上空から掩護(えんご)だ――それでどうだ？」
〝了解――〟と、それぞれの返事が脳波通信でアルベルト

《004》に返って来た。
「シンシアの近くには、例の生体サイボーグも居る。気を付けろよ――」
冷静なドイツ人は最後に警戒を付け加えた。
〝ゼロゼロナイン、ゼロゼロツー。聴いていたな――。作戦開始だ――〟
二人も闘いながら脳波通信で答えた。
〝了解――。掩護は任せろ――〟
〝わかった――。ゼロゼロスリーたちと合流するよ――〟
救出作戦は始まった。

地の底へ

陽はすっかり落ちた。

副都心の中心にある高い塀に囲まれた広大な公園だった。入園料が必要な管理エリアで、閉園時間の過ぎた今、息を殺したホームレス以外には人の気配はなかった。

飛鳥了が地獄への入口に選んだのは新宿御苑(ぎょえん)の敷地にある旧玉川(たまがわ)上水の取水路の脇の古い洞穴だった。東京メトロは大型工事でもない限り、外から廃線路に繋(つな)がる抜け道は無い。堂々と営業中の地下鉄路線を通れば目当ての場所に行けない

ことはないが、それをすれば、たちまちそこが戦場になり、デーモンに新鮮な餌を与えるようなものだった。

「いいか、明。ラズバの塒に着くまでは、出来るだけ気配を殺して接近するんだ——。背中に立ってから、一気に片を付ける。俺たちに卑怯も反則もない——」

「はっきり言ってくれるぜ……」

「これは人類存続の危機だ——。少ない人数なら寄生した子蜘蛛を引き剝がすことで元に戻すことも出来るが、大量に寄生されたら親蜘蛛のラズバを斃すしかない——。騒動自体、人間の記憶から消され、都合良く記憶を変えられてしまうだ

ろう。生命体以外の物質的被害も元に戻るかも知れないが、これまでの例から見ても、死んだ人間は生き返らない——。別の事故で死んだことに、事実をすり替えられるだけだ。手小摺って大量の死者が出ると、拙いことになる——」

「ああ——わかったって。肝に据えるさ——」

不動明は人間の姿のまま洞穴の中に入って行った。中は完全な闇だったが、デーモンと合体した悪魔人間には何の問題もなかった。

飛鳥了は闇に消えて行く不動明の後ろ姿を見ながら思った。

——まるで、ダンテ・アリギエーリの『神曲』の地獄巡り

だな……。待って居るのは美しきベアトリーチェか、それとも聡明なる詩人ウエルギリウスか……。それとも……！

飛鳥了は自分の知らない自分の〝意識〟が別の異なる視点から何らかの意図を持ち、不動明を翻弄しているように思えてならなかった。

アラスカの決戦

1

管理棟にある司令室には鉄仮面の男と二名の施設職員が待機して居た。

警備兵たちと《サイバノイド》部隊は展開を終えていた。コンソールの上に並んだモニターには施設内の至る所で暴れる《ゼロゼロナンバー・サイボーグ》たちの映像が映し出されている。戦闘は始まっていた。彼らは銃撃の中を駆けていた。冷たい空の上でも赤い戦闘用防護服を身に着けた男がスーパーガンで攻撃しながら飛んでいた。

解析システムが侵入者たちを割り出した。
「ギルモア博士と逃げ出したプロトサイボーグたちです……！」
「まさかっ、潜伏していた日本からドルフィン教授たちを追って……？　まんまと逃げ果たせた奴らが、何故、また、自ら危険を冒してまでブラック・ゴーストの極秘施設に飛び込んで来る……！」
黙ってモニターを見ていた鉄仮面の男が呟(つぶや)いた。
「——日本で教授と接触して、ＭＭＭ１の存在を知ったか……」

鉄仮面の男は冷静だった。
「彼らが、本当の〝覚悟〟を手に入れたということだ――」
「覚悟を――?」
職員たちは理解出来ないという表情だった。
無理もなかった。彼らは黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の恐ろしさを知っていても、自分が所属する組織に真の危機感を持ってはいない。世間からバッシングを受ける〝武器商人〟くらいにしか理解しておらず、それでもこの世界にとって〝必要悪〟であるくらいにしか思っていなかった。〝覚悟〟に至る〝思い〟はわからない。一度でもその被害を直接受ける当事者とならなけ

れば、黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）の存在自体が〝許されざる悪しき存在〟であるという理解に至らない。それが人の常だった。

ジョン・ケーン・スミスはこれまで嫌というほどそれを見て来た。彼自身も被害を受けた当事者であると共に、今では世界に戦火を撒（ま）き散らす黒い幽霊団（ブラック・ゴースト）側の当事者でもあった。彼は自身が〝許されざる悪しき存在――〟の一部であると理解した上で、そこから抜け出すことを拒絶する生き方を自ら選んでいた。

「プロトサイボーグか――」。彼らが相手では警備兵では手に負えんな。サイバノイド部隊で迎え撃つ。死にたくなかった

らシェルターに隠れていろ――」

「スミス隊長、しかし……」

二人の職員は、一瞬、臆病者と思われることを気にして躊躇したが、百戦錬磨として知られる鉄仮面が敢えて口にした提案に従うことにした。二人はそそくさと手荷物を抱えると地下シェルターへの階段を降りて行った。

――フン、邪魔者は消えたか……。

鉄仮面の男は六十体の《サイバノイド》部隊と脳波シンクロを可能にするコントロールシートに腰を下ろした。

「さてと……」

ジョン・ケーン・スミスは自分を取り囲むように広がったコンソールシステムに両手を伸ばした。

彼こそがアダムス・トイフェル博士とその息子のエドワードが《ボグートプログラム》で初めて手掛けた《アドバンスト・カスタム》だった。《ハイティーンナンバー・サイボーグ計画》はエスパーの潜在能力を持つ〝白い部屋〟の子供《インテンショナル・ミュータント》たちだけではなく、戦場で傷ついた兵士からも検体を募った。

強化細胞と代用メカニックのハイブリットモデルは戦争経験者の改造には不可欠な研究だった。

コードナンバー・００16（ゼロゼロシックスティーン）。機械改造部位の比率は《プロトナンバー》の００４（ゼロゼロフォー）を超えていた。しかも、一見、生身の肉体に見える部分も強化細胞の生体サイボーグ化を施していた。生まれたままの状態が残っているのは首から上だけだったが、眼球や外皮も交換されている上、脳系統も一部を残しチップに換えられ頭部全体を鉄仮面が覆っていた。頭部の脆弱（ぜいじゃく）さを補うためのものだったが、その鉄仮面のお蔭（かげ）で僅（わず）かに残った人間らしさまで外見から消し去られ、鉄仮面の穴から覗（のぞ）く目と口だけが、彼がロボットでなく人間であることを示す、唯一の目印だった。

その能力は《プロトナンバー》たちを遥(はる)かに凌(しの)いでいた。００９(ゼロゼロナイン)の上をいくマッハ４の加速装置は勿論(もちろん)のこと、そのパワーは００５(ゼロゼロファイブ)を超え、内蔵兵器も００４(ゼロゼロフォー)を超えていた。さらには《サイバノイド》部隊を脳波シンクロによってコントロールするシステムも内蔵され、その能力は、たった一人の軍隊ならぬ、戦神(いくさがみ)そのものといって良かった。

だが——ジョン・ケーン・スミスの記憶(メモリー)には、三年前のウクライナでの出来事が、唯一、人間らしい心の迷いを残す事件としてあった。

命令とはいえ、仕掛けたのも自分たちだった。その上、ド

ルフィン教授の協力を取り付けるために、死の淵にあったシンシアを《生体サイボーグ》技術によって助けると持ち掛けたのも自分だった。事の正否より、ジョン・ケーン・スミスには、自分に使われた技術が誰かの命を救うことが嬉しかった。

黒い幽霊団に身を窶しても、少しは善良なる誰かの力になれる。その気持ちに浮かれ、あの日——組織を信じた。

そしてシンシアに忠告した。

「すべてを忘れて、ただ、人として生きろ——」と、だが、黒い幽霊団はそれを許さなかった。

希望を見せるようなことを――あんなことを、口にするのではなかった。

自分が忠告をしたばかりに、あの娘はそれさえ守り続ければ幸福な未来がそこにあると思ったに違いない。

ジョン・ケーン・スミスはそう思わせてしまったことを心の底から悔いていた。

――俺にはもう、名も口も必要ない……。

鉄仮面の男のそんな思いを知ることもなく、シンシアは牢(ろう)の中で静寂を守っていた。

年相応の娘のように怯(おび)えることも出来たが、シンシアは三

年前、自身に起きた出来事を記憶の底で憶えていた。

記憶を封印し、長い間、自分はただの人間だと思おうとした。皮肉なもので、人間レベルの代謝に抑えられ設定された《生体サイボーグ》の機能は、この三年精確に働き、自身の肉体を疑うこともなかった。

だが――記憶の底ではわかっていた。

あの日のフランソワーズ《003》の心遣いも、その彼女に対して、自身の迷いを振り払うために口にした冷たい言葉も、すべては自分自身に向けられた刃だった。

――御免なさい……。フランソワーズ……。

自分が心を開いて素直になれば、きっと、いい友達になれたのにと、シンシアは今更ながらに思った。

ここに来る途中、押し込められていた薄暗い潜水艦の船倉で、父のウィリアムが許しを請うようにいった。

「シンシア、許しておくれ……。ブラック・ゴーストと関わってしまったことで、私たちにはもう、自分たちの未来を語り、夢見ることは、出来なくなったのかも知れない……」

「お父様……」

「彼らの言葉は悪魔の囁(ささや)きと同じなのだ。何かの代わりに何かを差し出せ——。それは最早(もはや)、交換条件ではなく、選択肢

に見せ掛けた、遁(のが)れられない悪魔との契約なのだ。ギルモア博士の言っていたことは正しい。このままでは終わりはない。誰かが立ち上がり、ブラック・ゴーストに立ち向かわなければ、この争いのスパイラルに終わりは来ないのだ——」

「…………?!」

「兵器として組み立てられたMMM1を二度と悪に利用されないよう、この命に代えて、必ず破壊する——」

ウィリアムは決意を秘めた表情でそう言った。

「だから、済まないがお前も覚悟しておくれ……。この三年の年月は、その思いを覚悟するために神様がくれた時間だっ

たと……」
「ええ、お父様……」

研究棟の組み立て工場にも、侵入者たちと施設の迎撃部隊の戦う音が届いた。
――来たか……！
ＭＭＭ１の最終調整をしていたドルフィン教授は、外で広がる銃声や爆発を聞き、《プロトナンバー・サイボーグ》たちの到着を知った。
「ドルフィン教授、まだ、出来ないのか？」
「ここでこれを使って奴らを退ければ、スカール様のお目見

得も麗しいと言うもんだ」
研究員たちが呑気に催促した。ウィリアムはコクピットの中で作業を続けていた。
「あと少しで、メインウエポンである四連共振砲《カトルレゾナカノン》の調整が終わる……！　急がせたいのなら、黙っていてくれッ――！」
その剣幕に、最早、研究員たちは疑いもしなかった。
任意の座標に連続して精確な固有振動波を発生させる四連共振砲《カトルレゾナカノン》は、どんな物質でも分子レベルで砕くことの出来る音波砲だった。それこそが、ウィリア

ム・ドルフィン教授の音波研究の副産物として生まれた恐るべき兵器だった。
——もう、少しだ……！
ウィリアムは自分にしか分からない最後の調整を施した。
アルベルト《004》、ジェロニモ《005》、張々湖《006》がそこに急いでいた。
上空からのジェット《002》の掩護もあり、三人はそれぞれの能力を最大限に活かしながら組み立て工場を目指した。
大岩を軽々と投げるジェロニモ《005》に追撃を許さないアルベルト《004》の内蔵型ハンドマシンガン。張々湖《006》

の噴き出す大火炎は警備兵たちへの牽制(けんせい)に有効だった。
だが、それらに怯えと躊躇(ちゅうちょ)を見せない《サイバノイド》部隊が現れた。
アルベルト《004》たちの進路を阻むように、三十体の黒い機械兵たちが立ち塞(ふさ)がった。メカニックが露出している部分は何処となく００４(ゼロゼロフォー)と構造が似ているようにも見えた。
「チッ、サイバノイドか……。見た目は他人には思えないがッ、仲良くは出来そうもない――」
アルベルト《004》が冗談めかして言った。
量産型の《サイバノイド》には加速装置こそ備えられては

いないが、それでも人間の兵士には不可能な高速度での行動が可能だった。
司令室から鉄仮面の男が脳波シンクロで命令を与えた。
〝高速包囲――。一斉射撃――〟
〝リョウカイ――〟
と、《サイバノイド》たちからの命令受諾通信があった。
アルベルト《004》は警戒していた。
――んッ……?!
三人は一瞬で間合いを詰められ、三十体の《サイバノイド》部隊に囲まれた。

――これ、拙いアルね……?!
《サイバノイド》たちはアサルトライフルを構えていた。
直撃を覚悟し、ジェロニモ《005》がその身体を盾にしてアルベルト《004》と張々湖《006》を守るように伏せたとき、加速したジェット《002》がスーパーガンをレイガンモードの二挺拳銃にして、上空から《サイバノイド》たちの脚を貫いていた。飛行では接触面がないので加速装置の影響を受けないが、ジェット《002》の腕と脳波シンクロは加速空間にあり、ガンマンとしてはこれ以上ない理想的な早撃ちが可能だった。

《サイバノイド》たちはバランスを崩し、アサルトライフルの狙いが僅(わず)かにズレた。
〝ゼロゼロフォー――〟
加速から抜けたジェット《002》の脳波通信にアルベルト《004》が反応した。
「今だッ――！」
右腕に内蔵されたマシンガンが火を噴いた。無数の銃弾が放たれ、それを追うように張々湖《006》の大火炎が焼き払った。
〝各個、突入――〟
鉄仮面の指令で《サイバノイド》たちは包囲の中心に突入

したが、立ち上がったジェロニモ《005》が迎えうち、両手に二体を掴み上げるとバシャリと互いを激しくぶつけて潰し、更にその残骸を別の《サイバノイド》に向けて放り投げた。倒れた敵の一団に向け、張々湖《006》がダメ押しの大火炎を噴き出した。

「丸焼きアルね――」

形勢は《プロトサイボーグ》たちに傾いてはいたが、《サイバノイド》もまだ半数以上を残していた。

管理棟の前に警備兵たちの銃弾を掻い潜りながらフランソワーズ《003》とグレート《007》が駆け込んだ。

「シンシアはこの中に居るんだな？」

「ええ」

コンクリートの壁の陰に一先ず隠れ、辺りを窺っていると、建物のエントランスから整然とした《サイバノイド》部隊が列を成して現れた。こちらにも一個小隊の三十体が揃っていた。

「おいおい、あれを全部相手しろってか……」

グレート《007》が愚痴を零し掛けたとき、加速装置を解いたジョー《009》が目の前に現れた。

「ゼロゼロナイン！」

その姿にフランソワーズ《003》が安堵の表情を見せた瞬間、背後でチャリっとライフル銃を構える音がした。

警備兵たちが発砲しようとしていた。

——加速装置ッ……！

ジョー《009》の姿はまた一瞬で消えると、全員の警備兵たちに当て身を入れて気絶させ、また同じ場所に出現した。

グレート《007》は少し遅れて一斉に倒れる警備兵たちを見た。

「助かった……。いくらスーパーガンをパラライザーモードにしても、どうも、生身の兵士たちを相手に銃を使うのは気

が進まないからな――」
「あの《サイバノイド》たちは僕が相手をする。二人はシンシアさんを――」
「ええ、わかったわ」
ジョー《009》は再び加速し、三十体の《サイバノイド》部隊に突進した。加速空間の中、連続行動で敵を摑み、投げ捨て――を続けたが、その強度は予想よりも高く、思うようにダメージを与えられなかった。
だが、その隙にグレート《007》とフランソワーズ《003》は管理棟への侵入に成功した。

〝ゼロゼロナイン――。レイガンモードで眉間を狙うんだ――。奴らの行動を制御する集積回路はそこにある――！〞

上空で同じ加速帯に速度を合わせたジェット《002》が、先に得たコツをアドバイスした。

〝やってみるよ――〞

ジョー《009》はスーパーガンをレイガンモードにすると、次々と《サイバノイド》たちの眉間を狙って撃ち込んだ。

撃たれた《サイバノイド》たちは糸の切れたマリオネットのように転がり、動かなくなった。

――いいぞ、ゼロゼロナイン。

加速を解いたジョー《009》にジェット《002》は脳波通信で話し掛けた。
〝俺はドルフィン教授の救出と、MMM1の破壊に向かう。ゼロゼロナインはゼロゼロスリーたちを掩護して、シンシアを――〟
〝ああ、了解だ――〟
ジェット《002》は大きく噴射すると、上空で方向を変えて一気に組み立て工場の方に飛んで行った。
ジョー《009》はフランソワーズ《003》たちの跡を追い、管理棟へと駆けた。

2

フランソワーズ《003》の索敵能力は極めて高く、移動しながらでも進路に敵が隠れていないか、完璧に把握出来た。外にはあれ程の敵が居たのに、不思議なことに、建物の内部には、一切、待ち受ける兵士たちの気配がしなかった。

「逆にィ、怪しいねえ……」

厳しい世間に慣れているグレート《007》が疑った目で廊下の先を見た。

「この先に階段があって、地下にシンシアさんが閉じ込められている牢があるわ」

二人はスーパーガンを構えて警戒しながら進んだ。
「例の、生体サイボーグは――？」
「その反応は、司令室から動いていないわ。司令室はこの建物の中央部。捕虜のシンシアさんを守ろうとする意志がないみたい……」
「そりゃ、奇妙だな。普通なら、何が無くても奪われまいとするはずだ――。もしもの時の切り札になるからな」
「ええ、そうだけど……」
「まあ、考え過ぎるのもなんだな。とにかく、シンシアの無事を確かめるのが先だってことだな――」

突き当たりの階段を下り、収監区画に辿り着いた。廊下の手前の鉄格子はスーパーガンで焼き切ったが、その先にも鉄格子は幾重にも続いていた。

他の囚人も、警備の者たちの気配も、まったく無かった。

ジョー《009》がフランソワーズ《003》たちの跡を追ってエントランスに入ると、白いロビーの壁が寄せ木細工のように突然動き出した。

——何ッ……?! 罠なのか……?

内部は見る間にガクガクと分離し、スライドし、縦に横にと組み替わり、新しい壁と廊下の位置を作り出した。

新しく出来た廊下は建物の中央部に直接繋がるスロープとなっていた。
——僕を、誘っているのか……!
ジョー《009》はもう一人居るという《生体サイボーグ》の意思であると感じた。
「——いいだろう。闘わなけりゃ、シンシアさんと教授を救出出来ないのなら、闘って決着をつけるしかない……!」
その頃、フランソワーズ《003》とグレート《007》はシンシアが収監されている鉄格子の前に辿り着いた。
シンシアは俯いて目を閉じていた。二つの足音が近づくの

を聴いていたが、瞼を開けてそれを確かめようという気力も無かった。
「シンシア……」
フランソワーズ《003》が優しく声を掛けた。
「フランソワーズ……！」
信じられないといった表情でシンシアは見た。フランソワーズとグレートが優しく微笑んだ。
「本当に……ここまで……」
「迎えに来たわ」
「フランソワーズ……。貴女には、酷いことを言って……。」

御免なさい――」
「――シンシア」
「まあお二人さん、話したいことはいろいろあるだろうが、先ずは、ソコを出てからにしないか」
グレート《007》が情況を把握する大人として冷静な判断を促した。
とは言ったものの、シンシアが入れられている牢の鉄格子には鍵穴（かぎあな）らしきものが見当たらなかった。
「なんで……？　チッ、ちょっと、離れててくれ――」
グレート《007》はスーパーガンを取り出して、最強のレーザーモードに設定して鉄格子の熱線カットを試みた。

だが、鉄格子はビクともしなかった。
「おいおい、どんだけ強い、金属なの……？」
フランソワーズ《003》が透視解析を行った。
「超密度合金の上、耐熱ポリマーが施されているわ。これじゃ、どんなレーザーでも切れないわ——」
「——ってことは、裏に回って壁の方を壊した方が早そうだな」
「ええ、ちょっと待って」
フランソワーズ《003》は、今度は壁を透視した。
「——そんなッ！」
牢を囲む壁一面が鉄格子と同じ金属で覆われていた。

シンシアはフランソワーズ《003》の表情を見て情況を悟った。
「いいのよ。覚悟は、出来ているから……」
たちまち深刻になったフランソワーズとシンシアにはアイデアが尽き、思考能力が停止したが、人生の場数を踏んでいるグレート《007》は違った。
「まあ、諦めるなって。司令室からの遠隔操作なら、司令室に行って開けてくりゃーいいんだ。な、簡単なことだろ――」
フランソワーズ《003》はグレート《007》を今日ほど頼も

しく思ったことはなかった。

ジョー《009》は白い廊下のスロープを上り、司令室に足を踏み入れていた。

扇状に広がったコンソールシートに鉄仮面の男が腰掛けていた。

「君が、この施設の責任者なのか——？」

「いいや、俺は警備隊長に過ぎない。貴様と同じ、ただのソルジャーだ——」

鉄仮面の男がきっぱりと答えた。

「僕は戦士じゃない——。闘わなけりゃ、守れないものがあるから闘っているだけだ」

鉄仮面の男は口元に笑みを浮かべた。

「貴様たちは、まだ、そんなことを言っているのか……。闘いを生み出す闘いも、闘いを終わらせるための闘いも、何が違うと言うのだ――。相手を攻撃し、破壊することに、何の違いがある――？　そのために、より強き力を求める限り、闘いに終わりはなく、その先に待つものは、恐らく――人類の滅亡でしかない」

「ブラック・ゴーストの手先が、何を言う！」

ジョー《009》は大声で吐き捨てるように叫んだ。

仮面の男は感情的になることもなく、瞼を一度閉じてから

ジョー《009》を見詰めた。

「俺がブラック・ゴーストに属するから〝悪〟で〝敵〟なのか――？　世界がそれ程に単純なら、ブラック・ゴーストと敵対し、闘うことを選んだ貴様たちも〝悪〟ではないのか――？　事の本質とは、どちらが先に手を出したのかなどという事ではない。どうすれば闘いを止められるのか、その一点にしかないのだ――」

鉄仮面の男はそう言うと、コンソールのスイッチを一つ操作した。

「今、シンシアの牢のロックを解除した。もう、シンシアは自由だ――」

「どういうことなんだ……？」

鉄仮面の男の言った通り、フランソワーズ《003》とグレート《007》の目の前で牢のロックが外れ、鉄格子がひとりでに開いた。

「おんや？　勝手に、開いたのか……？」

グレート《007》は急いで牢に入りシンシアの肩を支えて外に出た。

「さて、ずらかろうか——」

シンシア、フランソワーズ、グレートの三人は出口を目指した。

〝シンシアさんを救助したわ——〟

フランソワーズ《003》からの脳波通信が届いた。

鉄仮面の男は冷静な瞳(ひとみ)をジョー《009》に向けていた。
「解放したぞ――。だが、シンシアの命を握っているのは、ブラック・ゴーストでも貴様たちでもない。彼女の命の燈火(ともしび)は、嘆きと迷いの中から抜け出せない、実の父親によって燃え尽きるのだ……」
「ドルフィン教授が……?!」
鉄仮面の男はゆっくりと立ち上がった。
「……………!」
ジョー《009》は低く構え、闘いの姿勢をとった。
「ゼロゼロナイン。俺はもう、誰とも闘わない。この施設と

滅びることが唯一の望みだ」
「君は……？」
「俺のスペックはすべてに於いて貴様を凌駕している。貴様を倒しても虚しいだけだ――。力を行使することこそ、ブラック・ゴーストがこの世に在り続ける、何よりの理由なのだ……！　闘い続ける限り、終わりはない――」
丁度そのとき、ＭＭＭ１の最終調整を終えたウィリアム・ドルフィン教授がそのマシーンの中に立て籠り、震える声で決意を口にした。
「私の技術は、ブラック・ゴーストには渡さない……！」

四連共振砲《カトルレゾナカノン》と6基のマルチミサイルを装備した雪上特殊装甲車《ＭＭＭ１》は、無限軌道を回し、組み立て工場の外に出た。

漸(ようや)くすべての《サイバノイド》を斃(たお)したアルベルト《004》、ジェロニモ《005》、張々湖《006》、ジェット《002》がその姿を見た。

「――アイツが、ＭＭＭ１か……！」

ジェット《002》が着地して仲間たちと並ぶと、四連共振砲《カトルレゾナカノン》の砲塔が管理棟を狙って照準を合わせた。

——何故ッ……?!

目撃していた全員がそう思った。

「動かしているのは誰なんだッ——?!」

冷静なアルベルト《004》が思わず叫んだ。

管理棟にはシンシアが居た。

ウィリアム・ドルフィン教授は分子破壊共振の設定値をシンシアの身体を形成する生体サイボーグの構造破壊に合わせた。

トリガーを引けば、シンシアは痛みもなく消滅する。本来、三年前から存在しなかった命が消滅するだけだった。

自分にとっての〝罪〟の象徴である〝娘〟を無に返した上

で、教授自身もＭＭＭ１と共に自爆し、決して〝悪〟に渡してはならない兵器と共に死ぬつもりだった。

それがウィリアムの言った、「こうなったら……仕方ない――」の意味だった。

「済まない、クレメンス……。シンシア……。今日で終わらせよう――。迷いの果てに、過ちを重ねた日々を……」

――なに？

フランソワーズ《003》はその悲しい言葉を感知していた。

「……！」

グレート《007》は突然表情を凍て付かせたフランソワーズ

《003》を見逃さなかった。
「どうした、ゼロゼロスリー？」
だが、フランソワーズ《003》は首を僅（わず）かに振り、答えを拒んだ。
グレート《007》はその様子でシンシアに関することだと察し、それ以上の追及はしなかった。
ドルフィン教授は四連共振砲《カトルレゾナカノン》のトリガーに指をかけ、震えていた。
「シンシア……。許しておくれ……！　……！　ううっ……」

指先に力を込めようとしたが、ウィリアムにはトリガーを引くことが出来なかった。
「——だめだ……。私には出来ない……」
ウィリアムはトリガーから手を放し、コクピットの中でうつ伏した。特別な身体になったとはいえ、生きている〝娘〟を、父親自らの手で無に返すことなど出来ようはずもなかった。
「うっ、うううっ……」
ウィリアムは肩を震わせ、声を殺して泣いていた。
ジョー《009》と鉄仮面の男は司令室のモニターでその様子を見ていた。

「教授がトリガーを引いていれば、シンシアだけでなく、同じ分子構造を持つ生体サイボーグである俺も——崩壊していた」

鉄仮面の下の表情は測れなかった。

だが、鉄仮面の男が、自らの死の可能性を視野に入れた上で、何か〝賭け〟をしていたのはわかった。

「君は……自分の運命も、今、教授に委ねていたのか——?」

「委ねる……。ああ、そうかも知れんな——」

グレート《007》とフランソワーズ《003》はシンシアを連れて収監区画から脱出した。

「迷っている暇はない。ほら、お嬢さん方、とっとと、走った、走った！」
英国紳士にテンポよく急かされ、三人は出口を目指した。
動きを止めたＭＭＭ１を前にして、ジェット《002》、アルベルト《004》、張々湖《006》、ジェロニモ《005》は情況を読みかねていた。
「一体、どうなってる……?!」
アルベルト《004》は前髪が掛かった薄い瞳を凝らして情況の把握に努めた。
見る限り、停止した新兵器以外、特別な動きは感じられな

い。
ジョー《009》の前に立つ鉄仮面の男の声は、少し、嬉しそうだった。
「ドルフィン教授が、思いとどまってくれた」
「君は、何を考えているんだ……？」
「どんな方法であれ、この世に引き止めた命ならば、皆に祝福され、輝いて欲しい……。それは俺のように、この手を汚した者が言えることではないのかも知れない。だが、少なくとも教授には、嘆きと迷いの中から抜け出し、あの娘の命に、もう一度、向き合ってもらいたかった。そうでなけれ

ば、最早（もはや）、あの娘自身が命の喜びを感じることは出来ないし、死のうが生き延びようが、自分の存在に対する責めを感じ続けることになる――」

「…………」

ジョー《009》は言葉を探していた。

鉄仮面の男は〝敵〟ではあったが、真摯（しんし）に命と向き合っていた。同じ思いを抱える改造人間（サイボーグ）にしか理解し合えない悲哀が共有出来たような気がした。

だが――ジョー《009》がそれを伝えようとした瞬間、鉄仮面の男の姿は一瞬で消えた。

「はっ……」

加速装置だった。その速度は、彼自身が言っていた通り、ジョー《009》のそれを遥かに凌駕していた。

次の瞬間、鉄仮面の男の姿はMMM1の車体の上にあった。閉ざされた乗り込み口を向き、アルベルト《004》や張々湖《006》たちに無防備なまで背を向けていた。

「なにね、あの男？　敵の隊長アルか？」

揃っていた《プロトサイボーグ》たちが一斉にスーパーガンを構えた。

〝待ってくれ、みんな――〟

ジョー《009》が脳波通信を送った。

〝恐らく、彼は、ドルフィン教授を助け出すつもりだ――〟
〝あの中にドルフィン教授が――？〟
〝どういうことだ。ブラック・ゴーストが、どうして――？〟
アルベルト《004》が当然の質問を投げ掛けた。
〝彼は、闘いたくないと言った。この世に引き止めた命ならば、皆に祝福され、輝いて欲しいとも……〟
〝シンシアのことか――？〟
ジェット《002》が確認した。
〝ああ、彼はブラック・ゴーストだが、教授とシンシアさんへの思いは本物だと思う。きっと僕たちが来なくても、こう

するつもりだったんだ。みんな、少しだけ時間をくれないか――〟

〝チッ、そんなこと言って、ＭＭＭ１が撃って来たらどうすんだ。共振砲だけじゃなく、アイツはミサイルだって、たんまり積んでるんだぞ――〟

ジェット《002》は反論を口にしたが、ガンベルトのホルダーに二挺（にちょう）のスーパーガンを戻していた。

メンバーの総意を代弁するようにジェロニモ《005》が答えた。

〝奴を信用するんじゃない。俺たちは、奴を信じるゼロゼロナインを信じるんだ――〟

〝ありがとう、みんな――〟

ＭＭＭ１の乗り込み口のハッチは鋼鉄製で様々なセキュリティが掛かっていたが、脳波コントロールで制御出来る鉄仮面の男には無意味だった。

〝ロック解除――〟

そう念じるだけでロックは解除され、閉ざされていたハッチは自動的に開いた。

仮面の男は一瞬で中に入ると、ドルフィン教授を抱えて、ＭＭＭ１の前の大地に跪（ひざまず）いて出現した。

ジョー《009》、フランソワーズ《003》、シンシア、グレート《007》も駆け付けていた。

よたりよたりと立ち上がったドルフィン教授は、シンシアを見付けると、おぼつかない足取りで歩んだ。
「シンシア……」
「パパ！」
シンシアも走り、父と娘は固く抱き合った。
「シンシア……すまなかった……」
鉄仮面の男は全員に聞こえるよう、ジョー《009》に向かって言った。
「教授とシンシアを連れて一刻も早くここから離れろ――。
まだ、この施設には、ストックされた《サイバノイド》や武器が隠されている。俺はそれらすべてを、このＭＭＭ１で破

壊し、その後に、教授がプログラムした破壊コードで、これ自体を破壊する」
それを聞いたドルフィン教授はハッとした。
「私が組み込んだ破壊コードはＭＭＭ１のコクピットからしか作動しない自爆プログラムだ。生体サイボーグの君でも、死ぬということだぞ……！」
「承知している――」
シンシアが小さな声で呟いた。
「ジョン・ケーン・スミス……。貴方は、一体……」
鉄仮面の男は背筋を真っ直ぐに伸ばして言った。

「シンシア、もう一度言おう。すべてを忘れて、ただ、人として生きろ――」

「…………」

「たとえそれを許さない者が現れようとも、気にするな。君には、君の命を何よりも大切に思う、お父上がいる――」

「――ええ」と、シンシアは頷いた。

それを見届けると、鉄仮面の男はまた一瞬で消えた。

MMM1のハッチが閉じた。

〝急いで離れろ。生き残っている組織の者たちに勘付かれる前に、あらゆる兵器に対する共振波を同時に発生させる。近

くに居たら、巻き添えを喰らうぞ――〟

ＭＭＭ１のコクピットから鉄仮面の男が脳波通信を送って来た。

「たくっ、なんて強引な野郎だ……」

流石のジェット《002》も呆れていた。

赤ん坊《001》からのテレパシーが全員に届いた。

〝皆、聞くんだ。共振波がＭＭＭ１のコア自体を破壊した場合の破壊力はハイペロン爆弾に匹敵する――。ゼロゼロナイン、ゼロゼロツー。皆を脱出させるんだ――〟

その瞬間、ジョー《009》とジェット《002》は加速し、

ジョーがドルフィン教授とフランソワーズとグレートを、ジェットがシンシアとアルベルトと張々湖とジェロニモを数度に分けて安全圏である飛行艇《ボンバルディアＣＬ－４１５》が待機する岸壁まで移動させた。

彼らが離れた岸壁に揃い、ジェット《002》が最後の加速を解いたとき、遠い施設の位置から強烈な衝撃波が広がった。

氷の大地が削（そ）がれ、舞い上がった氷塊と瓦礫（がれき）まで宙で消滅した。

爆発したＭＭＭ１から巻き起こった磁気嵐は天空のオーロラにまで届き、薄紫に揺らぐ光のベールに巨大な拳（こぶし）で殴った

かのような幾つもの歪(ひず)みを映し出していた。

それは、巨大な何かに抵抗して、鉄仮面の男が懸命に戦った証(あかし)のように見えた。

ブラック・ゴーストのアラスカの極秘施設は跡形も無く消え去った。

ピュンマ《008》も、赤ん坊(イワン)《001》を抱いたギルモア博士も佇(たたず)んでいた。

「鉄仮面のあの人は、どうして……?」

フランソワーズ《003》の質問にジョー《009》が答えた。

「改造された理由は、人それぞれかも知れない。でも彼は

〝科学〟の素晴らしさも信じていたんじゃないかと思う。同じ力が〝悪〟にも〝人の救け〟にもなる。改造人間(サイボーグ)の僕たちだからこそ——それを強く、感じられるのかも知れない……」

「彼の名前は、ジョン・ケーン・スミス。私は、絶対忘れません……」

シンシアは天空のオーロラに誓うようにそう言った。

ドルフィン教授とシンシアの救出に成功したジョー《009》たちは飛行艇《ボンバルディアCL-415》で帰路についた。

跡形も無くなったアラスカの施設址（あと）——。
シェルターに隠れていた施設の職員が漸（ようや）く穴倉から出て情況を把握した。
「まさか、ここまで酷（ひど）いことに……」
「スミス隊長の言っていたことが本当になったのか……」
「生体反応は……？　生きている奴は、他には居ないのか？」
二人の職員はセンサーを取り出し、周囲の生体反応をチェックした。
「ん——？」

微かな反応が検出された。
「これは、スミス隊長のキャラクター・フリークエンシー《固有周波》だ――」
「応援を呼んで回収させよう。彼の身体にはたんまり金が掛かっているからな。何度でも直して役に立ってもらわなければ元が取れないというもんだ」
「ああ、まだまだ闘ってもらう」
ジョン・ケーン・スミスには、死による引退すら許されなかった。意識を失っても経験を積んだ戦闘ロジックだけを残され、再改造を受け、新しい仮面を付けられ、また、別の戦

場に送り出される。闘うためだけに生かされる、永遠の戦士――。それがジョン・ケーン・スミスの避けられない運命(さだめ)なのかも知れない。

操り蜘蛛ラズバ

暗い、岩の剝(む)き出した地下洞窟(どうくつ)の中心だった。新宿の地下の底で、女と、青白き炎のような霊体が向き合っていた。

〝ラズバよ、操り蜘蛛(ぐも)ラズバよ――〟

青白き炎は揺らぎながら女に話し掛けた。

「アトゥン様、貴方(あなた)様が現(うつつ)に降臨するに相応(ふさわ)しき宴(うたげ)が、整いまして御座います――」

女は青白き炎に向かい腰を折り、慇懃(いんぎん)に礼をした。

「数知れぬ人の魂を、贄(にえ)としてお捧(ささ)げ致しましょう――」

〝我は待つ、揺らぎの世界で――〟

青白き炎はそう言うと、次元の狭間(はざま)に跳躍し、気配とその姿を消し去った。

「フフフフ……」

女は不気味に笑った。

その笑みは、次第に地を震わせる振動を伴なった。激しく揺れ、女の躰(からだ)は地面を割って急激に持ち上がった。それは何か別のものに持ち上げられたのではなく、足の底に繋(つな)がった巨大な本体が押し出していた。

巨大な蜘蛛の姿が露(あら)わになった。

人の姿を取っていた女の躰は顔だけを残し、変化して巨大

な蜘蛛に融合した。
操り蜘蛛ラズバは膨らんだ臀部(でんぶ)を揺さぶった。
「子蜘蛛たちは充分に揃った。さあ、人間どもに、恐怖と絶望を与えようぞ――！」
巨大蜘蛛の頭に付いた女の顔が、醜く笑んだ。
「わりぃな、そうはさせねえ――」
背後で男の声がした。
「きッ…、貴様ッ――?!」
「そんなに驚くなって、おっかねえデーモンのくせに、みっともねえぜ」

闇の中に不動明が立っていた。
躰を取り巻く気迫が渦を巻き、衣服が散り散りに破け散った。明は悪魔の姿に変化した。
「お前の子蜘蛛たちとは前に病院で遣(や)り合った——。流石に、この俺のことは、わかってるようだな?」
デビルマンになっても、巨大蜘蛛の方が四倍の大きさはあった。
「アモンの力を奪った人間だな——?」
「ああ——そうだとも、この俺が、悪魔人間(デビルマン)だッ!」
言うと同時に駆け込み、間合いを詰めたデビルマンは刃物

のように鋭く分離させた腕の肉鰭でラズバを逆袈裟懸けに斜め下から攻撃した。

ズサッ――！と、デビルマンの先手の攻撃が決まった。

「おッのれえッ――！」

ラズバは第二撃を素早く避けると、八本の脚を器用に使い、穴の中を巧みに移動して、そのまま駆けて行った。

――チッ、外に出るつもりか……！

ラズバは狭い地中での一対一での闘いは不利だと判断した。デビルマンと名乗る者の強さは知らないが、アモンの武勇は厭というほど知っていた。それに子蜘蛛を通して

悪魔人間(デビルマン)は闘いの中でも、人間の命を守ることに固執しているのを知っていた。人間の傍で闘い、人間の命を人質にするのが効果的な闘いだった。

デビルマンはラズバを追った。飛び掛かり、何度か縺(もつ)れながらもその動きを止めようと試みたが、弾(はじ)かれ、壁に激突し、いつの間にか地下鉄の壁を貫通して破り、人間の生活圏に誘(おび)き出されていた。

——くッそぅ……!

ラズバはその巨体に似合わず、地下鉄のトンネルぎりぎりの躰で駆け抜け、夜を迎えた地上に飛び出した。

外神田(そとかんだ)下の神田川沿いの地上に丸ノ内線(まるのうち)が出る場所だった。

外に出たラズバは八本の脚をグイと突っ張り、西に方向を変えて仙台堀(せんだいぼり)の川面を水飛沫(みずしぶき)を立てて弾き、猛スピードで駆け抜けた。

——チッ、何処まで行くつもりだッ……！

デビルマンも赤黒い翼を広げ方向を変えると、ラズバを追跡して飛んだ。

巨大なコンクリート製のアーチ橋が迫った。

聖橋(ひじりばし)だ。ラズバはその下を潜り抜けると、その渓谷に位置

する御茶ノ水駅のホームに霧を噴きかけるように無数の子蜘蛛を撒き散らした。

子蜘蛛に寄生された人々は次々と周囲の人間に襲い掛かった。

ラズバは通過しながら確実に犠牲者を増やした。デビルマンは被害が広がるのを横目で見ながらも追い掛けるしかなかった。

巨大蜘蛛は水道橋の手前で脇の地下水路に進路を変えると、狭い水路を巧みに抜け、口を開けていた建物の地下に潜った。

デビルマンもそこに飛び込んだ。そこは何か大きな施設の地下倉庫のようだった。

ラズバは一度すべての脚を屈折させて縮めると、勢いをつけて一気に脚を伸ばし、広い天井を突き破って外に跳び出した。

歓声が悲鳴へと変わった。そこは観戦客で満員のドーム球場だった。

マウンドに大穴を開けて、突然、飛び出した大化物に球場は一瞬にしてパニックに陥った。金切り声がこだました。

ラズバはスタンドに子蜘蛛たちを撒き散らした。

逃げようとする者たちが次々と折り重なって倒れた。遅れ

て、穴からデビルマンが飛び出たときには、パニックは既に蔓延（まんえん）し、デビルマンの姿に改めて驚く者もなかった。

「どうだ、デビルマンとやら――！　我らが闘うには、お誂（あつら）え向きの舞台だとは思わないか――フフフフ……！」

ラズバの子蜘蛛に寄生され、既に客の半数が狂い始めていた。

――チッ、もう、こいつを斃（たお）すしかねえってことか……！

大蜘蛛の頭の上に乗っている女の顔が醜く笑んだ。ラズバの言う通り、死臭が漂い始めたドーム球場はローマの闘技場・コロッセオの様相を呈していた。

車に戻り、新宿御苑近くの路肩で待機していた飛鳥了は、ラジオの野球中継が阿鼻叫喚(あびきょうかん)に変わり、ドーム球場を襲った事件の一報を臨時ニュースが伝えるのを聴いた。

——地上に出たのか……?!

了は急いでエンジンを掛けるとロードスターのハンドブレーキを外し、ドーム球場に向けて発進した。

デビルマンは憤怒(ふんぬ)の表情で吐き出すように叫んでいた。

「ふざけやがって!」

止められない猛攻への欲情が明の精神を支配していた。それはデーモンの戦士・アモンと融合したことによって生まれ

た悪魔の禁域に属す闘争本能に他ならなかった。
「うおおおおおおーッ！！！」
大蜘蛛の身体を無造作に掴み、剝がし、脚をもぎ、貫き、打ち据え、咬みついた。
悪魔の肉体が臨界を迎えるほどの破壊力の限りを尽くし、日常と乖離した残虐な景色が広がった。
その光景は、最早、一片の遠慮もない本能の闘いだった。
悪魔が、見た目通りの悪魔として暴れていた。
ズゴッ、ズガッ——！
操り蜘蛛ラズバは、表皮をボロボロに剝がされ、内部の白

い筋の束を覗(のぞ)かせた。
醜い女の顔がまた笑った。
「フフフ……」
「何がおかしい——!!」
千切れたラズバの肢体のそこそこからシュルシュルと糸が伸びた。伸び出した白い筋の束はデビルマンの首や手足に巻き付き、その動きを封じ込めた。
「——ンッ、ゴゴゴッ……！」
苦しみながらも渾身(こんしん)の力で引き寄せると、蜘蛛の輪郭を留めた白い躰(からだ)に辛うじて乗っていた女の顔の皮も、ぺらりと剝

がれ落ちた。
――なるほどなッ、蜘蛛の糸の方がお前の本体かッ
……！　おもしれえッ、上等だぜッ……！
眼の奥に赤い光が宿った。肉体の苦しみがデビルマンの闘争本能を蘇（よみがえ）らせた。
そのとき、シュボッ！　と、何か機械的な音がした。スタンドの上から飛鳥了がランチャーにセットした火炎グレネードを発射させた。
――了……！
風切り音を上げてグレネードが飛んで行った。
それはラズバの本体である白い躰に接触し、着火した。そ

の威力は躰のサイズに比べれば小さいものだったが、デビルマンはその隙を見逃さなかった。
手を拘束する糸束を嚙(か)み切ると、首の糸を解き、両腕の鋭い肉鰭の刃で交互に切り裂き、飛び退いて下がって距離を取ると、眉間(みけん)の触角から激しい雷撃を放った。
シュババ、バシバババッ……！
「うおわッ……！」
ラズバは怯(ひる)んだ。
明は本能に抗(あらが)わず、地獄の業火を思いながら深く喉(のど)を唸(うな)らせた。

「うううッ、ぐごッ、ごごごッ、ぐごごッ、ゴゴゴゴゴゴッ！！！」

デビルマンの口から大火炎が吐き出された。

炎に包まれたラズバの白い躰はメラメラと燃え上がり、ドーム球場の幌（ほろ）に焼き穴を開けて、赤く焦がされた夜空に消滅した。

ラズバは死んだ。子蜘蛛たちも消滅し、生きていた観客席の人々は意識を取り戻したが、そこに立つ悪魔を見て、まだ、悪夢の中に居るのだと思い、改めて意識を失った。

死んだ人間も大勢いた。事実はすり替えられても、もう、彼らが生き返ることはない。

飛鳥了は観客席を見渡した。
――これほど大っぴらに大勢の人間に目撃されたのは初めてだ……。いつものように、忘れてくれればいいが……！
了は自分のサマーコートを脱ぐとすぐさまデビルマンに向けて走った。
デビルマンは縮みながら裸の明の姿へと戻り始めた。了は倒れそうになった明の躰を支えてコートを着せた。了が夏でも薄手のサマーコートを愛用しているのはこのためだった。
「歩けるか、明――？」
「ああ――来てくれて、助かったぜ……」
生き残った人々が正気に戻る前に、二人は球場を去り、車

で了のマンションに戻った。

数時間後――ドーム球場で起きたこの騒動は天然ガスの噴出による爆発事故として片付けられ、ガスによる意識障害と集団パニックとが齎(もたら)した悲しい事故だったと報道された。

その瞬間、操り蜘蛛ラズバとデビルマンの闘いを記憶に残す者は不動明と飛鳥了以外にはいなくなった。

――それでいいんだ……。

飛鳥了はTVのニュース報道を観ながら、心のうちでそう呟(つぶや)いた。

不動明も同じ思いだった。

――ああ。そうでなけりゃ、人間は耐えられねえ……！

この日ばかりは、何者かによる記憶の操作を心から感謝した。

エピローグ

アラスカから戻って数週間が経った——。

その日、〝断崖(だんがい)の屋敷〟に黒い幽霊団(ブラック・ゴースト)からの新たなる挑戦状が届いた。

通信は海底洞窟(どうくつ)の基地に直接コールされ、居合わせたメンバーたちは揃ってそれを聞いた。

通信の主はギルモア博士と共に《プロトサイボーグ計画》に携わっていた、あの、ウラノス博士とガイア博士だった。

その姿は球体マルチスクリーンに大きく映し出された。

「ギルモア君、プロトサイボーグの諸君——。アラスカでの

活躍は聞いているよ」
黒眼鏡のガイア博士は口元に笑みを浮かべていた。
「連絡したのは他でもない。諸君に是非とも闘ってもらいたい、新しいサイボーグチームが完成したのだ」
「新しいサイボーグチーム……？」
「私とウラノス博士が手塩に掛けた、次世代サイボーグ・ミュートス・サイボーグだ。座標はそちらに送った。楽しみに待っているよ」
ガイア博士は楽しそうに言った。
「ミュートス……。神話だと？」

気取った命名にアルベルトが胡散臭そうに反応した。
ジェットも苛立ちを隠さなかった。
「そんなことで、俺たちがこのこと出て行くとでも思ってんのか――馬鹿らしい……」
と、吐き捨てた。
ガイア博士がモニターの中で笑んだ。
「我々が造ったサイボーグは芸術だ――。新しい世界の〝神〟と呼ばれるに相応しい存在なのだよ。〝神話〟になぞらえたミュートス・サイボーグたちを、もし、斃せば、つまり、諸君が〝神〟に成れるのだ。〝神〟に成りたいとは思わ

ないのかね――？」
「妄想も、とうとうそこまでいったアルか。いや、気の毒アルねー」
張々湖が呆れて背を向けた。
ガイア博士は演説の如く、意気揚々と語った。
「さあ、雌雄を決しよう。諸君が来なければ、我々はミュートス・サイボーグで全世界に向けて攻撃を開始する――。無差別に、徹底的になッ――。未然に被害を食い止めたいのであれば、迷わず来るべきだ――」
それまで沈黙を守っていたウラノス博士が前に出て付け加

えた。
「こんなかたちで挨拶を交わすのは残念だが、これも運命。こうなった以上は正々堂々決着をつけよう」
「これは脅しではない。諸君も〝裏切り者〟と呼ばれるよりは〝神〟と呼ばれる方がいいのではないかね？　うふふふ……。では、待っているよ」
最後にガイア博士がそう言うと通信終了の挨拶も抜きで、勝手に回線を切断した。
ピュンマが送られて来た座標をスクリーンに表示させた。
「エーゲ海の孤島ですね。火山地帯の無人島を、島ごと改造

したもののようです」
監視衛星の画像を拡大すると、オリュンポスそのものの建築物まで並んでいた。
「何を考えてるんだかねえ……」
グレートが頭を掻(か)いて呆れた。
「どうする、ギルモア君？」
コズミ博士が尋ねた。
「ええ、彼らの誘いは、余りにも独善的であり、幼稚で、強引で、相手にもしたくありません。だが、彼らが保有する脅威は、疑いようもなく実在する現実だ」

ギルモア博士は九人のサイボーグたちを見渡した。
「君たちに闘ってくれとは言えない。君たちの意見を聞きたい——」
九人のサイボーグたちは互いを見て頷き（うなず）を交わしてから、ギルモアを見て、大きく頷いた。
全員の意思は決まっていた。
「でも、どうやって行けば……。まだ、あの潜水艇は……？」
ジョーがそう言うと威勢のいい声がした。
「それなら、心配はねぇッ。たった今、完成したぜッ！」

いつの間にか顔を出した棟梁（とうりょう）の松五郎が頼もしい笑顔を見せた。

「今し方、マルチレーダーの調整も済んだところだ。行けるぜッ。もう、完璧（かんぺき）のペキちゃんだ――」

「行きましょう」

赤ん坊（イワン）を抱いたフランソワーズがそう言うとジェロニモも頷いた。

日本に戻ったウィリアム・ドルフィン教授はマルチレーダーを設計してくれた。

ギルモア博士は彼の技術を平和のためにのみ使うと深く心に誓い、それを決して忘れないように、万能潜水艇の名を〝ドルフィン号〟と命名した。

九人のサイボーグを乗せた万能潜水艇は海底洞窟を抜け、断崖の下の洋上にゆっくりと浮上した。

断崖の上からギルモア博士とコズミ博士、それに棟梁の十文字松五郎が見送っていた。

海にも、彼らを見送るかのように跳ね回るイルカのフィンピーの姿があった。

彼らは〝裏切り者〟ではない。彼らは〝背徳者〟でもない。改造人間(サイボーグ)も悪魔人間(デビルマン)も、守るべきものを持っていた。

操縦桿（そうじゅうかん）を握るピュンマは飛行モードに主翼を可変すると声高く叫んだ。

「ドルフィン号、発進ッ！」

その名の通り、美しくも愛らしいイルカのフォルムをしたドルフィン号は、波を越え飛び立ち、ミュートス・サイボーグたちの待ち受けるエーゲ海へと飛翔（ひしょう）した。

了

カバーデザイン／舘山一大

サイボーグ009VSデビルマン

トゥレチェリイズ～裏切り者たち～

原作　石ノ森章太郎　永井豪

著　早川正

角川e文庫

平成27年9月25日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川文庫『サイボーグ009VSデビルマン　トゥレチェリイズ～裏切り者たち～』
平成27年9月25日初版発行

発行者　郡司 聡
発　行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8521（カスタマーサポート）

http://www.kadokawa.co.jp/

Digital Distributor
eBOOK Initiative Japan Co., Ltd.
http://www.ebookjapan.jp